
愛しき人へ...

結城 カイン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛しき人へ…

【Nコード】

N0724I

【作者名】

結城 カイン

【あらすじ】

宿禰凜一と恋愛をする同学年の水川青弥の視点で描きます。中途半端から始まりますが、これ以前は友人が書いたため、そちらは残念ながら載せられません。ノンケで恋愛経験の少ない優等生が、宿禰凜一とどういう恋物語を綴っていくのか…「one love」「GLORIA」と連動。

第一章 引力 1 (前書き)

高校一年の水川青弥は、学年トップの優等生だが、なかなか心を打ち解けない慎重な性格。

人の目を引く、魅力的な同級生宿禰凜一に交際を求められ、一旦は断るが、自分も惹かれていた事に気づき、二人は付き合う事となった。

純情な水川は、奔放な宿禰に警戒心をなかなか解けない。やっとキスまでは許したが、その先にいくことを拒み続ける水川。

そうして、ふたりは初めてのクリスマスを迎えた。

宿禰凜一編は「one love」

<http://ncode.syosetu.com/n8107h/>

兄の宿禰慧一編は「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100h/>

藤宮紫乃編は「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768i/>

で読めます。

第一章 引力 1

> i 5 1 8 3 — 2 7 3 <

昔、子供の頃、サンタクロースは存在するものだ、本気で思っていた。

クリスマスイヴの夜、絶対にこの目でサンタクロースを見てやるんだと寝ずの番をしていても、睡魔はすぐに襲ってくる。

母親が作った枕元の赤い毛糸の靴下をじっと見つめながら、おれは絵本で見たサンタクロースに胸をときめかせていた。ただプレゼントを欲しがったわけじゃない。

あの胸いっぱいにくくらんだ気持ち、それが一体何なのかを解き明かしたい…そう思ったからだ。

クリスマスの朝、しんと冷たい空気が広がる部屋。目覚めたおれは、枕元を見る。

毛糸の靴下にはこぼれる程のお菓子と、その脇に目的のおもちやが赤いリボンに飾られて置いてある。

喜びよりも、いつの間にか眠ってしまった自分を悔しがり、来年こそはと心に誓った。

小学4年の時、級友たちから聞かされたサンタクロースの正体は、胸のときめきを一気に消失させるものであった。家に帰って母に問いただすと、母親は困ったように首を傾げ、級友たちの言葉を肯定した。あの時の失望感は今でも忘れられない。

おれはあれから、心沸き踊るクリスマスを味わったことは一度もなかった。

しかし、今年のクリスマスは違う。

バカみたいに胸がざわついて仕方がない。
すべては宿禰凛一という男の所為だ。
大体…

おれが恋に浮かれる事自体がおかしいんだ。

今までだったら誰かを好きになっただらなっただ、自分の首を絞めるような、苦しいわずらわしさしか感じたりしなかったのに、今のおれはどうだ。

リンの事を想うだけで、動悸が激しくなったり、顔が熱くなったり…
相手は同級生のしかも男だぞ？おれ、ホモだったのか…と、悩むよ
り、リンがおれを好きだと言ってくれる事のほうが数百倍も上等だ
と判明するわけだ。

この事実は誤魔化しようもない。

何を言われたとしても、おれがリンを好きな気持ちはぶれないでい
られる。

その思いすら尊いもののような気がする。

クリスマスイヴは朝からヨハネ寮の住人たちは大わらわで、休んで
いる暇はない。

ホールの飾りつけや、イベントのリハーサルに、プレゼントやお菓
子の調達。

おれも一応寮生だから、二年生の指導で色々やりこなさなきゃな
らない。

二年生の仕切り屋がのんびり屋の一年に檄を飛ばしているのを幸い
に、こっそりホールから抜け出し、一休みしようとしていたところ、
後ろから声をかける奴がいた。

「水川、準備終わった？」

こいつは…そうだ。リンのクラスの三上敏志だ。

「ああ、おれの分はね」

「ちょっと、話があるけど、いい？」

あまり話した事はないけれど、リンはこいつと親しいと聞いた事がある。

「いいよ」

「じゃあ、屋上に行こう」

話ってなんだろう。真冬に屋上なんか誰も来ない。寒いから当たり前。

「宿禰の事だけ…」

多分それしかおれと三上の接点はないだろうから、予想範囲内。

「水川は宿禰と仲がいいのか？」

「…うん」仲がいいと言われたら肯定するしかないだろうと思って頷いた。

「そうか…じゃあ、宿禰の言ってたかわいい子って…水川の事だったのか…」

「か、わいい？」

啞然となる。いや、リンは結構な割合でおれのことをかわいいと真顔で言うが、いつもの気楽ないいがかりだと思っていた。

…気分が悪いわけではないが、他の奴にそんな風に言ってるって…寒風に晒されているはずなのに、顔が火照ってくる。

「ああ、時々だけどすごく嬉しそうに話してくれるんだよ。うすうす男かな」とは思っていたけど…水川だったとは」

こうなると、バレて嬉しいのか、むなしいのかわからなくなる。やっぱり普通じゃないと思っっているんだろうか。俺は三上を複雑な表情で見つめた。

「いや、別に変な目で見てるんじゃないから。この学校じゃ男同士も珍しくないし、宿禰だったら男も女もほおっては置かないだろうし、気分悪くしないでおくれよ」俺、水川を怒らせたら宿禰になんて言われるか…あいつはすげーいい奴だし、なんつーかさあ、心から信頼できる友人なんだよ」

よっぽど変な顔をしたのだろうか、三上は必死で弁解する。その様

子がなんだか可笑しくて思わず拭き出した。

「怒ってないよ。三上はいい奴だってわかって、なんか安心した」

「良かった俺、宿禰は親友だと思っっているから。おまえらのことも応援するよ」

「ありがとう」

「でも気をつけるよ、俺みたいな奴ばかりはいないぜ。おまえらのこと、影で酷い噂立ててる奴もいる」

「え？」

そんな話は初めて聞いた。もっともおれはそんなのも、こんなのも知らない話ばかりだったが。

「ちよつと前に宿禰の噂話が酷かっただろ？あれも酷い言いがかりだったけどさあ、俺、偶然聞いたの。おまえのクラスの…高橋って奴がさあ、おまえと宿禰の事をめちゃくちゃ言ってた現場にばったり…」

「高橋？」

「おまえ、期末で二位の高橋の点数めっちゃ離してトップだっただろ？だからだと思っけどさあ。歪んだ僻みって奴かね。一周回ったとしてもだ。何故におまえと宿禰の事を詰る意味が俺にはちっともわからん。腹立つたから殴ってやるうかと思っただけど、くだらない奴を殴ってもこっちの手が痛いだけ損だからな。でもおまえも気をつけるよ。ああいうクソムカつく奴は、どうでもいいことに意地になるからな」

「あ、ああ…なんかわかんないけど、気をつけるよ」

「それから…」

「ん？」

「宿禰の事頼むな。あいつ、なんでもかんでも悟っているみたいな顔してるけどさ、良く考えてみりゃ俺たちと同じ年数しか生きていない、ただの16のガキなんだよ。だから色々あると思うんだ。それを表に出してないだけでさ」

「…」

「なんてね、俺より水川の方がよくわかっていると思うんだが、なんかあったら俺も力になるよ。当てにはならんだろうけど」

「いや、嬉しいよ、三上。おれもこんなだからさ、あんまり他人に心を打ち明けるのは得意じゃないんだ。友人になつてくれると嬉しいよ」

「勿論さ。ふたたりを繋ぐ伝書鳩にでもなつてあげようか。と、言っても毎日顔見合わせているから必要なしだな。今日も来るんだろ？宿禰。あいつ案内状貰つて喜んでた。水川が渡したんだな」

「うん、あげたの」と、ワザとかわいくゆつてみた。

それを聞いた三上は大仰に頭を抱え、「うらやましい、俺はきょうはひとりだよ、ユミちゃんにも会えない、よ、神様俺にも御慈悲を」と、曇つた冬空に向かって叫んでいた。

夕方になり、俺は玄関ホールの待合室でリンを待つ。

和風旅館の玄関みたいな木の格子の向こうに、リンが映るのを思い浮かべながら、先程の三上の言葉を反芻した。

「親友」「心から信頼しあえる友人」

おれはリンとはそういう関係にはなれなかった。もしそういう関係だったら……こんな胸のときめきも少しの切なさも感じる事はなかったのだから。

どっちが良かったなんてわからない。

おれはリンに惹かれてしまっているのだもの。

もうリセットして初めからやり直しなんてできやしない。

冬至は一昨日だった気がする。瞬く間に陽は落ちる。

ロビーの灯りが灯される頃、硝子の向こうにリンの姿が見えた。

おれは飛び跳ねるように立ち上がり、彼を迎えた。

玄関の引き戸を開けたリンは俺が待ち構えているのを見て、驚いたように少し仰け反った。

が、すぐになつこりと微笑むと、「ご招待ありがとう、ミナ」と、胸に手を置き会釈する。

普通の輩がやっても様にならないだろうに、リンがやると自然だ。全く嫌味がない。

しかし…なんて奴だろう。

黒のトレンチコートも中に見える臙脂のジャケットも光沢のある黒ズボンも、リンの為にあつらえたみたいに極まっている。

思わず「モデルみたいだ。かつこいい」と呟くと、リンは苦笑する。

その顔にぱーっとなる自分に呆れた。俺はなんて男に惚れているのだろう。

同じ歳なのにこの貫禄と言うか…恋人としては相手がかっこいいのは喜ばしい事かもしれないが、同じ男としては…「自信喪失だ」と、愚痴ると、リンは鼻で笑い「ミテクレだけ見て無くすような自信は、初めから無い方がマシだね」と、言う。

「…」

そりゃそうだがね。それは、自信のある奴の驕りで、おれみたいな世間一般の男子には、おまえはすべてにおいて、癪に障る奴なんだよ。

多分全くわかっていないだろうけど…

荷物を置きに俺の部屋へ案内した。

部屋に入りふたりきりになると、リンはおれにクリスマスのプレゼントをくれた。

スワンスタビロの水彩色鉛筆だ。リンの亡くなったお姉さんのも

のらしい。

そんな大事なものを、と思うが、使ってくれたら嬉しいと言われ、ありがたくいただく事にした。

実は結構欲しかった画材で、値段的に躊躇していたので、とても嬉しかった。と、いうよりおれの欲しかったものが何故わかったんだろうという疑問と、別な心配のために、喜びの表現としてはかなり乏しいものになったことは否めまい。

心配は…リンへのプレゼントだった。

正直なにも考えていないわけではない。と、いうかめちやくちや考えて考えて…考えた末に買った物は、あまりにもスタンダードな「毛糸の手袋」という代物で、おれは自分のセンスの無さにリンにあげるのが恥ずかしくなってしまったのだ。

しかも、リンからはこの上ないプレゼントを貰ったにも関わらずだ。

…出そうか出すまいか迷った挙句、恋人からのお返しが無いではあんまりだと思い、俺はリンの目の前にリボンがけの袋を差し出した。

バカにされるのも覚悟しつつ渡したら、リンは思いもよらぬほどに喜んでくれた。

おれはあまりにも嬉しくて、リンのキスの催促に、自分からしたいと申し出た程だ。

正直おれは自分からリンにキスをしたり、求めたりしたことは一度もない。

リンとするのだって最初のキスが、信じられないくらいに激しかったから、おれはあれが当たり前だと思ったら、自分が節操が無さ過ぎるように気がして、その後はやたらと嫌がって見せたけど、本当は嬉しいんだ。

好きな相手と身体を寄せ合ったり、手を繋いだり、お互いの呼吸の音や、唇の感触を感じるのがこんなに心踊るものとは、想像でき

なかった。

リンがおれを抱きしめる前に、おれはリンの両頬に指を添え、顔を上げながらリンの口唇に触れる。震えているのを気づかれる前に口を開け、舌を入れた。

リンの両腕がおれの背中を抱きしめる。

なんでこんなに…おれはこいつを好きなのだろう…音を立ててお互いの口の中を味わいながら、バカみたいに何度も思った。

根元先輩が現れて、おれ達の逢い引きも終わってしまったが、おれはその後もなんだかふわふわした気分そのまま、寮祭のお祭り騒ぎ処じゃなくなってしまうていた。

寮祭が終わると、招待された寮生以外の生徒がぞろぞろと帰っていく。

リンも三上や先輩達に軽い挨拶まわりを終えると、おれに「またね」と、言い、靴を履いた。

おれはコートを羽織りながら玄関を出て行くリンの背中を見て、このままここで別れてしまうのが惜しくなり、リンを追いかけた。

「今日はおれが誘ったんだから、リンを家まで送る」と、言うつもりは嬉しそうに笑った。

「あげた手袋はしないのか？」と、聞いたら「代わりがある」と、おれの手を握った。

お互いの冷たい指の一本一本が握り合わさっていく。お互いの手の平があつたかくなり、おれ達は顔を見合わせて微笑んだ。

なんだろう：こんなひとつひとつのリンとの繋がりが、とても大切な：たまらなくいとおいしいものに感じてしまうなんて。

おれは本当にどうかしてしまったらしい。

自然に口元が緩んだまま、しまりがなくなっている。

バカみたいに幸せだ。

会話は自然とさっきのパーティーの話となる。

寮祭の出し物で、くじを引いたものは紙に書かれていることをやらなくちゃならなくなり、リンと三年の美間坂先輩で、アルゼンチンタンゴを踊る羽目になったのだけど、即興といいながらも、ふたりとも見事に踊りこなして拍手喝采だった。まあ、最後に転んでリンの上に美間坂さんの身体が乗っかって、危うくキスする寸前になったのはサービスだろう。ふたりともエンターティナーだ。

一見仲が悪そうに見えたリンと美間坂さんだけど、先輩の恋人の桐生さんに言わせれば、「同類相求むだよ。美間坂は宿禰のことを

相当気に入ってるよ」と、微笑んでいた。

美間坂さんと桐生さんは誰もがうらやむほどの絵になるカップルで、男同士の恋人といってもちつとも変に見えないし、あれだけ堂々としていると、偏見の目で見る方がやましい気になってくる。

「あの二人を見ていると、男同士の恋愛って成立するんだなあ〜って、なんだか信じたくなる」と、言つと「ミナは俺と恋愛しているって思っていないの？」と、問われた。

「…リンのこと、好きだけど…」それに嘘はない。

だけど「やつぱり、このまま行っていいのかなあつて…」と、口ごもってしまった。

おれがなんのことを言っているのか、多分リンはわかっている。

おれは、リンと身体を繋ぐことが怖いんだ。

過去のまずい経験からも、男同士だからって事にしても、おれはセックスに対して臆病どころか、怖気づいてしまっている。

リンはうつすらとは気づいているんだろう。

今までだって無理強いはしていないし、おれを大事に扱ってくれている。だけど、普通の恋人だったら、お互いを欲しいと思うのは当たり前だし、身体を繋ぎたいって、求めるのは自然の成り行きだ。リンがおれを強く求めたら、おれは抵抗しないだろう。

だけど、おれはそれをちゃんとリンに与えてあげられるのか。リンはおれに失望しないだろうか。

リンは経験に不安はないだろう。相当に遊んでいるとは、自分で言つてた。それを罵る気は無い。

だからこそ、リンとのセックスが上手いのかどうか…おれには自信なんてものはない。

それでもやつぱりおれだって、リンが欲しいと思う。

リンのマンションに着くと、お別れしなきゃならない。

リンは泊まるように誘ってくれたけど、まだその勇気も自信もな

いんだ。そのくせこのまま離れてしまるのが寂しくて堪らない…と
思ったら、目頭が熱くなって、涙が込み上げてきた。

どうしようもない。

おれは弱虫だなあ…

リンはいつもの冗句でおれの涙を笑い飛ばしてくれたけど、おれ
は申し訳なくてたまらなかった。

なにひとつおまえの欲しがるものをあげられないなんて…

マンションのエントランス前で、寒いのも構わず、おれが帰るの
をずっと見送ってくれるリンの姿が嬉しいのと寂しいのと情けない
気持ちがごっちゃんになって、おれは寮に帰り着くまで涙が止まらな
くなった。

寮に帰り着いたおれは、部屋にいた根元先輩にリンとの事を散々
からかわれた。

どこまで進んでいるのかをしつこく聞く先輩にしかたなく白状す
ると、呆れた顔で、「みなっちが宿禰とセックスしないって言うん
なら、僕が先にいただいちゃうよ」と、言われ、本気で先輩を殴り
たくなった。

次の日、おれは世田谷の実家に帰った。

5年前、狭いながらも庭付き一軒家を買った我が家は、30年口
ーンを返す為、メーカー企業の技術屋として必死で働く親父と、2
年程前、医療事務の資格を取ったという母親が近くの病院でパート
として働いている。

久しぶりのひとり息子の帰郷に、両親は大歓迎で迎えてくれるが、
それこそおれには心重たく、クリスマスなのに何故に焼き焼き…と
思いつつ、食卓に付く。

「このお肉百グラム千円もしたのよ」と、声を上げながら、母親
は嬉しそうなおれの取り皿に、その高級な肉を分けてくれる。取り
皿が肉で溢れている…

父親は発泡酒を飲みながら、満足そうにおれを見て笑っている。

…いい人たち過ぎて逆らえないんだが、ヨハネ学院を受験すると
決めた時はさすがに猛反対にあいまくった。二日間ほどプチャ家出ま
でしたおかげで、なんとか許してもらえたけど、おれが寮にいるこ
とも未だに不本意らしい。

「お父さん、青弥は期末も学年一位だったのよね〜すごいわ」

「じゃあ、将来は学者か医者だな。政治家になるには金がないから
無理だが、官僚っていう手もあるぞ。どっちにしてもT大は、間違
いなさそうだな」

「…そんなの勝手に決めないでよ。おれ、まだなんにも決めてない
し、大学だっておれが行きたいところに行くから」

「それはいいが…私立に行かせる余裕はないから、絶対国立だぞ」
「…」

こう言われると、絶対にT大に行つてやるものか!と、思っわけ
だ。

「言われなくても青弥は、ちゃんと考えているわよね〜」と、母親

はまだ残っているおれの皿にまた肉を置く。

二階の自室に戻ってやっと一息ついた。

すき焼きの後、クリスマスケーキの登場でおれはもう吐きそうになるくらい満腹だ。

苦しさのあまりベッドに寝転んだ。腹だけじゃなく精神的にも満腹すぎて苦しい。

親の愛情とはああいうものなのか？それとも将来に対する子供への投資なのか？

俺はそういう現実から逃げ出したくて、目を瞑り、ひたすらにリンを思った。

何をしているのだろうか。声が聞きたい。

今日はアメリカからリンのお兄さんが帰ってくると言ってた。

リンのお兄さんって、かっこいいんだろ？なあ〜

おれも兄弟が欲しかったかな…などと考えていたら、いつのまにか眠ってしまった。

目を開けたら、夜中の一時。

しまった、リンに電話をかけ損ねた。

どうしよう、もう今からじゃ遅すぎるよなあ…いくらなんでも午前一時だ。

携帯を持ったまま、じつと液晶画面を見つめた。

すると突然画面が光り、呼び出し音が鳴り始める。画面の文字に恋人の名前がある。

おれは急いで通話ボタンを押す。

『わ、取るのはやく』と、リンの笑う声。

格好つかないおれはつい天邪鬼を披露する。

「たまたま…携帯を見てただけだよ。別にリンからの電話を待って

たわけじゃない」

『ふうん、じゃあ切ろうか』いやらしそうに言うリンの勝ち誇った顔が浮かぶ。

おれは無言のまま向こうの出方を見る。

『ミナの頑固さに免じて俺の負けにしといてやるからさあ。今何してるの？』

「え…勉強」してないけど。

『おまえクリスマスの時ぐらい頭休めろ。ますます目が悪くなるからな』

「もう遅いつて。それよりリンは何してるの？お兄さんが帰っているんだろっ？」

『うん、空港まで向かえに行ったんだけど、飛行機が遅れてさあ。』

そのまま新宿の ホテルに泊まることになったの。しかもクリスマスで満員、スイートがひとつだけ開いてたんでそこに泊まることになったんだよ。なんで兄貴とスイートなんぞに泊まらなきゃなんねえわけ？ミナとならただけどさあ…』

「バカ、おまえとスイートなんか泊まんないよ。高校生のくせにそんな高いホテルなんか…」

スイートどころかそんな高いホテルに泊まったことなんかない。

やっぱりリンは一般人のおれとは違うんだろっか。

『そんなことより、おまえ正月どうするの？』

「正月？別になにもしないけど、リンは？」

『俺は、家族と…父さんと新しいかあさんね、の四人で箱根温泉でお正月を楽しむんだって。無理矢理だよ？こっちの意見なんかねえの。いきなり親父から連絡来てさ。家族水入らずで箱根で正月くだもんなあ。しょうがなく付き合っつてやんの』

…うらやましい…そんな正月してみたい。と、正直に言っても物欲しそうに見えるから、良かったねと軽く相槌を打つ。

『いつ寮に帰るの？』と、聞かれ「五日には戻れる」と言うつと

『じゃあ六日は一緒に初詣に行こう、いいね』と、言われ、有頂天になった。

後はなんか訳のわからないことばかりで、自分でも呆れてしまったが、電話を切ってしまった後は、リンと一緒に初詣することを思うだけで胸が一杯になり、中々寝付けなかった。

新年になり、もう少しと引き止める親の言うことも聞かず、五日になると早々に寮に帰った。

やっぱりここはおれにとつての楽園だ。

少々意地悪な先輩がいてもだ。

根本先輩が持つてきたお土産のお菓子を食べながら、明日の事を言うつと、「じゃあ、せっかくだから一発目は青姦でやれば？」と、言われ、何の事か全くわからず、翌日、その意味をリンに聞いたら大爆笑された。

意味を知って顔を真っ赤にしたおれをリンは抱き寄せ「さすがに冬に外ではやんないよ。ミナが風邪引きそうだもん」と言う。

そういう問題じゃないだろうと、眼鏡越しに睨んだが、リンはお構いなしにおれの頬にキスをした。

…もういいよ。これくらいは…と、諦めた。

八幡神社はさすがに人の山だった。

やつとの事でお参りを済ませ、おみくじを引いたら、リンは大吉でおれは小吉だった。

少し拗ねると、リンは「じゃあ、ふたつを合わせて割り勘にしよう。そしたら、中吉になる」と、笑い、ふたつのおみくじを重ねて折り、神社の木に括りつけた。

「ほら、これでミナと俺は今年も仲良くできるというわけだ」と、振り返るリンがどうしようもなくいとおしい。

こんな少女めいたことをされてもちつともシラ気ないなんて…いや、めっちゃくちゃ嬉しくてたまらない。

それなのに不誠実なおれは、お礼も言えずにただ俯くだけだった。だって、顔がにやけるのをリンに見られたくなかったんだ。

三学期はあっという間に過ぎていく。

おれ達は相変わらず温室で二人の時間を楽しんだ。

日が暮れるのはまだ早かったが、リンが持っていたアロマキャンドルのおかげで、冬の色気の無い温室が華やかになる。

「これローズマリーだって。やっぱり本物の方が、やわらかい匂いだなあ」

「昔はローズマリーってバラの種類だって思っていた」

「まあ、そう思うよね。S & Gの『スカボロフェア』の歌詞に Parsley, sage, rosemary and thyme, っであるだろ？あれで覚えたんだ。古歌好きの姉貴がよく歌っていたんでね」

リンはおれの知らない色んなことを知っている。おれはいつも教えられてばかりだ。

リンはすべてに対して豊かだ。おれはリンに何がしかの感性を与えられているのだろうか。

絵を描くことしか取り得の無いおれに…

リンは薄暗い中で、デッサンをする俺のスケッチブックを取り上げて、それを眺める。

「相変わらず、色彩豊かな絵だなあ、鉛筆描きなのに色が見える。

俺のやった色鉛筆は出番無しだな」

「違うよ。あれは大事なもので…減らすの勿体ないんだよ」

「バカ、減ったら今度は俺が買ってやるよ。ミナの為ならバイトをしても買いでやるから」

「そんなの…しなくていいよ」

「冗談でもおれの為にと言う…そういうリンが堪らなく好きだ。」

両親とは違う。追い詰める愛情ではない。
おれを上昇させてくれる愛だ。

二月に入ってもおれ達の関係は崩れない。

言い方を変えれば、キス以上の発展はない。

前にも後ろにも進まない今の関係が良い訳が無い。

おれが悪いんだ。

リンは何度かおれをそういう行為に誘ったりしている。

おれが嫌がる素振りを見せると、リンは無理強いしない。

それはそれで、それ以上おれを求めていないんじゃないかと、別な不安を感じたりする。

勝手な言い草だ。自分でも呆れる。

冬の寒さの中でも温室は暖房を入れなくても暖かくて、のんびり硝子越しの外の景色をスケッチしていると、リンがやって来る。

おれはリンの両手に抱えているものに視線をやった。

片方はいつものカバンだが、もう片方はやけにでかい手提げの袋だ。

「なんか、美術の工作？」

「いや、今日はバレンタインだろ？チョコケーキ作ってきた」

「え？」

バレンタイン？…そんなのすっかり忘れていた…そういや根元先輩がプレゼントどころのこうのつて言ってた気が…

「ミナの為に作ったの。初めてだから手間取ったけど、匂いは美味そうだから、大丈夫だろう」

「…ええっ！お、おれのため？リンが作ったの？…うそ…」

「…そんなに驚くなよ。変なもん入ってないから」

「そうじゃなくて…おまえ、ケーキなんて作れるの？」

「ママさんがお菓子作りが得意でさ。レシピ置いていったの。簡単

に作れるからやってみろつて。で、まあ、いい機会だから…え？チヨコケーキ嫌いだっただ？」

おれは顔を横にぶんぶん振った。

自分がケーキを作るなんて、思ったこともない…から、リンが作れるのがすごいって単純に驚いた事と、おれのために作ってくれたなんて…感動しないわけがなからう。

「箱は適当に、お菓子の空き箱に入れてきたんだけど…崩れていないといいんだけど」

と、リンはおれは目の前に箱を置き、そつと蓋を開けた。

チヨコレートの甘い匂いが温室に広がった。

「良かった。崩れていないや」

「…リン、すごい…美味しそうだよ」

「食べてみてよ」

「え？」

「いや、味見してないから、ミナ食べてよ」

「…もつたいないよ。それにナイフかフォーク…」

「…そんなのないよ」

「…」

「手で食べればいいじゃん」

「いやだよ」

「なんで」

「折角綺麗なケーキを手で崩したくない」

「…あ、そう。じゃあ、持って帰って食べば」

「…そうする」

俺は蓋をして、崩れないようにケーキを平らな机に置いた。

リンはこわばった顔でそれを見る。

「ああ、ゴメン。おれ、リンにチヨコ用意していない」

「え？…ああ、いいよ。正直チヨコはもういい」と、リンは袋の中

を俺に見せた。

数え切れないほどのリボンのついた包みがあった。

「それ、今日貰ったの？全部うちの学生？」

だったら、この学校はまともじゃない。

「いや、朝、学校に来る途中で、女学生5、6人からも頂いた。全く見ず知らずの人なので驚いたけど。靴箱開けりや落ちてくるし部活に行きや、先輩方から嫌味なのかどうだか知らないが、迷惑なほどくれるしさあ…手作りケーキも食ったよ。正直もう俺、プレゼントいらんわ」

「…ですか」

聞いてて気持ちがいいわけが無い。これが嫉妬ってやつなのか…
恋人が出来ると色々とうらめしいな。

まあ、リンは中身は置いといて見かけはめっちゃいいから、これくらいは仕方ないことだと割り切り、大きい気持ちでいないと身が持たないぞ…

「でもミナからはもらいたかったかな」

リンからの催促は最もな話だが…

「悪い。来年は忘れないから。その代わりホワイトデーには奮発す

…あつ！！」と、小さく叫んで気が付いた。

ホワイトデー即ち3月14日は俺の誕生日だった。

たぶんリンは知らない。

その証拠に呆けた顔をしたまま、突っ込まない。

いい事を思いついた。

おれは決めた。

その日、おれのすべてをリンにあげることに。

朝、起きると目の前に誰かの影。

「リン…」と呟くと「ミナ、愛してるよ」と、応えた。

「うん、おれ…も…?…!」

なにかおかしいと思い、目を擦って覆いかぶさっている者を見る。

「ね、根本先輩っ!」

叫びながら、起き上がった。

「何しているんですかっ!」

「みなつちの身体から、あま〜い匂いが立ち込めてるからさあ、ちよつと嗅いでみたくなったの」

「…だからって…」

「君、昨晩は夕食も取らずに、ケーキワンホールを丸ごと食べてたよね」

「それが何か?」

「いくらバレンタインで貰ったからってさあ、あんな大きなケーキ独り占めすることないじゃない。一口ぐらい僕に分けてくれてもいいだろうに」

「先輩、甘いもの嫌いじゃないですか」

この人は見かけの割りに辛党だ。うわばみだつて聞いている。昨日のバレンタインもお酒関係の贈り物が多かった。

「他にもないリン君の手作りケーキだろう? ネタ的にも食べて損はなかったよね」

「ネタにしないで下さい。それにリンはおれにくれたんだ。他の人に食わせるわけにはいかないでしょう」

「わあ、なんと言う独占欲っ! まだ寝てもいなくせに大口叩くねえ〜」

「な、なんで…」

先輩の言葉におれは手にした眼鏡を取り落としそうになる。

「わかるかって？僕はみなつちを毎日見ているんだよ。初体験をしたかしないかぐらい、判らいでか」

「…」

そ、そういうもんなのか…？

かわいい顔して恐ろしい人だ。

とにかくこの人に対しての言動には余程の注意が必要だ。

したらしたでこの人にバレたら…またなんかネタにされそうだ。

「しかし…宿禰も辛抱強いね。まだ手を出していないなんてさ。みなつちの知らないところで浮気でもしているんじゃないの？」

「リンはそんな奴じゃない」

「バカだなあ。あの宿禰凜一だよ。みなつちは何も知らないだろうけど、彼は有名人のひとりだよ。ある一部の特定の場所ではあるけれど…」

「噂は信じない」

「火種がなけりや煙は立たない。少なくとも宿禰は経験豊富だつてことだよ。だからつて軽蔑するのはナンセンス。逆に安心じゃん。みなつちは何も知らないお姫様なんだから、宿禰のいうとおりにしてりゃいいんだもん」

「そういうの、余計なお世話つて言いませんか？おれ…達は真剣に付き合っているんだ。そんな…」

言葉が濁るのはおれに引け目があるからだ。真剣に付き合えば、身体を重ねるのは当たり前。それが出来ていない俺たちは、逆に考えれば、真剣に付き合っているとは言えないのかもしれない。

「…水川はさ、どんだけセックスに夢見てるのさ。それとも悪夢でも描いているわけ？セックスつてただのコミュニケーションだよ。だけど、その行為にはお互いの愛情があるかどうかで、感じ方が違つて事。水川が宿禰にしてあげたい事は何なのかを考えれば、答

えはでるよね」

「……」

「まあ、下の経験なら宿禰には負けないであろう僕からのプレゼントをあげるよ」

先輩は机の引き出しからなにやら箱のようなものを出すと、おれのベッドに投げ込んだ。

「性病の対策は万全にしておくといいね。じゃあ、僕は朝の週番だから、先に学校に行くね」と、部屋から出て行った。

おれはほうり投げられたスキンの箱を恐る恐る手に取り、その使用方法を真剣に読み始めた。

三学期の後半は模擬試験、学年末試験で、温室には寄り付く暇など無い。

自動的におれは宿禰と顔を合わせる回数が減る。

廊下で出会っても、宿禰はおれに対して特別な対応をしてくるわけでもない。

彼は友人たちも多く、いつも回りはにぎやかしく華やかだ。

彼は輝いている。その光で、回りの者まで輝かせている。

とつつきにくいといわれるおれとは雲泥の差だ。

おれは、親友と呼べる友達も居ず、昼休みもひとりで教室で自習か図書館通いだ。別に慣れていないからなんとも思わない……

放課後、レポートのやり直しの提出に理科準備室にいる藤内先生に会いに行く。

レポートを出し退出しようとするおれを先生は呼びとめ、コピーを付き合わされた。

藤内先生とおれはウマが合う。何の気兼ねもいらぬ。

泣いてたところを見られた所為か、あれ以来益々身近に感じている。

「水川のレポートは相変わらず完璧だね。他の連中にもう少し君を見習うように言った方がいいのかもなあ」

「嫌味になるからやめてください。おれは好きでやっているんですよ」

「まあ、勉強は完璧を求めるのはいいが、人生に完璧なんてもんじゃない。反省も後悔もしてもいい。だが何もしないなんてつまらない。せつかく親元を離れて樂園に来ているんだから、水川は勉強以外も学んだ方がいいのかもなあ。その方が人間に味が出る」

「味は必要なんですか？」

「調味料って意味じゃなく、深みって事かな。浸透圧って知ってるだろう。片方に圧をかけると、ふたつは混ざらない。混ぜあわせて平衡状態にするには、自分の圧を取り除かなきゃならない」

「…そうですね」

藤内先生の話が、おれの何に対して言っているのかは知らないが、おれの頭の中は、宿禰と交じり合っている様しか思い浮かべられない。

3月14日が三日後に迫った。その日は土曜日、しかも年度末の終業式でもある。

その終業式が終わった後、宿禰とどこかで：具体的なことはさっぱりだが、リンとそういうことが出来たらいいなあとおれは漠然と考えていた。

だがそれを宿禰にどういふ風に告白していいのかわからない。

リンはまさかおれが自分からセックスしてくれと求愛するとは、夢にも思っていないだろう。

おれの誕生日が三日後だということさえ告げてはいないのだ。

誕生日にセックスを求める事自体が、相当ナンセンスな恥知らずなことなんだろうか：全くもっておれにはわからないことだらけだ。こうなると知っていたならもっとこの方面に対して勉強しておきや良かったと今更嘆いてみても、後悔先に立たず。

おれがこんな妄想を延々していることなど知った事じゃないであろう当の本人は、いつものように温室で植物のデッサンをするおれの傍らで、黙々と本を読んでいる。

おれは手を休めて宿禰の様子を伺った。

おれのことなど気にも留めず、集中したまま本の文字を追っているリンの横顔をじつと見つめた。

喋っている時はころころと表情を変えるリンだが、口を閉じた穏やかな容顔は、なんとというか：見事なまでに整った造形で出来上がっていて、日本人の顔つきではあるけれど、まるでそういうジャンルを飛び越えた人種なのかもしれないと、おれは変に感心した。

どういふ容姿の両親だったらこういふ人間が生まれるんだろう。彼には兄姉がいると言っていたが、生きていたらお姉さんはかな

りの美人だつたらうなあとか、9つ上のお兄さんは今は25、6なんだから、宿禰とは違つてもつと大人でハンサムなんだろう…など、どうでもいいことまで想像を巡らしてみたりする。

そもそもそういう他人に興味を持つ事自体おれには珍しいことなのに、その家族にまで枠を広げて催すなど、以ての外だ。

自分自身に呆れるのはもう慣れたが、こうなると、頭のどこかのネジが緩むどころか、外れてしまつてに違いなかるう。

「リン、何の本読んでいるの？」

あまりに集中しているリンを振り向かせたくなり、おれはとうとう声をかけた。

リンはえ？と言う顔しておれを振り返つてくれた。

「ああ、これ？色彩心理学」

「…」

相変わらず、雑学の幅広さも甚だしい。この間は「古代国家の帝王学」なるものを読んでいた。

おれにはピンと来ない範囲だ。

「おもしろい？」

「うん、面白いよ。簡単に言うと、人間は色を見ることによって、心理的にいかようにも影響を受ける。まあ、主観的な見方もあるけど、空が青けりゃ気持ち晴れ晴れとなるし、曇天の日には、空気が重く感じ、気持ちも沈んでしまふ…だろ？」

「うん」

「人間にも色がある。これはもう客観的な見方でしかなくなるに違いないけれど、人はその人格を色で区別したがる」

「ああ、それならなんとなくわかる気がする」

おれはスケッチブックを片付けて、リンの隣に座った。

「おれが思うにリンのイメージは金色だ。だけど、容姿から判断するならば、色は紫が似合う気がするんだ。これはどういう意味があ

るのかな？」

「金は王者、紫は高貴。どっちにしても偉ぶってるね〜まあ、孤立無援という意味合いでは合っているのか？」

「リンは優美なんだよ。おれ、リンの綺麗さって外見からじゃなくて、おまえの魂が綺麗なんだと思う」

「…」

リンは驚いた風に目をぱちくりさせて首を捻る。

「ミナから褒められると…なんか、不安になってくる」

「…なんでだよ！」

おれの文句も聞かず、リンは座ったままおれの身体を後ろ向きにして自分の足の間に挟み、背中をそっと抱いた。

「ミナは青って感じだな。青弥だしな。青の持つ意味って知ってる？」

おれの頬を撫で、リンの口唇がおれの耳元に触れる。

「…知らない」

少しだけ上ずったおれの声に変に聞こえ、おれは恥ずかしくて熱くなる。

「水…水川の水でもあるね。知性、冷静、悠久、未来…憂鬱…」

「…」

そう言いながらリンはおれのシャツに手を差し入れ、甘い声音で耳元に囁く。

「近頃のミナはなんだか憂鬱そうに見えるけれど…何か俺に言いたいことでもあるの？」

「…」

おれは俯き、身を縮めた。

リンは知っている。

おれの憂鬱を。

おれの欲望を。

おれはこのまま、リンに身を任せるべきなのか、
それとも折角立てた計画を、今ここでリンに話すべきなのか、
頭の中でこんがらがってしまっ…

「誕生日まで待つて欲しい」

言わなくちゃいけないと思って、口を開こうとすると、リンはおれの顎を掴み、自分の方に向けさせ、口を合わせた。

互いの舌を舐めあいながら貪るキスはおれも嫌いじゃない。だけど、今はもっと大事な話があつて…

背後からしっかりと腰を捕まえられて身動きの出来ないおれは、身体を這うリンの指先にも刺激を受けて次第に息が上がる。

「リ、リン…おれ…あの…」声が裏返つてうまく言葉が紡げない。「いやなの？」

リンの甘い囁きにおれは、力なく首を横に振る。

嫌じゃない…そうじゃないけれど…

「いつまでもじらさないでおくれよ。俺も気の長い方じゃないんだねえ、いいだろう？」

リンの唇が、おれの耳の後ろから首筋を伝わっていくのがわかる。ぞくりとする。

リンはおれの感じる場所を知り尽くしているのかもしれない。

抵抗なんてひとつも出来ない。

カチャリと音がして朦朧となりかけたおれの意識が引き戻された。下を向くと自分の足元がぼんやりと見える。気が付かないうちに眼鏡を取り外されたらしい。

リンは全く躊躇いもせず、ベルトを外した俺のズボンの中に手を滑り込ませ、下着の上からではなく、直接おれのものに触り始めた。

「あ…」

おれは息を飲み込んだ。そして急いで右左と辺りを見渡した。勿

論裸眼で0.1もない視力では誰かが居たとしても、はつきりに見えるわけではない。

だけど、まだ宵の口で、しかも外からでも見ようと思えば丸見えの温室の中だ。

リンは本気でこんなところでおれを抱こうとしているんだろうか…それともこれくらいで動揺するおれの方が、ガキなのか…

おれはリンの恋人で、俺はリンを好きで、リンは俺を好きで…お互いに欲しいと思っていて…セックスしたいと望んでいて…それから…

おれは居たたまれず、目を強く閉じた。

リンの触り方は巧みだった。おれが自分でするよりも遥かに要領を得、快感を与えてくれる。

だけどおれはそれが怖かった。

リンに一方的に与えられ、翻弄されまくっている自分は嫌だ。

セックスってそういうものなのか？

おれがまだ何も知らないガキだとしても、おまえに抱かれる側であつても、こんなに惨めな気分でおまえに好きなようにいかされて…

リン、おれはおまえと分かち合いたいんだよ。互いの気持ちを確かめあつて、見つめ合つて、ゆっくりとひとつずつ繋ぎ合わせて、快樂に委ね、与え合い、一緒に辿り着く。

おれはおまえとそういう風に抱き合いたいと思つている。それはくだらない勝手な妄想でしかないのか？

「うっ…っ…」

おれはいつの間にか泣いていた。

自分の嗚咽に自分で驚いたが、止まらなかった。

両手で顔を覆い、「無理だよ」と、しゃくりあげながら掠れた声

をだした。

リンは動きを止め、きつく抱きしめていた片方の手の力を弛めた。力の抜けたおれはその場にしゃがみこみ、泣き続けた。

「ミナ…ごめん。ごめんな。そんなに嫌がるなんて…思わなかった…」

リンの心配そうな声が、おれの胸を更に締め付けた。

「もうしないから…泣かないで…」
頭を撫でてくれるリンの優しさが、酷く無神経に思えた。

…ちがう、宿禰が悪いんじゃない。おれがバカみたいに夢を見ていたのがいけなかったんだ。

おまえが欲しいのにおまえにやる勇氣もない…

おれは…なにも、おまえに応える事なんかできやしない、くだらない男なんだ。

おれは机に置いてあった眼鏡とカバンを持つと、宿禰の姿を一瞥もすることもなく、逃げるように温室から走り去った。

寮に帰った後、おれは何度も携帯を手に取り、電話でもメールでも一言リンに謝ろうと試みたが、何と言っていいのか皆目判らず、溜息をつくばかりだった。

同室の根本先輩はいい按配に、部屋にいなかった。どうやら今晚はどこかの部屋にお泊りか、誰かとホテルへ…

そんな事はどうでもいい話だ。

大問題を抱えているのはおれのほうだ。

一体これから宿禰とどうやって付き合っていけばいいんだ。いや、宿禰はもうおれに愛想を尽かしているかもしれない。

だったらおれに引き止める権利はなかるう。

だっておれは、リンを…拒んだんだから…

リンに嫌われたかもしれない…

そう思うと苦しいのと切ない感情が二乗になり、じつとはしてられない。勉強も手につかず、こんな時、いつもなら絵を描いて気を紛らわすという逃げ道も今回は役に立たなかった。

おれは…とてつもなく間違った仕打ちをリンにしてしまったんじゃないだろうか…

「はあ…」机に項垂れて頭を抱え込んだ。

だからもう、恋なんて…するんじゃない…

次の日、おれは宿禰の姿を見ることはなかった。

隣のクラスだから、様子を伺うこともできたはずだが、恐ろしくて近寄れなかった。

おれは授業が終わると逃げるように寮に帰った。

その夜、宿禰からメールが来た。

「昨日の事は俺が悪かった。待つって約束したはずなのに、ミナがあんまりかわいいから待てなかった…まだ怒ってる？」

…嬉しいんだが、返答しがたい内容で、ひとしきり考え抜いた結果、おれは「怒ってないし、リンが好きだ。でも自信が無い」と、返した。

すぐさまリンから「俺も自信喪失中…」と、返信され、気が緩んだのと申し訳なさで涙が零れてしまった。

やっぱり明後日、誕生日にセックスしたいと打ち明けようと、必死の決断で望んだ翌日だったが、宿禰の姿を見ることはなかった。次の終業式も宿禰は学校に来なかった。

三上を呼び止めて、宿禰の行方を聞くと、昨日からリンのお兄さんのいるシカゴに遊びに行くとかで、春休み中は帰ってこないと言った話だった。

…気が抜けてしまったというか…先に言ってくれば良かったのに…と、自分の事は棚に上げ、宿禰のつれなさを随分と詰った。

おれは16の誕生日を、寮の部屋でひとりぼっちで過す羽目になっってしまった。

もつと早くから宿禰に自分の気持ちを打ち明け、ちゃんと段取りを踏んでリンとひとつになれていればこんな惨めな誕生日を迎える事などなかったんじゃないだろうか…

今更言っても全く持つて拙いことだらけで、自分のふがいなさが恥ずかしくも罵りたくなり、落ち込みも激しくなる。

「あれゝみなつち、いたの？」

「…いますよ」

夕食後、ベッドで横になっていると、同室の根本先輩が帰ってきた。

「だって、今日は誕生日じゃなかった？宿禰とデートでも楽しんでいるのかと思っただけど…」

と、言いつつ、何故かおれの寝ているベッドに乗り座り込んだ。おれも仕方なく起き上がって、向かい合わせとなる。

「…リンは留学中のお兄さんに会いにアメリカに行きました」

「…宿禰もまたつれないことをするね。恋人が誕生日だっていうのに」

「おれが知らせていなかったんです…宿禰は元々おれの誕生日を知らない」

「…そりゃ残念だったね」と言うかさあ、前もって言っとけば良かったじゃん」

「…」

「そんな大事なことも言えない関係なの？君と宿禰は」

「そうなのかも知れない。おれだって宿禰の誕生日は知らない。」

お互いの誕生日さえ興味がないうて…そういう恋人同士っていうのも変かもしれない。

「…」

「ただ、そういう云々より、宿禰と一緒にいるだけでなんか…それだけで十分に居心地が良かったんだ。」

「まさか、ボクのあげたプレゼントはまだ役に立ってないってことは…ないよね」

「…」

「プレゼントというのはコンドームの事だろう。役に立つものにもおれは力なく首を振った。」

「え？マジで…だってみなっち近頃ドキワクな顔していたじゃん。もう初体験しまくったのかと思っただけど…」

「触れて欲しくない事をこの人は…だけど、おれの今の状況を理解

してくれる人は先輩しかいないというのが正直な話。ここは本当のことを話して、相談に乗って貰った方がいいのかもしれない。

おれはぼそぼそと低い声で宿禰との事の顛末を説明した。不思議なことにもなら茶々を入れる先輩は、ただ黙って聞いてくれた。

「おれは…おれには初めから無理な話だったんだ。元々男が好きになる体質でもないし、いや、男も女もおれには好きになる価値なんかないのかもしれない。好きな相手になにもしてやれないんだから…」

「別にそれくらいで落ち込む事でもないと思うけどな。まあ、水川が真性のホモじゃないことはわかっていたし、それは宿禰も知ってたからね。宿禰は水川の事を大事にしてくれてただろう？」

「…だからおれは宿禰の思うようにさせてあげたかったんだ。でも肝心な時におれは拒絶してしまった…」

「させてあげたかったてねえ、思い上がりというか…要するに覚悟していたけど腰が引けたってわけだね。水川は自分が男として女みたいな扱いをさせられるのが嫌だった。つまりアナルに突っ込まれるのが嫌だったわけだ。痛いしね」

「そ、そんな事を言ってるんじゃない。おれは…」

「宿禰とは寝たいが男としてののプライドが許せないって話じゃないの？ボクが思うに、水川は自分はどうしようもないと言っておきながら結局は自分が大事でしょうがないんだ。傷つきたくない、穢れたくないと思っている。宿禰がそっち方面に長けているのなら、何もかも初めての君が怖気づくのも判るけどね、自分のプライドを守るために価値が無いと泣かれても宿禰がかわいそうだよな」

「…」

自分のプライドを守るため？そんなの考えたことがない。おれは自分が嫌で嫌でたまらなくて…でも宿禰を好きになって本当の自分を少しは好きになれる気がしたんだ。

宿禰とセックスをしたかったのは確かだ。抱かれるのも覚悟していた。

じゃあなぜあの時、おれは宿禰を拒んだんだ。

「宿禰はおれに愛想が尽きたかな…」

「それは君次第だろうね。水川は一体宿禰とどういう関係でいたいの？このまま何もしないで恋人未満で続ける？それとも傷ついてもいい覚悟でお互いの汚いところをさらけ出しあって、付き合っしていきたいの？」

「…」

根本先輩の言葉は重く、おれは今までに考えた事のない宿題を目の前に出された気がする。

「おれは…リンが好きだ。リンがこのままおれから離れてしまうのはどうしても嫌だ。リンが他の誰かを好きになつたり、誰かとセックスしたりするのもおれは…いやなんだ。こんなに誰かに執着したり、独占したいって気持ちになつたのは初めてなんだ。おれは、リンと繋がりたい」

「…それをリン君に言えばいいんだ」

「だけど、リンはおれに失望しないだろうか。リンを好くさせてあげれるだろうか。おれはそれに嫌悪感を抱かないだろうか。うまくイクことができるだろうか…どれもこれも不安ばかりだ…」

「誰だつて初めはそうだよ。宿禰だつてね…勿論経験は豊富だろうけれど…考えてみれば、ボク達とだいたいして変わらない時間を生きてきたんだよ。内容は違つても生きてきた歳は同じ。そう考えるだけで大分楽になるんじゃない？」

「…」
「そうなんだ。宿禰は歳のいった分別のある大人でも、すべてをわかりきつた博学者でもない。おれと同級生の男子なんだ。」

「まあね、みなつちは3月、宿禰の誕生日は4月だから一年の差はあるだろうけれどね」

「え？先輩、リンの誕生日を知っているの？」

「ちよいと調べればわかるよ。4月14日が彼の誕生日。ちょうどみなつちのひと月後だね」

「…」

「宿禰がアメリカから帰ってきたら、さつきみたいにみなつちの気持ちを正直に話したらいいんじゃない。まあ、アメリカでいい男を捕まえていなければの話だけだね」

と、意地悪そうに笑う先輩におれは眉を顰め、海外にメールが届

くかは判らないが、とりあえず、誕生日のことを知らせようと携帯を手に取った。

メールで連絡を一応してはみたが、あれから一向に連絡はない。とにかくリンが帰国するまでこの件は一旦置いておこうと自分に言い聞かせる事にした。

おれは春休み期間を補修授業を受けるためと理由を付け、寮に残り、極力家には戻らなかつた。

春休みにも関わらず毎日学校に登校し、授業が終わると温室でひとりで過した。

花に水をやったり、絵を描いたり、宿禰を知り合う以前と同じような毎日だ。だけど、おれにはもうリンが必要で、傍にいたいことが当たり前になってしまっていて、居ないのはわかってはいるのに、思わず振り向いて「ねえ、リン」と、呼んでしまうのだ。

リンが恋しい。

リンのことを思うと胸が痛い。

会えないと寂しい…

寂しくてたまらない…

これが恋という感情なのか？

なにものにも替えがたい尊いと思える想い。

おれはどうしても手放したくない。

リン…おれは、…おまえが欲しいんだよ。

新学期が始まり、朝礼が済むとおれはクラス替えの前に、隣の宿禰のクラスに向かった。宿禰に会うためだ。

きよろきよろと教室の中を伺うが、宿禰の姿は見当たらない。三上がおれに気が付いて、宿禰がまだ来ていないと教えてくれた。

「様子がわかったら教えるから」と、言われ、おれは肩を落として自分の教室へ帰った。

二年になり、おれは4階の教室に宿禰は…多分理系のおれとは離れた3階の文系クラスだろう。

一階だけだとはいえ、休み時間にちらりと見るリンの姿が見られなくなるのは寂しい気がした。

考えてみればおかしい話だ。

一年前この学校に入学したばかりの頃は、おれは恋どころが誰かを好きになる事さえ自ら拒んでいたのに。誰かをこんなにも好きで好きでたまらなくなるなんて…

おれは初めて誰かを必要と思い、そして相手におれを必要としてもらいたいと感じている。

リンが…リンがおれを変えてくれた。

おれはなんだか前を、上を向いて歩きたくて仕方ない気分なんだ。

始業式早々に進学校であるヨハネでは6時間までみっちりと授業がある。それが終わると三上はおれの教室にやってきて、宿禰の事を教えてくれた。

なんでも高熱で寝込んでいるとのことで、見舞いがたらプリントを渡して欲しいと頼まれた。

「ありがたい事に二年も宿禰とクラスが一緒なんだ。あいつはいい奴だから離れがたいよ。でも水川はあいつの特別だから仕方が無い。この役を譲ってやるよ。宿禰のマンションは知ってる？」

「知ってる」

「明日は土曜で休みだし、月曜は校内の実力テストだから、良かったら勉強でも宿禰に水川が教えてやってくれよ」

「うん」

おれは思わず顔を綻ばせた。すると三上は小声で「ああ、宿禰が

惚れるのも判る気がする。水川つて案外かわいいんだな」と、笑った。

おれは三上の言葉にさえ、もう下を向くこともなく、素直に笑って応えた。

寮に帰り着くと、おれは宿禰に会うために服を着替えた。ついでに下着も新しいものに代えた。明日は土曜で休みだから、うまくいけば宿禰とできるかもしれない。

机に入れておいたスキンの箱から一個取り出し、お守りがわりに財布に入れた。

こんなにセックスの事ばかり考えていると知ったら、リンはきっと苦笑いするだろう。

色狂いだと軽蔑するかも知れない。それでも…

それでも、おれはリンが欲しい…

途中のコンビニでポカリとやわらかプリンとLGなんとかヨーグルトを買った。熱を出すと必ず母親がおれに食べさせてくれたものだ。

マンションに着きオートロックのタッチパネルに宿禰の部屋番号と呼び出しを押しした。

暫くして『ミ、ミナ?』と、驚いたリンの声がスピーカーから聞こえた。

カメラからおれの顔が見えているのだろう。おれはどこを向いているのかわからず、目の前のパネルをじっと見つめながら話す。

「うん。三上に頼まれてプリント持ってきたんだけど…」

『そう…上がってくれ。13階だから』

「うん」

同時に傍らの見るからに頑丈で豪華なドアが静かに開いた。

エントランスに入るとそこはホテルのロビーのようだった。

正面には淡い色調の照明に照らされた高そうな油絵が飾られ、応接間のようにソファとテーブルが並べてある。とりあえずおれはエレベーターを探し、ボタンを押しした。

やっと降りてきたエレベーターに乗り、13階のボタンを押そうとすると、息を切らせながら滑り込むように子供がひとりエレベーターに入り込んできた。

小学生になるかどうかぐらいの女の子だ。

「10階をお願いします」と、丁寧に言われ、おれは10階のボタンを押しした。

その女の子は珍しそうにおれを見ると「お兄さんは凜一おにいちゃんのお友達?」と、言う。

「え?」

「だって13階を押ししているから」

「そうだけど」と、返事をする、彼女はにっこり笑って「凜一おにいちゃんは面食いなだね」と笑った。

「リン…いち君のことを知っているの？」

「うん、いつもお菓子くれたり、抱っこしてくれたりキスしてくれたり、大きくなったら凜一おにいちゃんのお嫁さんになりたいって言うんだけれど…」

「けれど？」

「好きな人がいるから駄目なんだって。まさかその人って…あなた？」

「ええ!…違うと…思います」

おれは大きく手を振って否定した。こんな小さな女の子にまで、そこまで想像されたくない。

10階で手を振って降りていく女の子を送り出し、おれは溜息をついた。

一体あいつは…誰彼も構わず抱っこしたり、キスしたり…危ない奴と間違えられないか？

と、思っ頭を捻った。なんかちよつと気に食わない。これは嫉妬ではないはずだ。…たぶん…

13階で降りると目の前に広々としたポーチがある。

回りを見渡しても玄関といえるものはここだけだ。表札はなかったが、部屋番号は合っている。

おれは門扉を開け、その玄関のインターホンを押した。

すぐに木造の瀟洒なドアが開き、宿禰の姿が見えた。

久しぶりを見るリンの姿を見て…おれは胸が熱くなった。

「リン…」

おれは無意識のままリンに抱きついてた。
その細い身体を掻き抱き、彼の存在を確かめた。
リンはおれの勢いに負けて二歩後ずさる。
後ろのドアがゆっくりと静かな音を立てて閉まる。
途端に玄関の間接照明の淡いオレンジが足元に浮かび上がった。

「ミ…ナ…」

「リン…逢いたかった。すごく…すごく…」

おれよりも少し高い位置にあるリンの顔を見つめた。

「俺もミナのことばかり考えていたよ…」

その言葉はおれを有頂天にした。

リンは熱があるんだからちゃんと言病しなきゃならないんだとか、この間のこともあやまらなきゃならないとか、色々考えていた事など吹き飛んでしまった。

あまりの嬉しさに涙ぐむと、リンは眉を顰めて「ミナは嫌がっても喜んで泣くから、俺は非常に困る」と、真顔で言う。

「これは久しぶりに会えた嬉しさと、リンを好きでたまらないという意味だよ…どっちにしろリンが泣かせているのは間違いない…」

「…もつと泣かせても構わないって意味？」

おれはそれを肯定するように、大きく頷き、リンの口唇に自分から合わせに行く。

ひとしきりお互いの口唇を味わった後、リンは優しげに微笑んだ。
「夢を見ているみたいだ。ミナがここにいるなんて…」

「何で来たかって聞かなくてもわかるよね。この間のリベンジだよ…」

「…そりゃ…なんとまあ、勇ましい話だね。俺への挑戦？」

「いや、おれ自身へのも思っただよ。おれはリンと繋がりたい…」

「勿論、今度は逃がさない。ただ今は言わせて…」

「なに？」

「遅くなったけれど…誕生日おめでとう、ミナ」

リンの言葉におれは相好を崩し、一寸も離れたくなくて、
またもやリンにしがみついてしまった。

リンに案内された先は、思っていたよりずっと広いリビングだった。一面のガラス張りの窓からは、遠くの海が白く淡く霞んで見える。夕暮れの色は曇り空に遮られ、夕焼けは拝めそうもない。

「座れば？」

コーヒーのソーサーを丸い硝子のセンターテーブルに置いたリンは、黒のレザーのソファに座り、手招きする。

部屋の中のどれもこれもがひどくオシャレで、どこかで見た外国のブランドであろうソファの座り心地は確かに高級感がある。

「こういうインテリアに全く無関心の俺でさえそう思うんだから、気が付いていない価値のあるものも多いのだろう。と、金の取っ手の着いたアンティークなコーヒークップをじっと見つめた。

「なに睨んでるの？変なもんは入っていないから安心して飲めば？」

「ちがうよ…なんか、粗相をして割ったら大変だなあって…」

「こういう茶器集めは死んだ母の趣味でね。なんか色々あるんだよ。引越しの時に処分したんだけど、思い出のものは使ってやらないとね」

テーブルにはノートパソコンが付けっぱなしになっている。

今度はそれを覗き込んだ。

外国の街が映し出されている。

「ん？これはシカゴに行った時の写真をパソコンに取り込んでいたの」

「見ていい？」

「勿論」

おれは初めて見るシカゴの街並みをリンの説明つきで次から次へと楽しんだ。

ふと男の人の写真で手が止まった。

リンに良く似た整った人…たぶん宿禰のお兄さんだろう。

手が止まったおれを見て、リンが教えてくれた。

「兄貴の慧一だよ。シカゴの大学院に行っている。来年までは帰れないんだ」

「リンに良く似てすごくかっこいいね。けど…お兄さんの方がすごく大人だ」

「…当たり前だろ。9つも上だよ」

「リンが9つ歳を取ったらこうなるんだろうね」

「さあね。兄貴みたいに分別のある人間にはなれる自信はない。兄貴は俺の憧れではあるけどね」

「へえ〜リンが誰かに憧れるっていうのはピンとこないな。いつも自信満々だから」

「尊敬すべき人は沢山いるよ。でも兄貴は特別。母親が早くに居ないだろ？親父は単身外国住まいだったし…今は奥さんがいるけどね。俺は姉の梓と慧…兄貴のことね。の、ふたりに育てられたんだよ。姉が死んでからは、俺には家族といったら慧だけだ。慧は俺を大切にしてくれる。俺も慧の手だけは離したくないと思っている」

「でも…リンの家はお金持ちだろ？ここの家もすごく高そうだし…幸せじゃない」

「お金に困った事はないだろうね。でも豊かという点ではどうか…。あまりに家族との縁が少ないんだよ。絆という点で、俺はどこか欠落したものがあると思う。兄貴は俺の一番大事な家族だけど、それだつて一緒に居ない期間が長かったからね。ひとりで過すのは寂しいもんだよ。実は昨日も…アメリカから帰ってばかりで、ひとりきりの寂しさからワインで気を紛らわそうとねえ…まあ、俺、あんまり飲めない性質だからすぐに参ってしまった…それで二日酔いで学校に行けなかったんだよ」リンは苦笑しながら、舌を出した。

おれはリンにそんな暗い面を感じた事はなかったから、リンの生い立ちをリン自身がどう感じているかを知って、同情してしまった。

その思いがわかったからだろうか、リンは少し困った顔をした。
「哀れんでもらおうと言ってるんじゃないよ。これは一方の方向から
見ているだけで、他方から見れば、俺はお金に困った事はないし、
遊んでくれる大人は大概いい人だったし、価値ある経験も沢山して
きた。恵まれている事には違いない。」

ミナだって両親にかわいがられてるだろ？でも、それが窮屈で寮
暮らしをしている。俺から言わせて貰えば、ミナは両親の愛情に恵
まれて幸せ者だと思うぜ。だが、ミナはそうは感じない。同じもの
を見ていても見る側面は違う。人を見た目から同情したりけなした
りするのはいい。だけど、本人にとっては人の思いなんかは関係な
い。

俺は十分幸せだってことは確かだよ。少なくとも愛されているから
ね」

「…お兄さんに？」

「そう。それとミナにもね。それよりも俺はミナがいつおれとセッ
クスする気になったか知りたいね」

「それ、話さなきゃならない事？」

「俺に取っちゃあ、ミナがここに来たというのは一大事。それも俺
とやりたい気持ちで来たっていうんだから天地がひっくり返るぐら
いの大ニュースだ。そのきっかけが何であるのかを知りたいって思
うのは自然だろう？」

「…」

わかるけど、それを逐一話すのは自分の欲望を晒すのと一緒で、
先輩に話すのとは違い、躊躇われるだろう。だって、リンは俺の性
の対象者だもの。

「まあ、いいさ。夜は長いし、時間はたっぷりある。泊まってい
くんだろ？戦さの前に腹ごしらえな」

「い、戦さ？」

「それはそれは激しくも狂おしい戦いの夜になるでしょう…」

と、おれを面白がりながら色っぽい顔で誘うから、おれはリアクションに困ってしまった。

ふたりで夕食を作り、食べた。作るといってもおれはサラダ担当で、野菜をちぎっただけ。リンはカルボナーラを上手に作った。

「何でも出来るんだね」と、褒めると「毎日外食するより、家で好きに作る方が有意義な時間のつぶし方なんだよ。話す相手がないのは寂しいけどね」と、応える。

同情を嫌うと言うが、俺はリンが今までどんなに多くの時間をひとりで過したかと思うと、可哀相で仕方がない。

おれでよければずっと傍にいてやりたいと、心から思った。

外泊することを根本先輩にメールで伝えると、「頑張れ」と、短く返ってきてくれた。それをリンに報告すると、「あの人は信用していいよ。ミナの傍にいてもネコだから俺も安心していられる」と、わけのわからないことを言う。

風呂に入るように下着とパジャマを渡され、浴室に案内される。

「一緒に入って、洗いつこでもする?」と、からかわれた。

…いや、一緒でも良かったかもしれない。

風呂を交代して、ソファでぼーっとしていると段々眠たくなり、横になってしまった。

軽く居眠りしていると、風呂から上がったリンに「緊張感が足りねえ!」と、怒られた。

ごめん、このソファ、高いだけあって寝心地いいわ。

ひとしきりリンのお小言を聞いた後、リンはおもむろに立っておれに手を差し出す。

「俺の部屋へ行くぞ」

いよいよだと思つと、なんだか胸が高鳴つて仕方がない。ん？いや、胸が高鳴るはおかしいだろう。まるでめちゃくちゃ期待しているみたいじゃないか。

リンがどんな風におれを抱くのか、不安と緊張で、心拍数が高くなるのだ。

「どうしたの？入れよ」

リンがおれの方を向いて、愛想良く「どうぞ」とドアを開け、エスコートする。

何故か顔が緩んでくる。

…やっぱり、胸が高鳴っているっていうのは正解だ。と、妙に納得した自分が、なんだか可笑しくて仕方がない。

リンの部屋は、シンプルなものだった。

ベッドの大きさには驚いたものの、他には揃いの木目の際立った勉強机と本棚ぐらい。テレビで似たようなものを見たことがあるが、どちらも高価な指物だろう。吹き付けの漆塗りが美しい。

落ち着いた色調の中にひとつだけ目を惹かれたものがあつた。

本棚に飾られているかなり大きめのフォトフレームだ。

近づいてよく見ると、コルク製のマットにコラーージュのように沢山の写真が貼り付けられている。

おれはそれを近寄って覗き込んだ。

かわいらしい赤ん坊はリンだろう。両親と兄弟揃つての写真は七五三らしく、リンは千歳飴を持っている。リンに良く似た面差しの母親に抱きしめられているリン。ある時期からはお兄さんとお姉さんの三人だけの写真が多くなる。

リンはいつも真ん中で、ふたりの兄と姉に見守られるようにあどけない笑い顔を見せている。どれもこれもリンは際立って美しく、その両脇を占める兄姉も、リンに相応しい容貌だ。

「リンは子供の頃からかわいいね」

「ああ、天使だって言われ続けてきたんだぜ。慧も梓も俺の背中に6枚の羽があるって言い張るんだよ。俺もその気になっていただけだね」

俺はそれを聞いてリンの姿をまじまじと眺めた。

「…おれには羽なんか見えない」と、言うと、リンは嬉しそうに「だからミナが好きなんだよ」と、言う。

意味がわからなくて、肩を竦めて、また写真の方に目をやる。

「お姉さんって綺麗だったんだね」

「うん、交通事故であっけなく逝ってね。二十歳になったばかりだったんだ。…俺は瀕死の梓を病院でひとりで看取った…悲しかったよ…」

「ひとりで？」

「ああ、その時は俺の他に誰も居なかった。姉貴が死んで俺は酷く落ち込んで、学校にも行けなくなってしまったんだ。梓は母親でもあり、ある意味恋人でもあったから…すぐく愛し合っていた。だから、梓が死んだ時、俺も後を追いたかった…死にたがったんだよ。餓死して死のうとしたら、周りは必死で食べさせるしさあ…」

「…」

「俺はたぶん結婚はしない。それに、この先女の人と恋をすることは無いと思う。梓以上に愛せる女が現れるとは思えないからだよ」

「そんなに…愛していたの？」

「慧がいなかったら、自殺でもして死んでいただろうね。慧が居たから…置いていかれたもうひとりの半身である慧をひとりにしてしまいたくなかった。梓を失ってしまった俺達はもうお互いを失うわけにはいかなかったからね」

「…」

「ミナ…俺はおまえが思うほど強くもないし、綺麗でもない。甘ったれで我がままでどうしようもない人間だよ。それでもいい？」

「リンは前に言ったよね。好きなら相手のすべてを知りたいって。それは相手のすべてを受け入れることを覚悟した時だと思う。おれにとって今がその時だと思うんだ。リンがどんな奴でも構わない。おれの前にいる宿禰凜一がおれの好きな奴で、おれはおまえの全部を受け入れたい」

リンは笑わなかった。伏せ目がちにおれに差しだす右手を、おれは握り締め、指を絡めた。

「リンが好きだ」

おれとリンは立ったまま抱き合いキスをした。

今までとは少しだけ違って、甘さに混じった感傷を感じたのは、それはおれがリンの本当の心に少し触れたからだと思った。

14 (前書き)

R15です。

「服を脱いで」と、言われ、パジャマを脱いでベッドに寝転がる。下着は着けたままだ。

リンは何故かTシャツとスウェットパンツを着たままでおれの横に寝ると、肌触りのいい毛布を肩から掛けてくれた。

なんでおれは脱いでいるのにおまえは着たままなんだ？と、思ったが、何しろこっちはすべてが初めての経験って奴だから、どうしても宿禰に言うがままにならざるを得ない。

「寝る時は眼鏡はいらないだろう」と、俺の顔から眼鏡を取り、ベッドの脇のサイドテーブルに置いた。

ベッドはおれ達ふたりが寝ても十分余裕のある広さで、両脇のサイドテーブルには洒落たスタンドが置いてある。

「どうしてひとりで寝るのにこんなにベッドが広いんだ？」と、尋ねると「そりゃどんなプレイをしても軋まないベッドの方が、安心してセックスが出来るだろう」と、ほくそ笑んで言う。

おれが黙ったままでいると、

「…嘘だよ。俺は自分の家では誰ともしたことがないよ。ベッドが広いのは、小さい頃はよく梓と慧に添い寝をしてもらってさ。俺、夜泣きする子だったからね。3人でよく寝てたんだ。その所為か、ベッドは広いほうが気持ち良く寝れる」

そう言いながら、リンはおれの背中を横抱きにしながらゆるく抱いた。お互いに見つめあう格好になり、おれの胸元にリンの視線を感じてしまう。

「リン…灯りを消してくれない？おれ、恥ずかしいよ」

リンは黙ってリモコンを手にとって真上の蛍光灯を消した。そして、サイドテーブルの二つのスタンドを付けた。

さつきとは明るさも色合いも違う光が、お互いの身体を照らしている。

おれはますます恥ずかしくなってしまう。

「あの…明るすぎないか？」

「真っ暗闇の中であるのもそれはそれで楽しめないわけじゃないけど、初めてなんだから、お互いを確認しあった方が良くない？俺はミナの顔がちゃんと見えていたほうが嬉しいけどね」と、おれの首筋や肩を撫でて言うもんだから、おれは反論なんか出来ない。

「…リンがそう言うのなら構わない」

「ミナは白いね」

「そう？リンも色白じゃないか」

「俺の白さとは違う。ミナを初めて見た時の印象は白い子だなあと思ってたもの」

「おれは…リンがあんまり人目を引く存在だったから…目が合った時、思わず怖気づいてしまったよ。まるで、おれとはかけ離れた…リン、そこゾワってくる…」

リンの手がおれの脇腹を撫でる瞬間、おれは軽く痺れたような刺激を受けた。

「じゃあ、ここはミナの性感帯だな」

「…」

そうなのかな？でもそこだけじゃなくて、リンが触るところ、なんか全部…鳥肌が立つくらい…

「リ、リン…」

おれは怖くなってリンにしがみつく。

心臓がバクバクしてる。別にまだなにも始まっていないのにこれじゃあ、後が思い知らされると臆病風に晒される気がした。

「…ミナは誰かを好きになったことはないの？」

リンの手が片方は背中を、もう片方はおれの髪を撫でる。落ち着

かせるような感覚におれは少し安心してリンの質問に答える。

「ない…いや、中三の時に、同級生を好きになった。その子は頭が良くて美人だった。お互い好きになって交際したんだけど…彼女はおれを求めてくれて、おれはそれを与えられなかった。それで、振られたよ…男としてはかなりかつこ悪いよね。たぶん色々考えて…おれを求めたんだと思うよ。おれも応じてやりたかったんだけどなあ…何がいけなかったのかわからない…」

よくよく考えればへんな話だった。好きな奴と初めて寝て愛撫されながら、失敗したセックスの話をしてるだなんて。

「ミナはその子を本気で求めてはいなかったんだろうね。ミナの言うとおり、相手に求められて応じなきゃならないって思うのもわかるけど、ミナは中三だったんだから、まだ子供だ。できなくても仕方がないよ」

「だって、リンは…」

「俺は家庭環境が最悪なもの。誰も監視する奴はいなくてさあ、本人は好奇心旺盛で怖いもの知らず。そりゃやりたい放題だよ。でもしたくない奴には勃たなかったよ」

「本当に？」

「そういうのって、自分が思うより身体の方が正直なのかもなあ。俺は相手を好きじゃないとホテルに連れ込まれてもしなかったからなあ」

「それでどうしたの？」

「股座蹴り上げて逃げ帰った」ふふつと笑うリンにどこまで本当なのか判らなくて、口唇を尖らすと、「セックスの経験はそりゃ同い年の子より多いと思うけど、俺は本気で恋をしたことはないよ」と、真面目な顔でリンは答えた。

「中一の時から男も女とも寝ていたけど、好奇心と気持ち良さを求めていただけだよ。運のいいことに悪い人はあんまりいなかったし

ね。好みの人もいたよ。でも、ドキドキしたりねえ、ミナみたいに大事にしたっていう相手には出会わなかった。俺が子供だったからなんだろうけど、いつだって守られる側だった。そういう意味では俺もガキだったって事だ……」

目を閉じたまま静かに話すリンだったが、色々な想いが過ぎつついるのだろう。おれの予想以上にリンは様々な経験を積んでいる。喜びも悲しみも、おれには想像できないほどに。

∴ その複雑な色合いこそ、おれがリンに惹かれる理由なのかもしれない。

15 (前書き)

R18です。

リンの黒まなこがおれを見ている。

でかくて吸い込まれるようなその目で見入られると、心の奥まで見透かされているようだ。

「落ち着いたようだね。始めようか」と、言うので「リンはまだ服を脱いでいないじゃないか」と、責める。

「じゃあ、脱がして」と、言うから、起き上がってシャツとズボンを脱がす。

ついでにお互いの下着も脱がせあった。

互いの身体を眺め、何故か笑いあい、そして抱き合いながら、また毛布に潜り込んだ。

エアコンは入れてないから、薄い毛布だけじゃまだ少し寒い。

「布団もいる？」と言うリンに「いや、リンのぬくもりがあればいい」と、言った。

「まあ、そのうち汗をかくから、毛布もいらなくなるよ」
そんな一言にさえドギマギしてしまう自分が恥ずかしい。

リンの手が俺の首筋を撫でる。もうひとつの手がおれのものを触ってくる。おれは息を呑んだ。

触り方が優しいのにいやらしくて…おれも慌ててリンのを触った。頭の中ではどんな風にすれば気持ちがいいのかと試行錯誤しても、手は上手く動かない。

それなのに、リンの指はおれのを上手く扱って、リンの口唇はおれの吐き息を吸うように重ねてくるから、おれは呼吸が荒くなる。

苦しそうにすると、リンは手を緩め、おれの顔を覗く。

大丈夫？と、目で聞くから、俺も軽く頷いた。

リンは動きを再開し、開いた片方の指がおれの薄い胸や背中をゆつくりと撫でる。

「ここが僧帽筋、天使の羽の付け根だ。上腕三頭筋から順に…二頭筋と続く。脊椎、肩甲骨、そして肋骨。肋骨は何本か知ってる？」

リンの落ち着いた声が、上がった心拍数を宥めてくれるようだ。

おれの呼吸は次第に元に戻る。

「…24本」

「そう、両脇に12本ずつだ。昔3ヶ月ほど付き合った人がいて、そいつは呼吸器外科の医師だった。何の趣味か知らんが、肋骨一本一本に季節の花の名前を付けていた。上から…馬酔木、譲葉、ライラック、勿忘草…面白いだろう」

「…変わって、いるね」

「そう、そんな名前に何の意味がある。肋骨は肋骨だよ。骨ではない。花の名をつけることがロマンチストとは俺は思えない。まあ、好き好きだがね。さて、ミナならこの意味をどう捉える？」

言ってることとやってる事がどうにも結びつかなくて、頭が朦朧となってくる。リンは巧みにあやつって、俺を翻弄する。おれも頑張っているのに…適わないや…ああ…答えなきゃ…なんだっけ…そう…

「…結局は…セックスはセックスでしかない」

「正解。ミナは頭がいい。どんなに美辞麗句を並べようが、やることとは決まっている。快感を求めあい、気持ちのいい汗を掻くことだ。さて、いかに気持ち良くなるかだが…」

「リン…もう、おれイキそうだよ…手え離して」

「いいよ。そのままイッて」

「嫌だよ。リンの手が汚れるじゃないか」

「じゃあ、飲んでやるうか？」

「や、やめてくれ！」かなり上ずった声でおれは拒否した。

リンは笑って「じゃあ、好きなように」と、いい、強く擦りあげるもんだから、おれはあっさりとそのまま達してしまった。

ハアハア言っつて、必死に酸素を取り込んでいると、リンが目の前でおれの精液の付いた指を舐める。

「リ、リン！やめてくれよ。き、汚いじゃないか」

「汚くない。おまえに無理強いはしないから、安心しろよ」

そんなことじゃなくて…おまえがそんなことをするのが嫌なんだ。

「ミナは純粹なんだね」

「馬鹿にしてる？」

「いや、ただ、おまえとするのは…少し怖いかな」

「なんで？」

「俺が汚れすぎて、ミナを穢すのが…穢すつていうのは違う。俺がおまえを染まらせるのが…正しいのか…この選択で間違っていないのか…すごく考える…ここに…」と、言いながらリンは塗れた指をおれの後ろに当て、ゆっくりと回す。

「…入れるわけだが、どうする？怖いのならやめる。今日じゃなくても明日だつて明後日だつてできる。ミナはきつくはない？」

リンの思いやりが嬉しくないわけがないが、おれは決めているんだ。

「じらさないで、最後までやって欲しい。痛くてもいいから…おれだつてリンが欲しくて堪らないんだから…」

おれはリンの首に腕を巻きつけ、哀願する。

「ミナは男らしいね。俺の方がだらしないかな。じゃあ、できるだけ痛くないようにゆっくりやるよ。と、いつでも俺もどれだけ理性が保てるかわからないけれど…」

おれの耳元でリンが囁く。

「実は一年以上セックスはしていないだよ。えらく清き身体だから、

ミナを気持ち良くしてあげれるか心配だ」

ニヤリと笑いながら、おれの肩をベッドに押しつけ、覆いかぶさった。

灯りの影になったリンの顔がひどく大人びて見える。

16 (前書き)

R18です。

リンの指がおれの中に入り込んでくる。リンの口唇がおれの胸を這う。

怖いと同時に背中からぞくりと震えが来る…気持ち悪いんだかいんだかわからない刺激。

おれもなんかしないといけないんだろうとは思っけれど、何をしたいのか全くわからず、リンの背中を撫でてやるのが精一杯だ。

両足の内にリンの身体が落ち着いているのはわかるが、自分の下半身がどうなっているのか、おれは見るのも怖くて目に入らないように薄暗い天井を見上げた。裸眼では天井の模様などわかるわけもない。

蛍光灯とその脇の熱感知器の両方の丸い形が、地球と月のように見える。

不思議と落ち着いている。

自分の呼吸が荒いのも意識をしないのに出してしまう声もはつきりとわかる。

ゴム持ってきたのに、使わないのかなと、思い出したが、つけない方がいいかな、と、どうでもいいことを考えている。案外冷静でいられるもんだ。

ああ、なんだろう。

セックスつってもっと怖くてドロドロしたものだと思像していたけれど、なんか…とても自然だ。

好きな奴がおれの身体に密着して繋がろうとしている。

ワクワクする。不謹慎かな？

…息が忙しい。撫でていたリンの背中もなんだか遠い…どうなっているのか、と、思ったら下半身に生ぬるい感覚。

リンの髪の毛で見えないが、何をしているのか感触でわかる。ち、ちよつと待つてくれ。無理だ！

おれは腰を引こうとするが、リンは俺の腰骨をしつかり掴んで離さない。それに後ろからも擦られておれはすぐに力が抜ける。

「リン：お願いだから…もう、入れてくれ。頼むから」

リンはやつと口を離して俺を見上げる。

「まだ2本しか入れてない」

「か、構わない。入れてくれ」

リンに啜えられるより、さっさと入れてもらったほうがマシだ。

今度は腰を軽く引き上げられ、両足を広げられた。丸見えだがもう恥ずかしいとか言ってもらえない。

何でもいい。好きにやってくれ。

リンはおれに宛がうとゆっくり腰を入れた。勿論痛い。痛くないわけがない。

息を吐いた方が楽だと思い、短く息を吐く。

「ミナ、大丈夫か？」

目の前のリンが眉を顰めて俺を見つめる。

大丈夫だ。痛くても嬉しい。リンと繋がれる。そう思うと恥ずかしいのも痛いのもたいした問題じゃなくなる。

「ミナ：全部入った。苦しくない？」

「う…ん、大丈夫。な、んかすごいけど…リンがいるって、感じる」

「ああっもう、余裕だな、おまえ。俺の方が…よっほど…もたねえ、かも…動くよ」

「あ…うん…」

すぐにめちゃくちやに揺らされた。

痛いのも気持ちいいのも全部ひっくるめて、まるで波にのまれる

ようだ。

喉から出る声が大げさではなく助けを呼んでいる気がした。何度も何度も「リン！好きだ」と叫んだ。ありえないことも口走ったかもしれない。そんなことはどうでもいい。どうでもいいんだよ。

リンが好きで、リンを欲しくて、そして、求められ、繋がれた。嬉しい、嬉しい、嬉しい…ただそれだけ。それだけなんだ。

おれ達は彷徨っている。

ただひたすらにこれが今、自分達にできうるものと懸命に走る。求めている。

君を、愛を、自分を信じるために。

…なんという、この尊きものよ。

終わった後、おれ達はベッドに横になり、静かに向かい合っていた。ふたりとも何も着ていない。薄い毛布にくるまっっているだけだ。

おれはリンを見つめた。

リンの伏せた長いまつげが濡れている。

リンは泣いた。お互いにイッた後、彼はおれの身体に突っ伏したまま、身体を震わせてしばらく泣いていた。

理由は聞かなかった。

それはおれが触れてはいけないリンのプライドだと感じたからだ。

リンは繊細だ。とても複雑で深いいくつもの層を持っている。

その奥を押し開いても彼は喜ばない。

リンの思いはリンのものだ。

おれにとって一番大事なことはリンと繋がれたことだ。

それだけで良かったはずだった。

だけど…リンとのセックスは想像以上だった。

リンが好きだ。愛している。はつきりとそう感じてしまった。

おれはこの男を失いたくない。

愛とは独占力なのかな。リンをおれだけのものに…ひとり占めしたいと思っっている…

おれの前でリンが他の奴のことを思うのは嫌だ…

今まで感じた事なかったのに…

きつとこんなことを考えているとリンが知ったら、おれを見損なうかもしれない。

おれは姑息な男だ。リンに嫌われないためにはどうしたらいいか

と、考え始めている。

まだたった一度繋がっただけの関係なのに。

「ミナ…眠らないのか？」

リンが目を開けておれを見る。慣れてしまっているはずなのに、その眼差しにドキリとする。

「あ…うん。なんか興奮しているからかな。眠たくならない」

「そう…じゃあ、少し話そうか？」

「うん」

リンはいつもの顔に戻って、おれに腕枕を差し出し身体を寄せた。

「初エッチの気分はどう？」

「すごく…嬉しいよ。なんというか…初めての相手がリンで良かった」

「なんだよ、それ。他の奴ともやる気満々って言ってるみたいじゃないか」

「違うよ。そういう意味じゃない。今までのリンを好きな思いと、した後のリンへの想いが…なんか違う気がする。深くなった感じ。それを感じられたのはリンと繋がったからだ」

「そう、良かったよ。もうやりたくないって言われたらどうしようかと思った」

「リンこそどうなんだ？おれは、あの…良かった？」

「ん？なにが？」

「…」

判っているのに言わせたがる。こういうところは相変わらず意地悪だ。

「おれで感じられたかって聞いてるんだよ。もう！本当に、リンは意地が悪い」

軽く胸を叩くと、リンは参ったという風に顔をしかめ、そしてゆっくりとおれの顔に触れる。

「…俺はミナとの初めてのセックスを思い出にはしないよ。たぶん
…思い出にはならないと、思う」

「どういうこと？」

「ただ想いが、残るんだ。いつまでも。ここにね…」リンは自分の
胸を押さえ、目を伏せ言葉を続ける。

「その想いは、思い出にはならず死ぬまで残っているんだ」

「リン…」

「つまりは…すごく良かったってことだ。安心しな。ミナの身体は
俺とは相性がいい。気持ちよかった。いっぱい色々なワザを試して、
どんどん開拓しよう。それでミナの性感帯ってさあ…」

「もういい！もう、わかったから…」

おれはリンの口を押さえた。どこまでが冗句でどこまでが本気な
のか…

そういうところも嫌いじゃないのが癪に障るんだが。

「眠れないのなら、羊でも数えようか？そうだ、いいこと思いつい
た。羊の代わりに、お互いの好きなところを数えよう」

「…それ、けっこう難しいかもしれない」

「まあ、いいじゃん。じゃあ俺から始めるよ。…眼鏡美人のミナが
好き」

「…」

「ほら、おまえの番だ」

「…これって恥ずかしくない？」

「恥ずかしいからいいんだよ。こういうなんてことのないことが、
心にずっと残るのさ」

「…じゃあ、…リンは潔い。男らしい。すごくカッコいい」「ミナ、
一個ずつだよ」「あ、ゴメン」「眼鏡も似合うが、眼鏡をはずした
ミナも美人だ」「見かけばっかりだ。見かけならリンが上。非の打

ち所のない容姿。光源氏だ」「それ、褒めてない。ミナはピュアだ。混じり気が少ない原石。加工するのがもったいないが、出来るなら俺が光り輝かせてやりたい」「加工って…なんか怖いな…リンは見目だけでなく、魂も美しいんだ。おれはそこに惹かれる」「…美しくなんか、ないけどね…ミナの方こそ…そうだね、ミナは素直に見えてひねくれてるからなあ」「褒めあいつこじやなかったの?」「その天邪鬼が好きって話だよ」「やっぱり褒めていないじゃないか…」

何かに急き立てられるように言葉を続けるおれ達。

おれは気が付き始めている。

リンの中に、急速に引き込まれる自分に。

それは光の速さで突き進んでゆく…

リンはまるでブラックホールだ。

おれのすべてを吸収して、散り散りにする。

そして僅かに残った塵のおれは、リンの心の核となる。

ずっと…ずっとそこに居続けるようにおれは祈る。

それは、いつまでも溶けない澱のようだ…

「リンの全部が…好き…だよ…」

リンの胸に抱かれながら、

夢の中でも君に会える様に、

祈る…

おれは、祈り続ける…

「引力」終わり。

17 (後書き)

ここまで読んでくださりありがとうございました。

「引力」はこれで、終わりです。

宿禰凜一編に続く予定です。

次回をお楽しみにお待ちください。

第二章 焦点(前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>

h /

宿禰慧一編「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>

h /

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768>

i

第二章 焦点

> i2518 — 273 <

焦点

1、

リンと初めてセックスをしたおれはどことなく気分が浮かれっぱなしだった。

長年のコンプレックスが解消されたからだろうか、今まで気を病んでいたことがつまらないものに見えた。

リンがおれに教えてくれたのはセックスだけではなく、色んなものの味方だった。

一つの方向ばかりに囚われないで角度を変えて眺めてみる。

美しさは一遍どりのものじゃなく常に色んな形に変わるものがあるし、美しい面もあれば汚い面もある。固定概念に囚われるなどということだろうが、中々上手くはいかない。

だって、リンはどこから見ても綺麗だし、おれにとって嫌なところなんてひとつもないのだから。

こんな引つ込み思案のおれを沢山褒めてくれるのも本当なら信じがたく、薄ら寒い嘘に白けてもよさそうなのに、リンが言うとなんだかおれがとても立派な人間に聞こえてくるから不思議なんだ。

単に口が巧いだけなら、おれだって歯牙にかけないのだが、リンの言葉はなんだかおれの心にひとつひとつ刻んでいくようで、いつまでも残り続ける。

初めてお邪魔したにも関わらず、おれは宿禰の家に丸二日間居付き、その間、する事といたらセックスと勉強だけだった。

何回かなんて数えるのも恥ずかしいくらいリンとした。

今まで知らないでいた自分の渴望だろうか、最初はリンの方から

誘ってくれていたが二日目の夕方になるとリンと離れるのが寂しくておれから求めた。

気持ち良いからしたいというだけじゃない。宿禰凜一という人間に惹き付けられてしまったという想いの方が強い気がしてきてならない。

強いて言えばリンへの依存性が強まるのはとても怖い気がした。

いつか自分が飽きられる、捨てられるという不安が始終おれの觀念から取り付いてやまないからだ。

だが、それ以上におれがリンを求めている。

リンが欲しくてたまらない。誰にも渡したくないという欲求が遙かにしのぐ勢いでおれの中で成長している。それは簡単に抑えられないものではなく、「恋」というこの圧倒的、狂信的なものに自身太刀打ちできなくて為すがままに翻弄されている気がした。

二日間をリンのマンションで過ごした後、寮に帰った俺は同室の根本先輩からの嫌味や冷やかしを案じていたが、先輩は「良かったね。これで見なっちも一人前の男の子だねえ」と、穏やかに笑い祝福してくれた。リンが言った根本先輩は信用していいという言葉は本当だったみたいだ。

二年になっても俺は根本先輩と同室で、それを先輩は舎監である保井先生が勝手に決めていようない方をする。

保井先生と根本先輩がどうい関係かなんていうのは野暮で、この寮に住んでいる生徒は大概知っている。

しかも公認であるにも関わらず先輩は他に気に入ったターゲットがあれば食いついていくのだから、保井先生も辛抱強いものである。

おれだったら…おれが保井先生でリンが先輩の立場であったなら、おれは許せるだろうか…他の奴とセックスをするリンを許せるのだろうか…許せないと思ってもそれをリンに言えるのだろうか。

言葉にすれば二人の関係は壊れる…そう思っただけで先生は言わないのではないか。

おれはそれを先輩に聞いた。恋人が居るのに何故他の男と寝たりするのか？と。

「単にぼくがセックスが好きと言うのもあるけど…そうだね、相手の愛情を試しているのかも知れないね」

「試す、んですか？」

就寝すべくベッドに横になった根本先輩は学習机に張り付いておれをいつも一言呆れた言葉を吐いて寝付く人だが、今夜は珍しくベッドの中で本を読んでいる。

「愛情ほど変わりやすいものはないよ。温度であれ形であれ、たった一つの言葉で浮かれたり沈んだりねえ、相手がぼくのことをいくら愛してるって口で言ってもさ、それが見えるわけでもないからね。それに恋人つてさ、すぐくつろな存在だと思っただけ。少なくともぼくは三年生だろ？ 大学は関西の方を狙っているからね。恋人ごっこは卒業したら終わりだよ」

「くつろ、って…」

根本先輩の実家は三重の鳥羽の方だった。だから関西の大学にとこののはわかるけれど…

「そんなに簡単に好きな人と別れられるものなんですか？」

「簡単じゃないよ。でも…恋人同士っていつかは別れるもんじゃないのかな。いつまでも愛してるという状態の気持ちを持続できるパッションは持ち得ない、と、ぼくは思っただけ。愛情を信じないってこのとは違うよ。変わるのとは普通だと言いたいただけさ」

「でも、本気で好きになつた人を一生愛したいと思わないですか？ だって…期限付きで人を好きになつたわけではないでしょう」

「人間にはもともと期限がある。命っていうね。もつとゆくと賞味期限もある。だから、美味しく感じられる時に食べなきゃ損ってい

う理屈も成り立つ」

「……」

「その逆で、他の甘い蜜には目もくれず、そいつだけを一生味わい続けるっていう希少な動物も……たまにいるのかもね。みなっちはどつちかな？」

「おれは……リンだけでいい。だけど恋愛はひとりでするものじゃない。おれがいくらリンを好きでいてもリンがおれをずっと好きでいてくれるとは保証できない……」

「保証どころかさ、本当に相手が自分を好きなのか？自分は本当にこの相手を好きなのか？いつだって揺れ動いているものだよ、恋つて」

「先輩は自分がどう思われているか、本当に愛されているのか……不安にならないんですか？」

「なるさ……不安で仕方がないさ。だからいつ捨てられてもいいようにね、自分が惨めにならない方法を考えるのさ」

「……」

「どつちみち人間っていう奴は独りで生きるしかないんだと思うよ。どんなに好きあってもね」

先輩は読んでいた本と閉じると「おやすみ」と、布顔が隠れるぐらいに布団を引き上げて眠ってしまった。

暗くなつた部屋の中、机のスタンドだけが煌々と明るい。おれは開いた数学の問題集を見つめた。

今のおれは問題集より遥かに難しい問題に頭を抱えている。

先程の先輩の言葉は「恋」に浮かれている自分には理解しがたいものではあるが、もしリンを失つたらとても生きてはいけなさとさえ思えるおれは、もう孤独な自分など見たくもないと思うのだった。

第二章 焦点(後書き)

筆者のBLOG「augagreennoon」は<http://arrowsetter.nail.blog57.fc2.com/>

2.com/

イラストも多数ございます

2 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>

h /

宿禰慧一編「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>

h /

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768>

i

2.
リンの誕生日は四月十四日。平日だったがどうしてもリンと過したくて、リンのマンションでふたりだけのパーティを催す事にした。

平日の外泊は禁止されている。

根本先輩に相談すると彼はニヤリと笑い、

「じゃあ、今晚、みなっちがリンくんにめっちゃ熱いサービスするって約束するのなら、後はまかせてよ。ついでに、熱い一夜を僕にもれなく詳細に話して。参考にするからさ」

「…なにひとつ先輩の参考にはならないと思うけど…」

「いや、あのリンちゃんだよ？どんなワザを持っているのか知りたいじゃない。みなっちは初めてだからわかんないことだらけだけど、宿禰はねえ。正直さあ、みなっちは宿禰みたいな経験を積み上げた奴を最初の男にしておいて良かったよ。ぼくなんかさあ…相手がウブ過ぎて、困る事いっぱいあるからね」

「最初の男って…」

そういうものなのか…まあ、そうかもなあ。おれのセックス恐怖症もリンのおかげで治ったようなものだし。

「おれにとってはリンが最初で最後の男にしたいですよ」

「そうなるといいけどね。でもね、人間って不思議なもので、ひとりだけを相手にしても飽きちゃうんだよ。リンくんだってさあ、みなっちが新鮮なうちはいいいけど、そのうち飽きるかもね」

「…うるさい」

それだけでなくも自信がないのに煽らないで欲しい。

しかし、確かに根本先輩の性教育は役に立ってはいるし、相談や寮の融通もきいてくれるのだから、これ以上の強い味方はいない。

それとは別に、両親がこういうおれの生活を知ったら何の為に高

い金を出してココにやっているのかと怒髪天間違いないな、と、i
ポットを耳に嵌めて踊っている先輩を眺めながら笑いを堪えきれな
かった。

食事の用意はリンに任せて、夕方、おれはケーキを買ってリンの
マンションへ向かった。

玄関である時の女の子と偶然出会い、ドアと一緒に潜り抜けてエ
レベーターに乗り込む。

「今日も凜一お兄ちゃんのところ？」

「…そうだよ」

「…本当に凜一お兄ちゃんのためのお友達？」

「只って…」

「親友…」

「ふくん。まあ、いいわ。でもお兄ちゃんのお嫁さんはあだしだか
らね」

「…」

「知ってる？男のひと同士は結婚できないのよ」

「…知ってます」

彼女は勝ち誇った顔をしてエレベーターを降り、手を振って見送
ってくれた。

「…なんだか疲れた。」

リンの自宅に伺い玄関に入ると、リンはおれを抱き締め歓迎して
くれる。

それだけで満ち足りた気持ちになれる。

さつき、学校の温室で合ったばかりだというのに、なんでこんな
に嬉しくなるんだろうか。おかしくて吹き出すと、リンも同じよう
に思ったらしく顔を見合わせて笑いあう。

こんな風にリンとふたりだけでずっといられたら…と、心底願っ
ている自分に呆れたり胸が高鳴ったりと忙しい。

食事の用意を手伝いながらエレベーターで出会った女の子の事を話すと、

「ああ、10階のミキちゃんだ。女の子はあのくらいが一番かわいいよね。純真さだけじゃなくてちょっとした媚態も備わっていてさ。俺を誘惑したりするんだぜ、小学一年でさあ。プロポーズもされたしなあ」

「すべからく色んな奴にモテて、さぞいい気分なんだろうね」
面白くなくてつい嫌味たらっしい言葉が口をついた。

「…なんだよ、妬いてるのか？ミナ。相手は小学生だよ？」
「べつつに…妬いてないもん」

強がりを言うおれを口端だけで笑い、リンはおれの頭をポンポンと撫でる。

「そんなに心配なら、今度ミキちゃんに言っておくよ。恋人ができたから将来の約束は反故にしますってさあ」

「そんなこと…言わなくていい」

俯いたまま赤くなった顔を上げられないでいた。

リンはおれを背中から抱き締め、「愛してるよ、ミナ」と囁く。

おれは泣きそうになる。

嬉しさと切なさと不安で…息が止まる。

言葉なんていらぬから、おれの傍にずっといて欲しい。

手巻き寿司とすまし汁にポテトサラダ、それにおれが買ってきたケーキでリンの誕生日のお祝いをした。

「いつもは誰かにお祝いしてもらっているの？」

「うん。去年は兄貴がいたからね。食事に行ったかな。兄貴がいな
い時は、行きつけのジャズクラブで、お客さんやらなんやらで盛大
にお祝いしてもらってた」

「ジャズ…」

こういう時…

おれの知らないリンの世界には、沢山のリンを好きな人がいるの
だろうなあと思ひ知らされる。

おれが知っているリンはまだ出会って一年、付き合うようになって半年程だ。

何も知らないくせにリンを独り占めしようとするおれは貪欲な人間に思えて仕方がない。

「リン、誕生日のプレゼントだけど…」

おれは自分で描いた絵をリンへの誕生日のプレゼントにした。

クリスマスの際にリンから貰った色鉛筆を使って描いたものだ。

温室の草花をコラーージュ風に纏め描いたものだが、納得がいかな
くて美術部の先生に指導を受けた。先生は美術部への入部を盛んに
勧めるが、おれは丁寧な断わり続けている。

関心が向くと気が済むまでのめり込むのが自分の性質だろうと感
じていた。だから、勉強以外に懸命になりそうな事は避けなきゃな
らない。

と、言っても今のおれは目の前の奴に懸命になっているから、今
までのおれ自身への忠告は恋愛には敵わなかった事になる。

リンはおれのプレゼントを喜んでくれたが、「俺の肖像画を期待
していたけど…」と、言われ口篋ってしまった。

本当にはリンを描いた絵をあげたくて、何度も試してみたのだが、
何枚描いても少しも気に入った風には描けなくて、断念したのだ。

「この次は…頑張るよ」

残念そうに口を尖らすリンに、おれは済まない気持ちで一杯にな
る。温室であれだけリンをモデルにデッサンしていたのだから仕方
のない話だ。

ケーキを切り分け、食べているとリンの携帯電話が鳴り、リンは
「あ、慧だ」と言いつつ嬉しそうに電話を取った。

慧というのは慧一、リンのお兄さんだっことは知っている。リンの誕生日にわざわざアメリカから電話してくるなんて、よっぽど弟がかわいいのだろう。

そりゃそうだろう。リンは綺麗だし、そこに居るだけで陽が差し込むように際立った輝く者なのなもの。お兄さんだっ、誇りに思うことだろう。

「誕生日のお祝い？」

携帯を切ったリンに話しかける。

「うん、朝起きたばかりだっ」

「リンは愛されているんだね、お兄さんに」

目の前のケーキを突きながら、おれは羨ましげに言う。こういちいち嫉妬するのも自分自身癪に障る。

「実はさ…春休みに兄貴のところへ行っていたら？」

「うん」

「それで、ミナのことを聞いてもらっていたの」

「え？なにを？」

「ほら、俺たちうまく…セックスできなかったじゃん」

「…」

「だからさ、慧にどうしたら上手くいくかなって相談してた」

「…マジで…」

おれは羞恥心のあまり、青くなったり赤くなったりとぐるぐるしてしまふ。

なんでそんなことを平気な顔で言えるんだよ。

「おかげさまで上手くいきましたっって言っただけから」

「よ、よく…そんなこと身内に話せるね。恥ずかしくないのか？」

「なんで？だっ俺はマジで悩んだし、ミナだっってネコ先輩に相談したっって言っただじゃん」

「おれは…身内じゃないもん。根本先輩はおれたちの事を心配してくれてたし、親兄弟とは全く別物だよ」

「そうかな…俺は俺の好きな奴のことは慧にも知って欲しいって思っているんだけどな…できるなら家族に、というか沢山の奴に理解してもらった方がいいと思わねえ？」

「そりゃ…」そうだけど…

普通は喋らないもんだよ。付き合っている奴とのセックスの事なんか。

リンは相変わらず普通とはどこか感覚が違い過ぎるところがある。

「リンには、お兄さんは特別なんだろうね」

嫉妬も交え、少し呆れた風にぼやくと、リンは嬉しそうに、

「慧は俺にとつて、なくてはならない自分の一部みたいなもんだろうね。遠く離れてても繋がっているような気がするよ」

「…そう」

じゃあ、おれは…おれはリンにとってどういう存在？お兄さんとおれのどつちが大事？

…まったく不毛な問いではあるが、喉元まで出掛かって飲み込んだ。

どうせ答えは決まっている。

「慧は慧だし、ミナはミナでしかない」と…

その夜のふたりの熱さときたら途轍もなかった。まだ外はこの季節、二番目の春の嵐に吹き荒れているっていうのに…

お互いに求め与え合い、どこまで行けるのだろうと声にした。行けるところまでだよ、と、どちらかが言った。

最後に叫んだのはおれの方だと思う。

堪らない…いい…大好きだ…リン。

どこまでリンを好きになれば気が済むのだろうと、おれは自身の感情の未熟さに怖れをなした。このままではリンがおれから離れていく時、おれの心臓は止まってしまつかもしれない…と。

2 (後書き)

筆者のBLOG「augagreennoon」は<http://arrowsetter.nail.blog57.fc2.com/>

2.com/

イラストも多数ございま

3 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>

h /

宿禰慧一編「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>

h /

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768>

i

注意：全くたいしたことのない18禁。

3、

新学期早々の校内模試の結果が張り出された。

学年の順位は各自全員がプリントを貰うことになっているが、学校側としては掲示板に張り出し、意識的に生徒達を競わせようとする思惑もあるのだろう。

その上、一位から10位までは大文字で表してあるから、見ようとしなくたって目に入る。

リンと引きこもって勉強したおかげかどうかは知らなかったが、おれの点数は二位をかなり引き離してのトップだった。

おれはさして順位に興味はないのだが、何とはなしにその順位表を見ると、宿禰の名前が9位にある。

あいつは良くて30位前後って言っていたから、これは大躍進だ。なんだか自分の事より嬉しくなってしまった。

放課後、温室でそのことを言うと、

「いや、俺の実力と言うよりミナの教え方が良かったんだよ。ミナは先生向きかも知れないぞ。でも、今は俺専用でいてくれよ。他の奴がミナと顔を突き合わせて教えてもらってるって思うと俺も気がじゃない。ミナは時々エロっばい顔をする」

「エロっばいて…してないよ、そんなの」

「自分じゃわからないだけだろ。眼鏡はしてるよ。おまえは目に色気があるからな」

「そんなこと言うのはリンだけだよ。それに色っばいのはリンの方だ」

「まあね、俺はエロいことしか考えてねえから」

トラウザーズのポケットから煙草を取り出し一本に火を付ける。
ピアニッシモのメンソールの煙があたりを漂ってくる。いる？と顔
で聞くから、リンの吸った煙草を貰う。

リンの身体に軽く凭れながら紫煙の行方を追うのが楽しい。

リンももう一本煙草に火をつけると、おれの肩を抱いて煙を吐く。
ふたつの紫煙が絡まっていく様に見惚れていると、リンが口を開
く。

「それより…おまえのクラスに高橋とかいう奴いたよな。今回も二
位だったろ？いつもおまえのすぐ後ろにいるから付いたあだ名が」
水川の金魚のふん』」

「そ、そうなの？…それはあんまりだろう」

同じクラスの高橋は何故かおれに敵対心剥き出しで、事あるごと
に突っかかってくるから、おれも出来るだけ近づくのを避けている
のだが、そんなあだ名をつけられるのはこっちが迷惑だ。

「あいつが何かとおれに言いがかりをつけてくるのは、そういう風
に言われているからなのか？おれは試験の順位なんて気にしてない
けど…」

「今回俺が9番にいたからかね。そのとばっちりがきた」

「…え？」

「ついさっき、その高橋とすれ違い様に俺の方をめっちゃ睨んで」
水川と楽しくやっていられるのも今のうちだからな。おまえなんか、
顔だけの男だ』…と、言ってくれた」

「は？」

「あれは逆に俺の顔がいいと褒めてくれてるんだろうか。…面白
い男だな。残念だが、こっちは全く趣味じゃないけどな」

「…」

「同じ眼鏡でも俺のミナとは雲泥の差だな」と、俺の髪を軽く撫で、
額にキスをする。

恥ずかしがりもせず、にそういう殺し文句が許されるのも高橋流に
言えば顔だけの男だからか？

しかし一寸の躊躇いもなく「俺のミナ」というリンが、好きで堪
らない。

絶対に負ける。

おまけに…

「ね…ミナ」

リンの指がおれの首筋を撫で、その後をリンの口唇が追う。

「少しだけ…ね」

上着を着てなかったのが災いしてか、リンの手は早くもおれのシ
ヤツの中にある。しかも、もう一方の手はベルトにかかっている…

「リ、リン…誰か来たら、やばいよ」

「大丈夫。来たら誤魔化すから」

「…」

どうやって？と、反論する気も失せる。

だっておれの方が我慢出来なくなる。

「かわいい、ミナ。大好きだよ。他のやつにこんなことさせるんじ
やないよ」

「リン…」

トラウザースと下着を脱がされ、リンにしがみ付き、抱えられた
この格好は絶対おかしい。

なんか…変態にでもなった気分だ。

「あの高橋って奴だって、おまえとこういう事したいのかも知れな
いんだぜ、本当のところは」

「ま、さが…」

「本当さ。ミナは自分の魅力がわかってないんだよ」

そんなのどうでもいい…中が疼いて仕方がないから…早く…

「リン…頼むから…」

おれの腰を強く引くリンの首筋に思い切り歯を立てた。そうしなきゃ理性が保てない。

最も理性なんかとっくに無くしている。

「い、いつてーっ!!」

温室にリンの悲鳴が響いた。おれは理性を総動員してリンの様子を伺った。

リンは涙目で

「おまえ…は…吸血鬼かつ!」と、詰られた。

リンの首筋を見ると…それはそれはくつきりと鮮やかに鬱血した状態でおれの歯型が浮かんでいる。

「リンが悪いんだよ。おれの理性を飛ばした張本人だもの」

悪びれずに言うと、リンも負けずに

「じゃあ、お返しにこのままでもう一回。噛まれないように後ろ向きでね。今度はおまえの声を聞かせろよ」

感情に任せてどうにでもなれというのは敗者の言い分だ。

おれは最後まで理性を保ったまま、声も上げずに歯を食いしばった。

何故なら…

9位の奴には負けたくなかったからだ。

3 (後書き)

筆者のBLOG「augagreennoon」は<http://arrowsetter.nail.blog57.fc2.com/>

2.com/

イラストも多数ございま

4 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>

h /

宿禰慧一編「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>

h /

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768>

i

4、
6月の後半に催される文化祭に、クラスの美術部員から出展が少ないからと、絵を頼まれた。

それでもなくてもこの文化祭のポスターは美術の授業で全員に描かれた文化祭のポスターのうち、おれが描いた絵が選ばれ、印刷されたそれがあちこちの壁に貼られている始末なのに、これ以上美術部に関わるのは、折角歯止めしている絵への執着を再び燃やしかねないと断ったが、顧問の先生にまで頭を下げられ、仕方なく引き受けた。

休み時間や放課後リンが部活で温室で会えない時は美術室に残って、水彩画を描いてみた。

回りの美術部員は油彩に取り組んでいて、その存在感の違いに圧倒される。

やはり水彩と油彩では比較にならない。

先生は試しに油彩をやってみるよう薦めるが、それに手をつけたら後へは引けない気がして躊躇してしまう。

おれは描きかけの温室の花を水彩で色を塗り、提出した。

文化祭ではおれらのクラスは珍しくも無い喫茶コーナーだった。

リンのクラスは焼き鳥やで繁盛していた。リンの姿を辺りに探してもいない。

「詩人の会」は教室を借りて朗読会をしようと言っていたからそこだろうと足を向ける。

飲み物が出るものの150円も出して詩を聞く奴がいるのかと訝るが、様子を伺ったら人が一杯で驚いた。

俺はリンから貰ったチケットを出して後ろの方に立った。(実は椅子は全く空いていなかった。しかも父兄というか：ほぼおばさん

たちと校外の女生徒らが占領していた：そして壁に張り付く男子学生：おれも含めて…）」

これはもしかしたら…リン狙いじゃないだろうか…と、不信に思っている、その当人が教壇に恭しく立ち、そして詩集を手にくりと読み始める。

「ジャン・コクトーの詩集から…」

部屋に広がる心地よいテノールの声…

「嬉しいこともしすぎると 僕らの幸福に傷が付く」

（彼はここでおれにむかって軽くウインクをした。）

「僕の命の蜜蜂よ、どんな悪事を君らはしたか？」

君らの空ろな蜜房が 罪の棲家である以上

僕はもう 幸福になりたいなどと 願いもしまい…」

6月恒例の三者面談に親は来ない。と、いつか呼んでいない。

トップでいる奴に先生も親も何かを問う必要があるだろうか。

あなたたちの望みどおりの大学を受験し、しかも当然合格する一定の成績を持つ俺に、一体何を求めるのだろうか。

担任の藤内先生も親が来ないことに文句を言わない。おれに対しても今までどおり成績を下げる事のないように油断なく頑張れと言われた。

ただ…「水川は恋に浮かれても、ちゃんとやる事はわかっているから見直したよ」と、韻を含んだ言い方をされた。

「…浮かれてなんかいません」

「そうか？近頃の温室の花はなんだかやけに艶めかしい色をしている気がするけどなあ」

藤内先生はおれ達が温室で何をしているのか知ってるのか？

まさかリンとあんな事やっているとどこまで見られているとは思わないけれど…

やっぱり学校内でやるのは控えたほうがいいな…

「ちゃんと世話をしているから、花も綺麗に咲くんですよ」

「恋の花も綺麗だろうが、いつか枯れる時が来る。それを見計らっておけよ」

「恋愛の未来を予測して計算どおりにいつて、何が見つかるんですか？それはおれが求めているものなんでしょうか？…おれは計算どおりに出した答えを望んではいません。違いますか？」

「いや…驚いたね。水川がそこまではっきり言い切るなんて。恋の力は偉大だな」

「先生。おれはあいつを好きになったことを後悔することはないと思います。もし…花が枯れてしまっても…根があればまた育ち咲くかもしれない」

「そうだね。季節と共に花は姿を変えるが、その花の名前は変わらないもの…水川という花も、自分を失うことなく変わらずに咲き誇って欲しい」

放課後、温室でリンを待っていると、リンも面談だったらしい。

しかも担任の藤宮先生になにか言われたらしくえらく機嫌が悪かった。

おれが藤内先生に言われたことを言う間も無く、おれにしがみ付いてくる。

乱暴にキスを求めるリンを責める気には到底なれない。

おれはリンを抱き締めた。

「ねえ、リン…おまえが好きだよ。どんなリンでも、おまえに触れられていられるだけで、おれは自分の存在価値を見出してしまっただ…それってある意味究極の幸せって気がしないか？」

リンは俺を見つめ、そしてゆっくりと見事な笑顔をおれに向けた。

「愛してるよ、ミナ」

その言葉は俺の中で形になる。
どんな形にも属さないシンプルクテック多様体。
さあ、美しい座標を描け。

5 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>

h /

宿禰慧一編「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>

h /

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768>

i

5、
高校二度目の夏季休暇が始まった。

去年と同じように、学院の特別講習の受講の為、おれは実家へは帰らず寮から学校に通う毎日だ。

去年と違うのは授業の選択だ。

国立大学希望者は文理に関係なく全科目の講習を受ける事になる。今年も午前も午後も拘束されるわけだ。

温室でリンと会う回数は少なくなるが、仕方がない。

どっちみち…

毎週末ではないが、月に二回はリンのマンションへのお泊りコースを選んでる。

同室の根本先輩は恨めしそうに、

「君たちはいいなあ、恰好のラブホテルがあつてさ。時間もお金も気にしなくてもいい。何より親がいないなんてさ。これ以上の環境はないじゃない。真に羨ましい限りだよ」

「先輩は寮全室がラブホテルじゃないですか。節操がないんだから。それに…ケンカでもしたんですか？保井先生、近頃機嫌悪いみたいとぼつちりが来る前に早く仲直りしてください」

「保井は僕を縛り付けただけなのさ。僕は敬虔な使徒じゃないもの。移ろいやすいカナリヤさ」

「…カナリヤって、籠の鳥の比喻ですよ。むしろ自由の象徴はカモメでしょう」

「やだよ。みなつち、チエーホフのかもめ知ってる？剥製になるんだよ。自由のために羽ばたいた一羽のかもめが男のために剥製にされる悲しさよ…いつだつてか弱く美しい者は虐げられる運命なんだ」

「…誰がか弱く美しい…だよ。」

確かに根本先輩はそこらへんのアイドルよりかわいって言われるけれど。それに「かもめ」ってそんな話だったか？

ベッドに突っ伏して泣きまねをする先輩の背中を見ながら、ストリーを追いかけてみるが思い出せない。いいや、後でリンに聞こう。

おれはいつものように勉強道具だけを持って部屋を出る。

「じゃあ、行ってきます。届けには実家に帰りますって書いてますのでよろしくお願いします」

「かわいそうなぼくを見捨てていくの〜」

先輩はオーバーにうつ伏せて泣き叫びながら、手を振ってくれた。…実にイイヒトだ。

リンのマンションには何度も出向いているけれど、どうしても慣れない。

いつの整然としててキレイだし、なんだか人が住んでいると滲み出る汚れというものが極端に少ない。それを問うとリンは「こう見えてもおれは案外神経質でね。見えるところに余計なものを置きたくないんだよね。それにひとりだから使う空間も少ないじゃない。」

俺、家では煙草も極力吸わないしね。だから綺麗なんじゃないかな」その言葉の裏に存在するリンの孤独が悲しい。

晴れた真夜中、広いベランダでふたり寄り添ってよく夜景を見た。現実の世界、勉強や受験や家族に縛られている自分自身を解放できる気がする。生きていけるしがらみにも寄せ付けない別空間にいるようだ。

それを言うとリンは笑って「縛られていると思っっているうちが花。何かに縛られている方が…本当は楽なのかもしれない…」

そっというリンの横顔は孤独だ。

おれはいつだってリンの中に孤高ともいえる他の者とはかけ離れた感受性、情感、思考、思想に惹き付けられている。

誰に対しても物怖じしない天性の人懐っこさは、おれみたいな内気で臆病な人間には輝ける存在だし、それでなくてもあの容貌だ。すれ違う半分の人はリンをもう一度見るために振り返る。

表情豊かに雄弁に想像と空想世界を語りつくすリンに、おれも同時に飛翔している気分させられる。

それとは逆に、自分の決めた範囲内に決して近づけない距離感。気に入らない者への無慈悲なまでの冷淡さ。

おれにさえ見せようとしないうリンの本当の心の内には一体何があるのだろう。

「8月には兄貴が帰ってくるから、ミナを家には呼べないけど、我慢してくれよな」

終わった後、リンのベッドで身体をくっつけ合いながらリンは言う。

「わかった。良かったね、お兄さんが一緒ならリンも寂しくないだろう」

「…」

「なに？」

「もっと、寂しがって欲しいってどうか…残念って顔するのかもしれない、意外だった。本音は解放されて嬉しい？」

「そんなこと、あるわけがなかるう。たださ…」

「なに？」

「…なんでもない」

「言えよ」

「もう眠たいからさ。眠ろうよ。ここに来なくなたって、おれ達はいつだって温室で会えるじゃないか」

「見事にはぐらかされた…まあ、いいけどね」

リンはおれの頭をぼんぼんと叩きながら、サイドテーブルの灯り

を消した。

本当は…嫌だった。

ここに来れなくなるのも、このままセックスを続けてその果てを見るのも…リンのお兄さんがリンと一緒に過ごすのも、そういう嫉妬を感じる自分も…全部、全部おれは…

怖くて仕方なかった…

リンの傍から離れたくない。だけど…しつこくして五月蠅がらる、ちよつとでもおれを煙たがる、そういう素振りをリンがしたらと思うと…とても恐ろしい。

本当にこんなものを抱えて、おれは一生を過ごさなきゃならないのか？

こんなに恋焦がれる奴の…おれを抱き締めるこの腕がいとおいしくて、いとおいしくて怖いんだ…

お盆休みで一週間ほど実家に帰省した。

相変わらずの親バカの愛情はほどほど頂いておき、昼間は図書館や街をぶらついた。

隣町のCDショップでリンに勧められたジャズの曲を探していたところ、後ろから女の声で名前を呼ばれた。

「水川くん？」

振り向くと、どこかで見た顔。

「？」

おれは頭を捻った。

「もしかして忘れちゃったの？」

女は訝るようにおれを睨んだ。…あ、そつだ。

「原田？」

「そう、やっと思い出した？中学卒業してまだ二年も経っていないのに、つれないね」

「…」

「ね、ちょっとお茶でもしようよ。私、青弥のこと、気になっていたんだ」

「…」

面倒臭いと思いつつも、断る正当な理由も思いつかないおれは、中学時代惹かれていた原田理香子の後ろを付いていく。

6 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>

h /

宿禰慧一編「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>

h /

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768>

i

6、
直ぐ近くのスタバに入り、おれはラテを、彼女は氷の入ったやつを頼んだ。窓際を避けて、一番奥の静かな席に向かい合わせて座った。

「先週、中学の同窓会があったのよ。青弥来なかったね」

「…学校の補習が忙しくて、こっちに帰っていなかった」

同窓会の連絡はもらっていたけれど、その気が全くなかったので無視していた。大体中学を卒業して二年も経ってないのに懐かしむも何もないだろう。

「いくら進学校でも日曜は休みでしょ？鎌倉だったらすぐに帰ってこられる距離じゃない。私、青弥と会ったの結構楽しみにしていたのに」

「…」

どういう意味かさっぱりわからず、思わず顔を上げて原田の顔をまじまじと眺めた。

顔かたちの変化はよく判らないが、髪が…

「髪、切ったんだね」

「あ…うん、うちの高校、規律が厳しいからね。おかしい？」

「え？別に…」

なんだか髪型がリンに似ているって…そう思ったんだ。

リンの方がもっと黒くて艶やかな気はするけれど…

…え？なんでだ？原田は女でリンは男なのに、なんでおれ比べているんだろう…

それに、リンの方が圧倒的に魅力的だって…はっきりと感じてしまっ。

…だから比べる意味がないだろうよ。バカじゃないのか、おれ。

「…あんまりジロジロ見ないですよ。恥ずかしいじゃない」
「…ゴメン」

そんなに見ていたつもりじゃなかったが、前に座る原田は赤面しながらおれを睨みつけた。

「青弥って中学の時は、私の顔をまともに見ようとしなかったのに、高校になって随分と男らしくなっただみだいな」

「そうかな…」

「ね、好きな子できた？」

「え？」

「もし居なかったら…私ともう一回付き合ってみない？今度は…ちやんと青弥を受け止めてあげるから」

「…」

おれはゆっくりと目を閉じた。

…何のときめきも高鳴りもない。彼女はもう過去の人でしかなかった。

「ごめん。おれ、付き合ってる相手がいるんだ」

「…そう、なの？」

「うん」

「青弥の高校って男子校だから…てっきり青弥はフリーなのかと思っちゃった」

「結構…多いよ。恋人がいる奴。近くに女子高もあるしね」

「青弥の彼女はその女子高の人？」

相手が男だっという事は黙ってしよう。色々と説明するのも面倒だ。

「いや、違うけど…とても…」

言いながらリンの笑った顔が、思いつきり目の前に浮かんだ。おれは思わず口元が緩んだ。

「大好きなんだ」

「…」

「あ、変な話しちゃったね。悪い」

「あゝあ、また振られちゃった。私の顔をジロジロ見るから、まだ少しは好きでいてくれるのかもって…期待しちゃった」

「…ごめん」

「いいよ。本当は悔しいけど…でもあの青弥をこんなに変えたのがその彼女なら…諦めるしかないわね」

それまで負けん気の強さを漂わせていた原田の空気が一気に緩んだ気がした。もしかしたら彼女は彼女なりにおれに対して精一杯虚勢を張っていたのかもしれない。

おれと原田は店の前で別れた。

「お別れの握手」と、原田が差し出した右手をおれはしっかりと握り締めた。

驚いた事にあの夏に味わった苦さ、惨めさ、自分に対する失望感は、おれの中で思い出として見つめる事が出来るようになっていた。

「元気でね、水川くん」

「うん、原田も」

初恋の人、君を僕の中でひとつの形にする。

小さく輝く硝子の欠片。

お盆休みが終わり、学院に戻った。

補習が終わると温室へ直行だ。

リンはすでに温室に居て、植物にホースで水を撒いていた。

虹色に輝く水しぶきの向こう側で、おれに笑いかけるリンの顔が見える。

「おかえり、ミナ」

「リン…」

手を伸ばすとリンはホースを地面に落としておれを抱き締めた。

「会いたかった、リン… たった一週間会えないだけなのに、バカみたいに会いたくて仕方なかった」

「同じく俺も」

「嘘だ。リンは家族で温泉旅行を楽しんだんだろ？おれのことなんか忘れて」

「なんだよ、家族にやきもちか？本当は家族で行くよりミナと行きたかった。今度いつかふたりだけで温泉に行こう。露天風呂付きの部屋でしっぽりとさあ…」

「言う事が親父過ぎる。スケベ心丸出しだよ」

「ミナだって欲しくてたままないって顔してるくせに…やる？」

「…」

断れるわけがない。

だって、おれの方が絶対に間違いなく…リンを欲しがっている。

それを言うとリンは嫌味つたらしく

「ミナの絶対と間違いなくは信用ならない。何故ならば…ミナは肝心なところで降参してしまうからね、この天邪鬼」

近づいたリンの口唇の熱さにおれは有頂天になる。

その熱さをおれは「恋熱」と呼んだ。

7 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>

h /

宿禰慧一編「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>

h /

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768>

i

> i 5 1 9 1 — 2 7 3 <

7、

リンのお兄さんがリン宅に居る間は、おれ達は温室でセックスを
楽しんだ。

と、言っても夏休みは、温室から見える運動場は一日中部活を勤
しむ生徒達が見える。こちらから見るといふ事は、あちらからも
見ろうと思えば見えるわけだ。おまけに温室にエアコンなんて付い
ているわけもないから、暑さを凌ぐ為に窓を開ける。

…変な声だつて出せない。

気もそぞろというか、スリルも過ぎると快感より気が散って仕方
がない。

しかし廃屋寸前の温室とはいえ、レトロなレンガ造りでしっかり
した造りになっていて、案外外からは見えにくい盲点の場所もある。
そこに捨てられてあつた机と椅子を置いてその上で…

下半身剥き出しになるのは大体おれの方で、リンはいつも余裕の
表情でおれを翻弄する。

言いように誑かされている気がしてムカつく時もあるが、リンの
いわゆる…慣れたテクニクというか、色んな事にはおれは付いて
いくのが精一杯で言うとおりにするしかないのが実情。

セックスに関してと素人のおれは当然太刀打ちできるわけがない。
。

リンは一体どれくらい経験をしてきたのだろう…と、時々リン
の過去の相手を妬んだりする。

リンは過去にやった奴とおれを比べたりしないだろうか。

色々悩むというか…悩んでも仕方ないことだが、焦りや憂鬱は減

りはしないどころか…

おれはリンにとって一番でありたいと…思っている。
思ってはいるがまるで中身が伴わないスカスカのカレーパンみた
いな感じがする。

「カレーパン?」「そう」「学食の?」「うん…」「ああ、あれ、
当たりはずれがあるよな。具がむっちゃ入っている時とスカスカな
時」「そうでしょ?」「変なミナ…なんで最中にカレーパンなんだ
…笑うぜ」「わ、笑うな!中、か、感じるから」「ミナが笑わせる
のが悪い…ほら…」「…あ、んん」

結局負けるのはおれの方なんだ。でもリンは終わった後、必ず褒
めてくれる。

「凄く良かったよ。ミナは最高だ」と。

リンの言葉は何も持たないおれに難なく勇氣と自信を植えつける。
それはおれの中で羽を広げ、育っていく。

リンという光を受けて、リンに届くように。

おれとリンが付き合っていることはあまり周りに知られていない。
同じ2年でもリンとは教室の階は違うし、校内ですれ違う事があ
ってもお互い手を上げるぐらいで話し込んだりは一切しない。

男子校だから男同士の恋人関係も少なくない気はするが、どのカ
ップルも目立つ事は避けているのだろうか、変にいちゃついている
現場に出くわしたことはない。

一度、クラスメイトからリンのことを聞かれた。

「水川って4組の宿禰と仲いいの?」

「うん、いい友達だよ」

あまり喋ったことのない興味津々の3人の面々を目の前に、少し
顔が引きつったが、おちつけ、平常心だ。

「よく付き合えるな。宿禰って綺麗すぎて近づきにくいってどうか

…なんかあいつ怖くねえ？」

「うん、なんかヤバそうな感じがするよな」

「…別に怖くないし、普通にいい奴だよ」

「中学の時のウワサ聞いてるだろ？」

「ああ、あれな、去年の年末凄かったじゃん。生徒会が必死にもみ消したんだよな」

「前の生徒会長は宿禰と出来てたんじゃないかって噂あったしな」

「…」

「なあ、ホントなのか？水川、知ってる？」

「ああいうの信じる方がイカしてる。何なら宿禰を呼んで来て目の前で喋らせようか？」

「え？…い、いや、いいです」

「あんな綺麗な顔で睨まれたら…想像するだけで恐ろしい」

「それにあいつ、腕つぶしも凄いつて聞いたし…」

「…」

肩を竦めた3人の後姿を一瞥したおれはリンの待つ温室へ急ぐ。

無性に腹が立って仕方なかった。

涙が滲んだ。

あんな奴らの言う事を真に受けちゃ駄目なのに。

リンは今までにどれだけのもつと酷いことを言われてきたのだろうと思うと、心が痛んで仕方なかった。

温室にリンの姿はまだ無かった。良かった…泣いてるところを見られたら、つまらないことを白状しなきゃならなくなる。

おれは涙を拭いて温室の花に水を撒いた。

夕刻になると色を変える酔芙蓉の花が赤くなって萎んでいる。美しい花もいつかは枯れる。

いつかは…

「ミナ、どうした？」

背中からリンの声が聞こえて振り返る。少し心配そうなりんに、おれはあわてて笑顔を見せる。

「なんでもない。折角の酔芙蓉が枯れてしまったから、ちょっと残念だ」

「萎んでいるだけだよ。大丈夫だ。明日になればまたキレイに開くよ」

「ホント？」

「本当。それよりさ、いい話があるの」

「え？なに？」

「一昨日兄貴と横浜に買い物に行つてね。抽選があつて、兄貴が箱根温泉一泊ペア旅行券を当てたんだよ」

「へえ、すごいね」

「その当たり券をおれ達にくれるって」

「え？」

「ミナと一緒に行きかけたから丁度良かった。勿論行くだろ？」

「…本当に？すごい…嬉しいよ、リン」

「箱根なんて珍しくもないだろ？」

「そんなことはない。リンと一緒に泊りできるんだよ。すごい楽しみだ。でも俺なんか行つてもいいの？お兄さんに悪い気がする」

「いいんだよ。慧はミナと行きなつて言つてくれたんだから」

リンのお兄さんがおれ達の仲を認めてくれるのは、心強い気がする。だけど、なんだかそれも気が引けて仕方が無い。

だってリンのお兄さんへの愛情はひとかたならないものを常に感じていた。普通の兄弟では考えにくい絆の強さがある。勿論それはリンの生まれ育つた環境によるものだろうけれど。それとも兄弟のいないおれだから余計それが奇妙に見えるだけなのかな。

「旅行の日程はこつちで決めていいみたい。折角だ。紅葉のきれいな時期にしよう。いい？」

「うん、リンと一緒にならいつでもどこでも嬉しいよ」

「毎度の事だけど…ミナの無意識の殺し文句には参るね」

そう言っておれの額に軽くくちづけをするリンには到底敵わない。

10月、体育祭が近づいている。

リンも応援団の練習で毎日忙しそうだ。

寮の自室でパンフレットを眺めてみた。

おれは一組でチームカラーは赤。リンは四組で黒。縦列で別れるから同室の根本先輩はリンと同じ黒組だ。

先輩はリンと同じく応援団で…と、パンフの文字に俺は息を止めた。

「ええっ？先輩、黒組の応援団長なんですか？」

おれはベッドで漫画を読みながらせんべいを食べている先輩に向かって思わず叫んだ。

「そんなに驚かなくてもいいと思うけどね。こう見えてもぼくは三年生なんだし、これだけ美人なんだから団長ぐらいは当たり前だよ」

「…そうですね」

この人も大声張り上げるんだろうか。
想像したら笑えた。

「みなうちには悪いけど、ぼくとリンくんのラブラブなダンスシーンで会場を魅了するからね。今年は黒組の勝ちだね」

「会場…はは」

なんかのコンテストか？なんでもいいや。見たくなかったら目を瞑っていよう。

体育祭には生徒の家族や先輩方が大勢集まり、毎年お祭り騒ぎとなる。

多くの演目の中でも応援合戦が一番の花形で、各クラスは半年か

けて色んな見せ方を仕組んでくるから見ものだ。

昨日まで雨で案じていた天気も朝にはすっかり晴れ上がった。

赤組の応援席の大弾幕はおれが中心になって描いたりしたものだから赤組には勝ってもらいたいところだが、いかんせん運動の苦手なおれでは点数は稼げない。応援席の隅っこでみんなの熱戦を見守る事になっている。

二年の演目の時、ひときわ大きく「リンくん、頑張ってる！」と叫ぶ声がしてその付近を見ると、なんだか見知らぬ集団が一角を陣取っている。

渋いオジサンやらちよつと怖そうな人…明らかにオカマっぽいひと…後で聞いたらリンの行きつけのジャズクラブの店長と常連さんだと言う。違和感ありまくりで笑った。

その騒がしいグループの中に、ひとりだけ目立つ男の人がいた。すぐにわかった。

リンのお兄さん…慧一さんだ。

アメリカからわざわざ体育祭の為に来たのかな…

写真では何度も見ていたが、実際に見る慧一さんはそのオーラもどことなくリンに似ていて、他の人とは存在感が違って見えた。

見事に調和された美しい人…と言うしか形容できない姿だった。

それよりももっと驚いたのは、

彼のリンを見つめる眼差しだった。

やさしく慈しむ表情とはまた別の…誰にも入り込む余地を見せない強い一途な想い…それが肉親の愛なのかどうかはおれにはわからない。

わからないが…

ひとつだけわかったことがある。

おれが戦わなきゃならないものは、あの人のリンを想う力…なのだ、きつと。

8 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>

h /

宿禰慧一編「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>

h /

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768>

i

8、

リンのお兄さん、慧一さんには一言挨拶をしておきたかった。

いつもリン宅へお邪魔しているし、箱根旅行券も貰っている。何よりリンとおれの関係を認めてくれているのだから、お礼を言うのは当たり前だろう。

昼休みの空いた時間にでもと、昼飯を食べに学生食堂館へ向かう。おれの両親は来ていない。

成績のことしか興味のない人たちだし、おれが体育祭で活躍するところなんて皆無だもの。わざわざ呼ぶ必要もない。

学食に行くと、親と仲良く懇談しながら食べている生徒も大勢居る。勿論そうじゃない奴らも多数居るのだけれど。

そちらのテーブルへ向かいひとりで定食を食う。

こういう時は手前勝手だが寂しいものがある。

友情なんて煩わしいし面倒だと思っているのに（事実そうだ）、独りだと寂しいだなんてさ、勝手すぎるよなあ…

昼食後、リンを探しに行く。

多分慧一さんも一緒に居るはずだ。

教室ではないだろう、と、思い運動場へ出た。

辺りをきよろきよろしていると、校舎の端に騒がしい一団がいた…彼らだ。

さっきのオジサンやらオカマの人、慧一さんも居る。

でかいビニールシートに座って、宴会さながらの賑わいで、飲んだり食ったりしている。

しかし、何人いるんだ？…え？七、八…九…にん？

よく見ると今年卒業した美間坂さんや桐生さんもいる。…一体なぜに？

それに藤宮先生までも…

そういや慧一さんとは大学時代の友人だったと、前にリンが言っていた様な気がする。

しかし、なんとまあ騒々しくも楽しそうな賑わいだ。お花見の酔っ払いの方々みたい。

その中心にいるのは、やはりリンだ。

なんて無邪気に楽しそうに笑っているのだろう。

おれは、リンにあんな笑顔を与えたことがあるのだろうか…

校舎の影に隠れて様子を伺っていたおれは、彼らの前へ出て行く勇氣はとても持てなかった。

おれは黙って教室へ戻った。

昼休み後、プログラムのメイン、応援合戦が始まった。

半年かけて企画、構成を練りに練ってきただけあって、毎年どのクラスも面白いし、感心する。

まず校歌を高らかに歌い上げ、その後一連の様式美を舞い、それから各々の創作ものを見せ合う。

勿論おれが気になるのはリンの黒組で、息を呑んで見守った。

なんか、黒の羽織袴のリンを見るだけで胸が高鳴って仕方が無い。かつこいいというか…モデルっぽいというか、ひとりだけ様になりすぎている…見ているだけなのに顔がにやけて仕方が無いから、タオルで顔を隠してガン見してしまった。

周りの奴らの声が嫌でも聞こえてくる。

「やっぱり宿禰は目立つよなあ」そうだろ？あいつは本当にかっこいいんだ。

「同じ高校生なのに、なんでこいつも輝きが違うんだよ」バカか。比較対象が悪すぎるだろ。リンは特別なんだよ。

「あそこまで決めてくれるともう、逆にファンになるしかなくね？」
「そうそう…え？」

「あ！あの人！根本さんが出てきた。すげえ〜ドレス着てる。しかも似合ってる。こわ…」ええっ？！

…マジですかあ？

なんかミュージカル風味になっている黒組の創作劇は、有名な海賊映画の曲に合わせ勇壮に踊っている中にドレス姿の根本先輩が現れて（どうも悪者の人質になってる姫を助けるといふ構成らしいが、そんなことはどうでもいい）、王子役？のリンと踊るといふ…たわいもない中身なのだが、リンと先輩がどこをどう見てもえらく様になってしまっていて、会場は笑いから溜息に変わっている始末。おれは…まあ、多少覚悟はしていたから驚きはしなかったが、最後に先輩がリンの口唇にキスをした時はさすがに憤慨した。

応援合戦の成績はもちろん黒組が優勝した。

その夜、同室の根本先輩を罵倒した。

「おれのリンに勝手にキスするな！」

「みなっちのリンくんは喜んでました〜公開プレイでしつかり舌も入れたもんね〜。彼、初心なミナばかりじゃ飽きるって言ったもん」

「リンは、そんなこと言わないしっ！」

下らない挑発だったがあんまり腹が立ったので、即リンに電話を入れたが出なかった。

完全に立ち直れなくなったおれに同情した先輩は、「宿禰はたぶん家に居ないんじゃないかな」と、気を使いながら言い出した。

「どうして？」

「ほら、彼の知り合いが沢山来てただろ？その人の店に集まるって言ってたから。美間坂さん達も行くって言ってたしね」

「…」

リンは学校の中でも外でも、沢山の友情を分かち合う仲間がいる。

味方がいる。

おれには…おれにはリンしかないのに…

あまりに惨めで涙が溢れてしまった。

おれはこんなにも独りなのに、今頃リンは沢山の仲間にもまれて楽しく過ごしていると思うと、どうにもやりきれなかった。

おれは心の貧しい人間だ。自分から手を広げなくせに、欲しがってばかりいる。

リンは、こんなおれを本当に…

必要としてくれるのだろうか…

9 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>

h /

宿禰慧一編「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>

h /

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768>

i

9、
翌日は代休、次の日もリンには会えなかった。

携帯で連絡を取れば簡単だが、一度取ってもらえないとその後、
続けてこちらから掛けるのはなんだか気が引けた。

金曜日になってリンから「週末においでよ」とメールを貰った。
少し時間を置いて「実家に帰るつもりだったけど…行くよ」と返事
をした。

本当はすごく会いたくて、リンのぬくもりが欲しくて堪らないく
せに、本当におれは素直じゃない。

マンションへ行くまでは、リンに会うのは何だかひどく久しぶり
で少し緊張した。

体育祭までの3日ばかりはお互い忙しくてゆっくり会えなかった。

リン宅へ行くといつものようにリンはおれを抱き締めて迎えてく
れた。

だけど何だか…少し元気が無い。

一緒に昼飯を作りながら、おれは体育祭の日に携帯電話で連絡し
たのに返事が無かった事を責めた。

「あ、ごめん。俺、出かける時はバイブにしてるからわかりにくい
んだよなあ」

「でもその後履歴見て…確認するだろ？」

「…あんまり、気にしてないから…見ないで消したかも」

「…ひどいよ」

「あの日は大変だったんだ。サテュロス、ああ、前に言ってたジャ
ズクラブのね、連中が体育祭に来てくれてて、それで終わった後、

お疲れ会があつてさ。新橋の店まで連れて行かれてね。美間坂さんと桐生さんも一緒になって盛り上がったんだ」

「…すごく目立ってたよ、あの一団」

「俺が応援合戦に出るって教えたら、見たいって言い出してね。俺、親に運動会や学芸会って来てもらったことがないからさ。そういうのを氣遣つてくれたのだと思う。あの人たちが本当に優しいから」

リンの過去の事を言われたら、おれは何も言えない。

質素で平凡だが、おれは親の愛情は十分受けて育っている。

もしかしたら、うちの両親も少しは見たいと思つたのかな…。なんだかリンに感化されて良心が痛んだ。

食事が終わった後、リンとリビングのソファで抱き合った。

やっぱりリンはいつもより少し影が強いみたいだ。

おれはリンとキスをしながら、なんとなく聞いてみた。

「体育祭、お兄さんも来てたね」

「うん」

「アメリカから？」

「予定は無かつたんだけど、急に前日に帰ってきたの。びっくりしたよ。俺の応援合戦をどうしても見たかつたつて。それで次の日帰つちやつた…」

「そう…挨拶ぐらいしたかつたな」

「…うん」

「リンが元氣ないの、その所為？」

「そう…かもしれない。色々、考えるよ。ミナに言う事じゃないかもしれないけど。俺はどうしても慧に対して負い目がある」

「負い目？」

「そう。慧と梓の中学、高校時代は俺を育てる為に口々に学校行事に参加していない。慧一は特に…部活も修学旅行も行っていない…放課後すぐ帰宅するから応援団やら、そんなものは一切していなかった。一番楽しむことのできる青春時代を彼は俺の為に味わうことが

出来なかった。どれだけの犠牲を払って俺を見てくれたのだろうと
思うとね。俺はどうやって彼に返したらいいのか…考えるんだ」

「…慧一さんは、嫌でリンを育てていたわけじゃないんだろ？部活
や学校の行事より、リンの世話をすることが大事だと思っただよ
…」

「それに返すっていつてもさ。親が子供を育てるって、別に何かを
返して貰いたいからじゃないだろ？ごく自然の母性愛みたいなもの
だろ？リンのお兄さんだってリンに見返りを求めてなんかいないと
思うよ」

リンは目を伏せ苦渋の色を浮かべて僅かに呟いた。

「…慧は…親じゃない」

「リン…」

リンはそれっきり何も言わなかった。

その晩、おれ達はセックスをしなかった。

マンションへ来る度に必ずするというわけではなかったけれど、
疲れてもいないしケンカをしているわけでもない。

ただ…その夜、リンに情欲の気配はなかった。

翌日、リンは昨夜の暗い影を引きずってはいなかった。

箱根へ行く計画をおれに色々と説明しながら、楽しそうに笑って
くれた。

おれはその笑顔に酷く安心してしまい思わず涙ぐむと、リンは「
ごめんね」と、一言言い、おれを抱いてくれた。

リンの腕も身体も細い。おれもそう。だから、お互い頼りないな
あと笑う。

だけとおれは…強くなりたい。

自信なんて粒ほどもないけれど、おれはリンを守りたい。

その為に強くなる。

リンの胸の中でリンに揺さぶられながら、おれは強く祈り続ける。

旅行は十一月の学院の創立記念の休日を使って、前日の夕方、学校が終わってから出発した。

待ち合わせの駅でリンは革ジャンでかっこよく決めていた。

リンはおれを見ると呆れたように呟いた。

「なんで一泊なのにその荷物なの？」

おれは大き目のリュックを背中に抱えていた。

「だって…着替えと勉強道具にスケッチブック…と、お菓子みたいな…」

「お菓子まで？…はは」

弾けたように笑うリンを見て、おれも一緒に笑った。

9 (後書き)

筆者のBLOG「augagreen_noon」は<http://arrowsetter.nail.blog57.fc2.com/>

2.com/

イラストも多数ございます

10 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>

h /

宿禰慧一編「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>

h /

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768>

i

> i 5 1 8 2 — 2 7 3 <

10、

箱根湯本までは一時間程で着く。

「旅館へはバスの方が駅からは近いけど、やっぱり登山電車かな。時間はかかるけどそれでいい？ミナ」

「うん。乗りたい」

登山電車は思っていたよりこじんまりとして遊園地の電車みたいと口元が綻ぶ。

日没は早く、辺りの景色はもう味わえない。

客も少ないからリンとくつついて座った。

おれ達は人前では絶対に身体を触れたり手も握ったりしない。そういう風におれが頼んでいるからだ。

リンは人前でも平気だろうが、おれは他人の目が気になる。

誰が見ても男同士だとわかるおれ達を、他人はどう見ているのだろうかとか、変なかんぐりをしないだろうかとか…いや変なかんぐりは当たっているけれど…

気にしすぎと言われるても、おれは普通でありたい。

下らない見栄だし、嘘をつく意味があるのかと自分自身を罵りたくなるけれど、やっぱり世間の目が怖いんだ。どうしようもなく…

リンは「別にミナがそう思うのは当たり前だと思っよ。俺は気にしないから大丈夫。ミナに合わせるよ」と、平気な顔をする。

リンが平気なのはそういうゲイだとかを含めたとしても、リン自身が魅力的なのだから彼の尊厳を少しも損なうことはないと感じさせられるからだ。おれには無理だ。おれは普通の常識的な人間であることが、おれの意味を示すことのような気がするのだ。

「箱根が初めてなんて珍しいね。俺は小学校の修学旅行やら、親戚連中と4、5回は来てる」

すっかり日が暮れた外を見ても景色は判らないが、そうしても目は窓の外を向く。

ガチャリガチャリと登山電車のスイッチバツクの切り替えで進路が逆方向に変わる。

「おれんところは小学校は水戸で、中学は信州だった」

「俺は中学の時は行ってない。不良でしたので」と、舌を出して笑うリンに暗さはない。

どんな不良なのかおれには全く想像できないけれど、リンがどんな過去をもつていようと、今のリンを構成しているのならば否定することはない。

おれにとつて大事なものは、今のリンの存在なのだから。

小涌谷で降りた。辺りには誰も居なかったから、暗い夜道をふたり手を繋いで歩く。

「たぬきが出るかも」「へえ、見たいね」「いのししも出るって。

でも襲ってきたらたまったもんじゃないけどな」「それはちよつと怖い…逃げたら間に合うかな?」「さあ、無理かもなあ。それより、寒くない?」「おれは一杯着てる。リンこそ薄着だろ?大丈夫?」

「ミナの手があったかいから平気だよ。でも旅館に着いたらすぐに風呂につかるうぜ」「うん」

山なりの小道を15分ほど歩いたら漸く旅館の全景が見えてきた。

一目見て格式のある老舗旅館だとわかる。

独特な和風建築の玄関に入り、宿の方々の丁寧な歓迎を受ける。

リンがフロントで受付をしている間、おれは靴を脱いで広い板張りのロビーをウロウロと見学する。一つ一つの調度品が時代物の骨董品らしくてなんだか大正時代にスリッパしたみたいだ。

「ミナ、おいで」

リンが呼ぶ。

「離れのお部屋だって」

「へえ〜すごい」

おれは仲居さんの後に続くリンの少し後ろを付いて行く。時折後ろに居るおれを確認するように振り向くリンがたまらなく好きだ。

案内された離れは間取りも広く、風呂も内風呂と露天と二箇所あって景色も良く見える。庭は真っ暗だけど照明に照らし出された紅葉が少しだけ見える。

広縁の籐の椅子に座って庭を眺めていると、リンの姿が見えない。

「リン、どこだよ？」

「ミナ、早く来いよ。俺、もう露天に入ってるから」

…早い。

さつき仲居さんが出ていったばかりなのに…

おれは玄関の鍵を閉めて、脱衣所で服を脱ぐと浴室へ向かった。

内湯から露天までは敷居もなくそのまま繋がっているから、内湯で簡単に身体を洗ってリンのいる露天に向かった。

「リン、早いよ」

「早く温まりたかったの。ミナもおいで」

差し出す手につかまりながら、ゆっくりと湯に入る。

「熱いね」

「源泉掛け流しだって。すぐに気持ち良くなるよ」

家の風呂と違って外の暗さと薄暗い照明の所為で妙にリンが色っぽく見えて仕方が無い。

「眼鏡つけたまま？」

「うん、初めての場所ってなにがどこにあるのかわからないからね。蛇口の場所も見えないんだもん。それにお湯に濡らせば曇らないしね」

「そりゃそうだけどね…でもまあ…外さねえと、色気が足りねえ…かな？」と、言ってリンはおれの眼鏡を外して、後ろからおれを抱

き寄せる。

「リ、リン…しないよ。ご、はん、部屋食でしょ？」

夕食を7時に予定していたからもう30分もない。リンのが立ち上がっているのは判るが、今は困る。

「そうだね。夕食が終わったらいっぱいしような。あ、でも大浴場もあるから、そこへも行く。折角だしね」

「うん」

いつもながらリンは潔い。おれがうじうじ悩んでいる間に自分のすべきことを決めてしまう。

おれ達は十分に温まり、お互いの身体を洗い、軽くキスをするだけできつさと露天から上がった。

「え…これなんだろ」

「献立表に書いてあるよ。え〜と、こつちが鮎味噌で、こつちが鱧かな？」

「はあ…なんか珍しいもんばっかで…どれから箸をつけていいのか悩むね」

ふたつある和室の広い方の部屋で食事を取る。たぶん狭い方はお布団を敷くんだろうな。

広いテーブルに載りきれないほどの豪華な料理が次から次へと出てくるから、啞然とする。

「料理がいいとリピーターが増えるっていうからね。今はどの旅館もこんな感じだよ。ミナは家族旅行はしなかったの？」

「父の会社の保養所に行った事あるけど、こんな豪勢じゃないし…それも小学生の頃に2、3回で。親父は根っからの技術者だから家庭サーブスには向かないタイプだね。母親もおれもそういうのをあまり気にしてはいないからいいんだけど…だからかな…リンとこんな風に贅沢させてもらうのがとっても不思議だよ」

「俺も親父が再婚してから家族旅行へは行くようになったんだ。親戚連中とも最近は付き合うようになったけど、とにかく昔は俺が手

をつけられないどうにもならないガキでさ。思いがついていたから目に余っていただろうね。今になって考えるとちゃんとかわいがつてもらっていたのに、あの頃は同情なんかいらねえって息気がつてね。伸ばされた手をことごとく払いのけていたんだな」

「リンは今幸せなの？」

「うん、すごくね。大好きな奴とこうして向かい合わせで箸を突きあうなんてさ、これ以上の幸せはないよ」

恥ずかしげも無く言い切るリンを正面切って見れないのはいつもの事だが、リンはわざと赤面するおれの顔を覗き込んでからかうんだ。

食事が終わった後はお腹が落ち着くの待って、大浴場に行った。平日でお客さんはそんなに多くない。気持ち良くお湯に浸かっていると、品の良い老年の方が声をかけてくる。

「きれいな坊やだね。女の子かと思いました」とリンと見て笑う。

リンは長い髪を髪ゴムでポニーテールにしているの確かに顔だけを見たら女子に見えるかもしれない。

「小さい頃は良く間違えられましたけどね」

「学生さんにお見受けするけれど、家族で来られたの？」

「いえ、従兄弟と二人です。明日は学校はお休みなんです。こここのクーポン券を貰っていたので、ふたりで来たんです」

「そう、今は紅葉が見ごろだから、どこを観光しても美しいですよ。でも若い君達には退屈かもしれないね」

「いいえ、紅葉を楽しむみに来たんです。彼は絵を描くんです。いい穴場があったら教えていただけますか？」

「絵を描かれるの？それじゃあ…」

リンは知らない人と直ぐに打ち解けて仲良くなれる体質だ。

さつきも仲居さんが食事の用意をしていると、彼は仲居さんにつそりと小さなポチ袋を渡していた。何かと聞くと「心付けだよ。」

要はチップみたいなもん。ちょっとした金額でも、その気持ちが接待に繋がるって、ママさんがゆってた」

「和佳子さん？」

「そう」と、ニコリと笑う

継母とリンは仲がいらしい。近頃彼の口からちよくちよくその名前が出てくるようになった。

確かに仲居さんはおれ達みたいな子供の客にも、とっても愛想が良かったし、色々気を使ってくれていた気がする。

おれ達二人の関係を聞かれたら、リンは即座に「従兄弟です。母同士が姉妹なんですよ。小さい頃から兄弟みたいに育ってて。なあ？高校もたまたま一緒になって、いまではクサレ縁ですよ」と、デタラメの話をスラスラと講じる。

あの顔で言われたら信じる他はないので、仲居さんもすっかり騙されてる始末。まあ、どう考えても高校生の友人同士で泊まる部屋ではないよなあ〜と、俺は苦笑いをする。

大浴場から部屋に戻ると、思ったとおり6畳の和室にはお布団が二つ並べて敷いてある。普段ベッドしか見えない風景とは違って、なんだかちよつとエロく感じる。それを見透かされたみたいに関が「フカフカの布団ってなんだかやらしいな。後でたっぷり楽しもうな、ミナ」とおれの耳元で囁く。

そうは言っても幾分湯中りの所為か、冷蔵庫からミネラルウォーターを出して籐の椅子に座り込んだリンはおとなしい。

「ちよつと疲れたね」

おれも向かいの椅子に座って、リンの飲みかけたペットボトルを貰う。

生乾きの髪がばらばらと浴衣の襟に散らばって、その合わせた襟がしどけなく大きく広がって胸の奥まで見えてしまうから、いつもよりリンの色気が増している気がする。恥ずかしくて直視するのを避けたいのに目はどうしてもそこについてしまう。

リンの肌は白い。

おれの病的な白さと違って表面が薄い桃色に滲んでいる。その薄桃と影になった暗い部分のグラデーシヨンの細やかさをカンバスに描けるかな…

見惚れたままぼうつとしてしていると、リンが物憂げな顔をして口端だけで笑った。

「ミナが今何を考えているか、言ってやるっか」
「…」

そんなこと口に出さなくてもわかっているだろう。
おまえが欲しくて堪らないんだよ、リン。

11 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>

h /

宿禰慧一編「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>

h /

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768>

i

11、

リンが手を伸ばすから俺も右手を伸ばす。

おれの手を口の近くまで持っていくと、リンはおれの指を一本一本口に咥え、ゆっくり舐めて味わう。

目を軽く伏せたり、おれをじっと見つめたり、少しだけ不遜な笑みを浮かべたり。

おれはこういう時、大体金縛りにあつたみたいに動けなくなる。

そう、いつもリンのペースでおれ達の世界は動く。

でもそれじゃあ駄目なんだね。だって恋愛しているんだもん。

お互い同じ分の秤を持たなきゃ…

…それが何なのかはまだよく判らないけれど。

「リ、リン」

わざと音を立てて舐め続けるリンに追い込まれないうちに勇気を奮って尋ねる事にした。

「なに？」

「リンに聞きたいことがあるんだ」

「なんでもどうぞ」

「リンは…今までに何人の人とセックスした？」

「…」

リンはおれの指を離して、怪訝そうな顔で上目遣いに睨んだ。

「それ、今、ここで言わなきゃならねえこと？」

「前におまえが言ったよね。知る事と知りたいって思うことは違うって。おれはリンの過去を知りたいんじゃない。リンと言う人間を知りたいんだ。だから…リンがどうやって他の人とセックスしたのか…なんだか気になってしまっただ。変かな？」

「いいや、俺だってミナが俺とこうなる前に誰かとセックスしてい

たとしたら、やっぱりその話は聞きたいかもしれない。そうだね…
数えた事はないけど、セックスした相手は50人…ぐらいかなあ」
「こ、五十？」

想像もできない数だったから思わず素っ頓狂な声を上げてしまった。

「そんなに驚くなよ。一夜で終わった相手も結構いるし、性病には
気をつけていたからちゃんとつけてしてた。だから安心していいよ」
「そういう問題じゃなくて…そ、そんなにして、誰とも恋愛になら
なかったの？」

「恋愛には、ならないねえ…50人の四分の一は女性だったが、こ
れは殆ど1、2回で終わる。なぜなら相手はどうしても大人の女性
だからね。上目線で俺を扱おうとするのさ。お金は要らないって言
うのに、何でも買ってあげるからってしつこく迫られたりね。それ
が嫌いだったから長続きはしなかった。男の三分の一は俺が入れる
ほうだが、これも圧倒的に年上が多い。と、やっぱり指示してくる
おまえ、想像してみるよ。上からしてるのにああしてこうしてって
言われてみる。こっちはまだ中学のガキだぜ？そんなに上手く出来
るわけじゃないよ！って、なる」

「はあ…」

少しだけ曇った微笑を湛えながら、リンは言葉を続けた。

「後の三分の二が俺が受け入れる側だが、これは案外上手くいく。
理由は簡単だ。俺はキレイなガキで相手は大抵羽振りの良さそうな
大人の男だからね。たまにはサディストチックな奴もいたが、要領を
得ると上手くかわすことができるようになったんだ。だから手荒い
事は早々されていない。それに…」

リンは残っていたペットボトルの水を飲み干した。

「彼らは俺を甘やかしてくれる。あの頃俺は本当に…ひとりだった
からね。…温もりや優しさにどうしようもなく飢えていたんだよ。

鳶谷さん…ああ、体育祭にも来てくれてただけど、ジャズクラブ
の店長さん」

「あの…髪を後ろで結んだヒゲの人？」

「そう、あの人と出会って幾分投げ遣りな自分を戒めることができた。と、言っても遊ぶ事はやめなかったけどね」

「…」

「慧が…慧一が俺の元に帰って来てくれたから、俺はそういう生活と足を洗うことができた。兄貴の愛情を感じたから、飢える事はなくなっただと思う…」

おれは聞いていいのか迷ったが、軋むような声で彼に尋ねた。

「お兄さん…慧一さんとは…寝たことがあるの？」

「え？…寝たつてセックスしたつて事？」

「…う、ん」

「ないよ。慧とはキスもハグもベッドと一緒に寝たりもするけど、セックスはしていない。何故なら…」

「…」

「兄貴にはその気がないからね」

「…そう、なの？」

「俺が必死に誘ってもそういう気にはならないらしい」

「あんなに…リンのことを愛しているつて…おれでも感じるのに」

「…兄弟だつたら普通はセックスはしないもんだろ」

「そりゃそうだけど…」

普通はそうだろう。だけど、リンと慧一さんがもしセックスをしたとしてもそれが絶対許せない事とはおれには感じられない。あの人のリンを見る瞳は、肉親の愛情だけではないって、おれはあの時感じてしまっている。

本当にリンをそういう目では見ていないのだろうか…

「まだ他に聞きたいことがあるの？」

「いや、もう十分だよ。すまなかったね、リンの昔話を無理矢理聞きだしてしまつて。でも何だかすっきりしたよ」

「何が？」

「リンはセックス経験は豊富でも、恋愛は少ない。おれとタメだね」
「そこ、見栄張るところ？」

「だって、なにもかも勝てないんじゃない？おれの面目がないじゃない」
「セックスじゃあ、いつも泣いてるくせに」

「それは…リンが泣かせるからだよ…意地悪なんだから」
「嫌いになる？」

「そんなことがあるわけないだろう」

「ミナを…愛していると誓うよ。今までセックスした誰よりもミナとする方が、何倍も快感を得られる。それはたぶん…身体で繋がっているだけじゃなく、心という精神愛が共有されているからだと思っ
うんだ。とても貴重な絆だと思う」

「うん」

「大事にしたい。この想いもミナも」

「おれも…リンを離したくない」

おれ達は同時に立ち上がった。

目的は同じだ。お互いを共有し合いたい。理解を深めたい。好き
と言うこの想いを相手に知らしめたい。この身に感じたい。めっちゃ
くちやにおまえに溺れたい。

帯を解きながら飛ぶように次の間の布団の上に飛び込んだ。

悠長な睦言を言う余裕はどちらにもなかった。欲望が勝っていた。

お互いの名前だけを呼びながら、お互いの身体を、その奥を貪り
あうことに没頭した。

リンがしてきた今までの相手の思い出なんか、おれがリンの身体
からきれいさっぱり消してしまいたい。

言葉にならない口でそう告げると、リンは「思い出はいつか消え
るもの。だけどミナを思い出にはしない。そう言っただろ？…きつと
俺たちは繋がるために生まれてきたのさ。そうでなきゃ…こんなに、

気持ち良くなんか、ならないよ、ミナ…」

リンの言うがままだけではなく、おれからも求め、動いた。

それは二重に絡み合う美しい螺旋を描く。ダブルヘリックス。まさにDNA。

知ってるか？DNAって地球上の全生物が持っていて、細胞の遺伝情報を司るんだぜ？

情報の蓄積、保存、複製…何倍にも広がっていくこの恋愛の形が無限に続けばいいなあ…

…ねえ、リン

> i 5 5 5 6 | 2 7 3 <

12 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>

h /

宿禰慧一編「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>

h /

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768>

i

12 .

翌日は出来るだけ早く起きようとしたが、身体中が痛むのと腰がだるくなかなか布団から出られない。

リンも同じで、しばらくお布団の中でくっついて遊んでいたが、朝食も部屋食だし八時に予約しているから、のんびりとしてられない。

露天に浸かったら身体のだるさも消え、何とかかなりそんな気がした。

朝食もひとつひとつが繊細な和風料理が並べられ、なんだか本当にお殿様気分になったみたいだと少々呆れ気味になる。

「全部食べきれるかな」

「無理しないで残しておけばいいよ」と、言うリンは、茶粥をおいしそうにお代わりしていた。

旅館を後にして、バスで移動。箱根園からロープウェイで駒ヶ岳に登った。

幸いな事に快晴で、展望台から見る富士山は声もないぐらいに美しかった。

雪の冠をかぶった姿を納めようと、デジカメのシャッターを何回も押す。

「巧く撮れてたらしいけど…」

「それより描かなくていいの？」

「だって、時間がないよ。他のところにも行きたいし…」

そう言いながら10分だけ時間を貰って、おれは芦ノ湖からの全景をスケッチブックにラフ描きした。

その後、元箱根から桃源台まで遊覧船に乗ったのだが、これが見

事に映画で見る海賊船のようで驚いてしまった。

リンはゆっくりでできるからと特別船室のチケットを買い、お客の少ない船室で正面から見える景色を楽しんだ。

特別室のお客さんしか昇れない前方のデッキに上がって船首のヘッドをスケッチしてみた。

暫くするとリンがデッキの階段を上ったところから手を招く。

近づくと「ほら、タイタニックみたいにしようぜ」と、おれを背中から抱き寄せ、先頭に立たせた。

「恥ずかしいよ」

「誰も見てないから大丈夫」

確かに朝早いしお客さんもあまり見かけなかったけど…ま、いいか。旅の恥は掻き捨てとも言うし…

おれはリンに凭れて両手を広げる。

目の前に広がる湖と緑と赤の混じった山から覗く白い頂きを冠した富士山の眺望は圧巻で…何よりも背中に感じるリンの温もりがいとおしくて…

目から見える眺望とリンの存在を同時に感じてしまったおれは、涙が止まらなくなった。

「なんで泣くの？」

リンが驚いておれを抱き締める。

「感動しすぎると涙が出るんだよ。本当に…キレイだ」

「ああ、晴れて良かったね」

そう言っつて鮮やかに笑うリンの顔を見てまた涙が溢れる。

「涙腺が壊れたみたい」と、笑うおれをリンは「ミナはかわいいなあ。もしタイタニックみたいになってもミナを独り置いてはいけないね。死なばもろともだな」

「うん、そっちの方がいい」

誰も見ていないことをいい事におれ達は、抱き合ったままキスをした。

頬を切る風が冷たくても少しも寒くはなかった。

桃源台からはロープウェイに乗って大涌谷へ。そこで遊歩道を登って展望台から富士山を眺めた。

ここまで来ると大勢の観光客で賑わい、ゆっくりとスケッチをしている場合ではなくなってくる。

目にする人が黒いものを持っているので何かと尋ねたら「温泉卵だよ。硫黄と鉄分でああいう色に変色するって。でも殻だけだよ。食べたけど味はただのゆで卵だもん」

「へえ」

「食べてみる？一個食べたら7年長生きするって」

「…いらぬ。別に長生きしたいって思わない」

「まあ、俺もそうだね。要は長く生きるかじゃなくて、どう生きるかだもんなあ」

ロープウェイとケーブルカーを乗り継ぎ、公園上で降りたおれ達は軽い軽食を取った後、午後は美術館と紅葉を楽しむ事にした。

平日だったが、紅葉の季節とあってどこの施設も観光客で一杯だ。

年配の方が多く、おれ達みたいな学生の男同士にはついぞ見当たらなかった。

強羅公園で昨晚大浴場で出会った品のいいおじいさんに再会した。

ご夫婦づれで仲むつまじくされている様子を見て、リンもおれもなんだか微笑ましくも、羨ましくなった。

あんなに歳を取っても人前で腕を組んで仲良く生きていけたら、どんなに幸せな人生なのだろうね…そう、感じているとリンも同じように思ったと言う。

「男同士でも別に無理な事じゃないさ。そういうゲイの恋人達も世界には沢山いるよ」

「…そう」

「でも、ミナをそこまで縛り付ける権利は俺にはない。だから、ミナにあんなになるまで俺の傍に居て欲しいとは思わないよ」

「それって…いつかはおれと別れるってこと」

紅葉に惹かれ、山沿いの細い小道を散歩がてら歩いていた。

「そうじゃない。ただ…お互いを縛り付けるのはやめようってしているんだ。おまえが他の誰かを好きになっても、それは自由ってことだよ。その感情を押さえつける権利は俺にはない」

「おれは…リン以上に惹かれる奴が現れるとは思えない」

「…まだ16、7年しか生きてないのに言い切るなよ…先は長い。」

ミナはそのうち俺にうんざりすると思うがね」

「なんでそんなこと言うんだよ、リン」

「不安定だって言っているんだよ。今日好きあっていたって、明日おまえの目の前に運命の人が現れるかもしれない。その時を俺は覚悟している…ただそれだけだよ」

「…」

おれは立ち止まった。リンのあまりの言葉に胸が押しつぶされそうになる。

「どうして…」

どうして…昨晩はあんなにお互いを求めて愛し合ったのに、そういう言葉が出るのか信じられない。おれが誰を好きになっても、リンはそれを寛容するって事だろ？それっておれを大して必要としていないって事じゃないのか…

「ミナ…」

後ろを向いて立ち止まったおれを見つめるリンは冗談を言っている顔ではなかった。

「リンにとっておれの存在ってそんなものなのか？」

「そうじゃない…俺だってわからないんだ」

「何が？」

「おまえを…ミナが俺から去ってしまったら、その時、どうしたら

いいのか…恐ろしすぎて考えられなくなる…だから…」

「ゴメン。止めよう、ミナ。俺も夢見ているんだよ。あの夫婦みに死ぬまでミナが傍にいればいいって…思っている」

リンは済まなそうな顔をしておれを見つめる。

「…根本先輩もリンと同じ事を言ってたよ」

「え？」

「高校三年間の期限付きの恋を楽しむってことにしたおいたほうが、自分が惨めにならなくて済むから、って…」

「…」

「そんなの…嫌だよ。初めから期限を決めて人を好きになるなんて…本当の恋じゃない。そうは思わないか？リン」

「根本さんは別れの辛さを知っているから、そう言うんだよ。真実は言葉の裏にあつたりするものさ。彼は…本気で好きなんだよ」

「…保井先生のこと？」

「そう…ミナももっと大人になったらわかるんじゃないかな」

「…」

「ほら、着いたよ。仙石草原」

「あつ…」

ずっと下を向いてたから、目の前に広がったススキの群れにしばし言葉を失った。

夕暮れの薄い光に金色に輝きながら優しく揺れているススキの海原。

踏みならされた土と砂利の道を歩く。

「砂利に足をとられるから気をつけるよ」

伸ばすリンの手を俺は取らなかつた。

あたりには観光客が沢山いた。その目が気になったのだ。

薄情なのはどっちだ。

あんなにリンを責めておきながら、人前で手を繋ぐことさえ躊躇っているおれはサイテーだ。

「ほら、ここいらからの景色が一番きれいだよ。スケッチか写真でも撮りなよ」

リンはあまり気にしていない風に、おれを氣遣って言う。

「うん」

おれはデジカメを取り出し、構図を探す。

スキの波の中をゆっくりと歩いていくリンの背中を目で追った。

ふと足を止めると彼は陽の沈む山々の方を仰いだ。

影になった後姿は彼特有の孤高な姿が映し出されている。

彼の腰まであるスキがゆらゆらと波打ち、まるで岩礁に立つセイレーンのようだ。

この風景…リンのいるこの風景を描いてみたい…

おれはデジカメのシャッターから指を離した。

これはおれの目に焼き付けるもの。留めておくべきもの。おれが描くべきものだ…

夕焼けを眺めているリンはゆっくりとその右手を上げ、自分の口元を押さえた。

感傷の、切ない、哀しみが流れてくる。

孤独…誰も寄せ付けない魂の孤独が彼を満たしている。

今の彼の中に、おれはいない…

そう理解した。

胸が痛い。

おれは怖くなって目を閉じた。

リンの心を見るのが怖い。

違う、そうじゃない。リンと対峙するためには、目を閉じてはい

けないんだ。

…ゆつくりと目を開ける。

さつき居た場所にリンの姿はなかった。当たりを見回してもその姿は見えない。

「リンっ！」

焦ったおれは声を出して、リンのいた場所まで急ぐ。

ススキの波を掻き分け、リンを必死で探す。

「リン、どこだよ！お願いだから出てきてくれよ」

返事はない。

「リン…」

涙が込み上げてくる。お願いだから…

「ミナ、ここだよ」

リンは後ろからおれの背中を抱き締めた。

「驚いた？ちょうど隠れ鬼やるにはいい場所だよな」

「バカっ！本当に消えたのかと…思ったじゃないかっ！」

おれはリンの胸にしがみ付いて叩いた。

「ミナ？」

「本当に…ホントに怖かったんだから」

「なんだよ。神隠しなんて信じてるわけでもないだろ？」

「リンなら…遭うかも知れない…」

「ミナを置いてどこにもいかないよ」

「嘘だ…リンはいつかおれの前から消えてしまっただ…そしたらおれはひとりぼっちになる…」

「いかないって…約束するよ。それより…ほら、いい加減離れないと人が見てるよ、ミナ」

「いいんだ…」

そんなことはどうでもいいんだ。

おれはリンが好きなんだ。誰になんて言われようと、リンが好きで堪らないんだ。

「リンが好きだよ」

「俺も…ミナが好きだよ」

おれを抱くリンの腕が強まるのが、涙が出るほど嬉しかった。

「リン、おれ絶対忘れないから。リンと過ごした時間を。この瞬間を心に留めておく」

「ミナ」

「おまえを愛してるんだよ、リン」

太陽が山に隠れ、辺りが暗くなってもおれ達はその場所から動かなかった。

時間が止まれないなんて、そんな事を望んではない。

ただ…この「恋愛」という時間が過ぎていくのが…怖いだけなんだ…

> i 5 2 8 2 | 2 7 3 <

13 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>

h /

宿禰慧一編「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>

h /

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768>

i

翌日の放課後、おれは美術部の顧問の町田先生に美術部への入部の許可をもらった。

あのスキが原に立つリンの姿を水彩ではなく、油彩で描きたかったからだ。

2年のこの時期に？と、少々呆れられたが、元々勧誘していた経緯もあって、快く承諾して頂いた。

油彩道具も何ひとつ持っておらず、お金に余裕があるわけでもなかったが、カンバスだけは新しいものに描きたかったから購入してあとはあるものを貸してもらおう事にした。

初めてのことばかりで戸惑う事も多いが、好きなことだから少しも嫌になる事はない。

おれは先生の指導を受けて、描き続けた。

「これは…箱根の仙石高原…だね？」

「そうです」

先生はスケッチブックに描いたおれのラフ画と、下地塗りが終わってある程度の色塗りに目安がついたカンバスを交互に見ながら、うぐんと唸った。

「どこか…おかしいところがありますか？」

「これは風景画なのだろう？ここに…人物の印象が強すぎて、せつかくの風景画が心象画になってしまっている」

「…」

「もし、このスキの侘しさや自然の風景を魅せたいのなら、この人物は…無くした方がいいかもしれないね」

「でも、それじゃあ…」

おれは口ごもった。

リンの姿を消す？それでは意味が無い。

「この絵に描かれてる奴って4組の宿禰だろ？」

隅っこで描いてるおれのところへわざわざ近寄ってきた同級生の美術部員が、おれの絵を覗き込んで指を指す。

「水川、宿禰と付き合っているって本当なのか？箱根にデート？お泊り？…あいつとやっちゃったのか？」

「マジで？宿禰って中学の時は売り専してたってなあ。歌舞伎町に立ってたってホント？」

「あいつとやる時って水川はどっちなの？」

「…」

「こらっ！いい加減にしないかっ！誰と付き合おうが恋愛は自由だろっ！それより自分のやるべきことをやったらどうなんだ？初心者の水川の方がおまえらよりも進んでいるぞっ！」

先生の怒号に、冷やかした連中はさすがと自分の席に着いた。いつもの揶揄だ。気にしなければいい。

それでも悔しい…おれは口唇を噛んでキャンバスを睨みつけた。

「水川、外野の言うことは気にするな。君が誰を描こうが構わない。ただ…さっきも言ったとおりこの風景画にこの人物の存在は強すぎる。それだけは確かだよ」

町田先生はおれの肩を軽く叩き、去っていった同級生達を再度叱り付けていた。

おれはまたキャンバスに目をやる。

風景画として成り立たせるべきなのか…リンの姿を描くべきなのか…

怒られている同級生達を一瞥し、溜息をつく。

「しかたないよ…初めてだし…」

そう呟いて、おれはキャンバスに描いたリンの姿を塗りつぶした。

出来上がった油彩画を先生はとても褒めてくれ、県の高校総合芸術祭に出展することになった。

おれは複雑な気持ちになる。

だって…これはおれの描きたかった絵ではない。

そんな気持ちを引きずったままひと月もしないうちに、その絵が芸術祭の特選に選ばれた。

全校朝礼の壇上で賞状を渡されたおれは、吐きそうな気分になった。

なんであれが…

放課後、温室でリンにおめでとうと祝福され、溜まりたまったものを打ち明けた。

「あんなのを描きたかったわけじゃない。おれは…ススキの中に立つリンの姿を描きたかったんだ。なのに…なんで…」

「知ってるよ。ミナのラフ画は見せてもらっていたしね。掲示板に張り出されていた記事の絵を見たよ。ラフ画と違って少し驚いたけど…でも確かにあの風景画に俺の姿はいらねえ。あれで正解だったんだよ。ミナが腹立たしく思うのはわかるけど…次は後悔しないようにすればいい」

「リン…ごめん」

「なんであやまるんだ？」

「おれは…」

…描かなかつたんじゃない。

描けなかつたんだ。

おれは…あの絵を見る大勢の目が怖くて…リンのことを触れられるのが…冷やかしゃ中傷が怖くて不安で仕方なかった。

だから…描くのをやめたんだ。

一番好きなリンにも、一番自分が正直になれると信じていた絵を

描くことに対しても、おれは自分自身を裏切ってしまったんだ。

悔しくて恥ずかしくてたまらない。

「リン、おれ、本当に自分が情けないよ。リンをこんなに好きなのに…どうして他人の目が怖いだなんて思ってしまったんだろう、ちょっと嫌なことを言われただけでまいってしまう」

「ミナが自分を責めることじゃない。ノーマルな奴らは、男同士付き合っているというだけで汚らわしいものを見るみたいな目をする。そういう既成概念はなかなか打ち破れないものだし、偏見って大勢でこられると怖いからね。だけど、ミナはゲイじゃないしな」

「え？」

「ミナはただ俺が好きなだけ。好きな奴がたまたま男だっただけの話だからさ。ホモとか言われたら心外だろ？…そういう風に言われたりしたら自尊心が傷つくのは当たり前だ」

「…」

「ま、別に俺はホモでもゲイでもバイでもなんでもいいけどね。もてない奴ほど口やかましい。ほっとくに限る」

「そうだね。おれもリンほどは強くなれないけど、リンを好きなことをやましいと思ったことはないよ。自分に嘘をつくくらいなら、何を言われてもいいよ」

「ミナを苛める奴がいたら俺に言えよ。二目と見られない顔にしてやるよ」

「…それは…やめとこうよ、リン」

顔が本気だったので、おれはあわてて宥めた。

正直、自分のプライドなんて気にしたことないけれど、リンの言うとおり、普通でいたいというこだわりこそ下らない自尊心だよな。

二学期最後の模擬試験でリンは学年総合7番だった。

クラスのいつもの馬鹿どもが、机に座るおれの前で嫌味を言う。

「水川って宿禰の家庭教師をしてるって聞いたけど、本当か？」

「寮生の奴が、水川は週末は宿禰のうちへ泊まりに行くってゆって

たぜ。トップの水川に教えてもらっているのなら成績も上がるよな
あ〜ついでに、勉強だけじゃなくて他の事もやっちゃってるわけ？」
「ねえねえ、ホントのところはどうなんだよ、万年トップの優等生」
「…家庭教師ではないが、解らない事は教えあっているよ。宿禰と
おれは付き合っているからすることもしているけれど、それが何か
いけないことか？」

「…」
3人は平然と答えるおれを見て、揃って口をポカンと開けている。
「どうでもいいが、おまえたちはもう少し成績を上げないと目的の
大学には届かないんじゃないのか？国立希望だろ？」と、おれは学
年全員の成績表が載ったプリントをつまんで、奴らの目の前でひら
ひらとさせた。

「なんならおれと宿禰で教えてやってもいいぞ。ただし宿禰は凶暴
だから、気に入らないとひっぱたかれる。覚悟した方が良い」

「…た、叩かれるのか？」
「う〜ん。あの顔で叩かれるのもなあ…はは」
「なんだ？そのまんざらでもない顔は。こいつらはリンの隠れファ
ンなのか？口では嘲っていても、目的はリンなのか？…皆目わけが
わからん。」

それ以上突っ込まれる事もなく、消えていった後、今度は万年二
番の高橋が近づいてくる。

また五月蠅いやつが来たよ、こちらも構える。

「水川は宿禰と本気で付き合っているのか？」

「ああ、そうだよ」

今更隠そうとは思わない。おれは高橋の目を見据えて言い放った。

「ふ〜ん」

「なに？」

「いや、あいつと付き合っているもトップを守っているってことは
…恋愛は学問に影響しないんだなあって思ったただけだ」

「…多いに影響してるさ」

「え？」

「身体と精神が充実していると、学習能力が上がる」

「…ああ、そう…そうか…見習う事にするよ」

今まで険しい顔しか見せなかつた高橋の表情が緩み、笑みを見せた。

…なんだ。人の心を解かすのはこんなに簡単なことだったのか。

表情の和らいだ高橋が黒淵の眼鏡のブリッジを上げながら、言葉を続けた。

「だが、宿禰が水川に教える科目はあるのか？おまえが教える一方だろ？」

「リンはああ見えて数学が得意なんだ」

おれは笑い、胸を張って言い返した。

もう迷うことはない。

リンを好きな気持ちは揺るがない輪郭を象っている。

リンへの愛は未来に続くもの…

そう信じる事が出来る。

13 (後書き)

次からは宿禰凛一編を書くので、この水川青弥編はしばらくお休みです。

14 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>

h /

宿禰慧一編「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>

h /

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768>

i

14、

おれにとつて毎年のクリスマスなど何の思い入れもなかった。

だが、それは去年から一変してしまった。

リンと出会ってしまった所為だ。

リンに出会うまでの16年間のおれの人生は単なるプロローグで、リンに出会って初めておれは自分の足で世界を歩き、見渡すことができるスキルを覚えたんじゃないだろうか…と、思えるほどに、平穩な日常に生きる喜びを至る所に見つけてしまっている。

リンに言ったら、あいつはそれを鼻に掛けるに決まっているから言わないけれど、本当は感謝してもしたりないぐらいなんだ。

リンの家族は晦日まで帰省しないらしくて、それをいいことにおれは、ぎりぎりまでリン宅で過ごすことにしている。

リンと一緒にずっといられる。そう思うだけで、口元が緩んでしまふ。

同室の根本先輩はそういう俺を見て、意地悪く

「いつまで持つか楽しみだね〜なんといつても相手に困らないリン君だからさあ〜みなうちもそのうち…」

「うるさい！先輩の『飽きられるよ〜』こそ飽きてますから。どうぞ、おれのこととはほつといて下さい。先輩が卒業するまでは保証します」

「つままないね〜人の不幸こそが甘い蜜なのにさ」

「そういう先輩こそ、そろそろ本気で自分の幸せを考えた方がいいんじゃないんですか？もう卒業まで時間がないんだから」

「そうなんだよね〜保井の奴が本気でぼくを愛してるのなら、ぼくが卒業して関西に行ったら…どうするんだらうね〜」

「だろうねえ〜って…人事みたいに。保井先生を本気で好きなら、

こつちの大学にすればいいのに。私立だったら出願するのは今からでも間に合いますよ」

「やだね。なんでぼくが折れて志望校を変えなきゃならないんだよ。保井の方がぼくに夢中なんだから、向こうがぼくを追ってくれればいいじゃないか」

「また、無茶なことを…」

子供みたいに頬を膨らませて湯気を上げている先輩を見ると、ほっとけない気分になるんだろうなあ

おれには先輩の言い分が正しいとは思わない。思わないけれど、気持ちはわかる…

誰でも好きな相手に対して自分は本当に愛されているのか、その重さを量りたくなるものだろう。

おれだって…

たぶんリンにはこんな気持ちはわからない。あいつは誰かに愛されているのかを疑うよりも、自分が愛する意味を考える性質だ。

おれがリンに愛されているのを不安に思うのは、リンに対しての不信感ではなく、自分自身のコンプレックスなのだろうかとも一時期思ってはいたが、リンはそんなおれのコンプレックスも綺麗に取り払ってくれ、おれはリンと真正面で向かい合うことができるようになった。

セックスだって…そりゃおれは受身だけど、リンと一緒に高めあう意義を感じている。どっちが上なんていうのは関係ない。

お互いが対等であればこそ、混ざり方も美しい均等な勾玉の太極図を描く。

それを描いてリンに見せたら、「ミナはこういう体位がしたいのか？」と、呆気に取られた。

違つと反論したがすでに遅くて、その後は…言いたくない。

大体どうしてあの図からこついついやらしいことを考えられるのか…リンの妄想力には閉口するが、リンは「おまえが願っているも

のが無意識におまえの描く絵になるんだよ。画家ってそういうもんだろ？」

そう言われたらそうかも知れないと、おれはリンの為すがままにさせられてしまう。これっていうのはやっぱり対等ではなくて、上下関係大有りじゃないか…と、まさに時遅しとして思考するも、気持ちいいのが先行して、結局おれはまたリンに負けたと泣くことになるのだ。

とは言え、リンとやるのは大好きなのでそれはいいんだ。

問題はクリスマスプレゼントで、おれはどうしてもリンの絵を描きたくて仕方ないのだが、ひとりでごっそり描く時間も場所もなく困っている。

本当なら折角油絵も手になじんできた事だし、布のキャンバスにリンを描きたかったが、美術室でないと油絵は扱えない。美術部では人の目があり過ぎる。それだけでなくもおれとリンが付き合っていること他の生徒の好奇心とやらは、暇つぶしと思えないほどにっこいんだ。

どうしようと考え、去年リンから貰ったリンのお姉さんの形見の色鉛筆でリンを描くことにした。

これならリンも喜んでくれるだろう。

24日、寮祭に誘ったリンは時間通りにやってくる。

寮祭は年に一度だけの学生寮のパーティで、寮生だけではなく、招待したい奴を呼べるし、何より先輩後輩関係なく無礼講で楽しめるお祭りなんだ。

だけど招待された客はパーティと名を打ってあるからおめかしして参加する。

学生服に見慣れているリンがたまに本気で洒落た恰好をすると、テレビで見るとのタレントよりもかっこよくてどきまぎしてしまう。

リンは時折知り合いの写真家さんのモデルをやっているというが、それをやり始めてから益々オーラが威力を増してきたように思える。自分の見せ方を知っているというか…

何気ない仕草も絵になる。

と、言っても本人の認識はあまりない。あいつはそういう奴だ。

自分が客観的にどう思われているのかを気にする方じゃないからな。それも自分への自信から出るものだろうとは思うのだが…

だから、こういう時は俺は客観的な自分との差に…まあ、申し訳なく思うわけだ。

それさえもリンは気づかない。

大体：宿禰家っていうのは美形揃い過ぎなんだ。だから綺麗なものは当たり前で、それ以外は全部空気みたいになっている。

一般の人が夕焼けが赤いと思ってもリンには赤という意味さえどうでもいいことになってしまふのだ。

夕焼けは初めからああいうものだ…と、彼は認識する。

「メリークリスマス、ミナ。お誘いありがとう」

真っ赤な薔薇の花束をおれに差し出しニコリと笑いかけるリンに、抱きつきたい衝動を抑えて平静を装う。

「気取りすぎてるのは好きじゃない…」

いつもの天邪鬼の言葉もそれ以上は出てこない。

だって、おれにはリンが…本当に物語から抜け出した王子に見えたんだ。

それをぼそぼそと呟くとリンは「さしずめミナは白雪姫だ。王子のキスで目を覚ますんだろ?」と、寮のロビーでおれの口唇にキスをしたんだ。

凍りついたのがおれだけではないことは、周りを伺わなくても背中を感じていた。

v
6
7
9
1
|
2
7
3
^

15 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>

h /

宿禰慧一編「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>

h /

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768>

i

15、

寮祭のクリスマスパーティーは二度目の事だし、おれも後輩の手前おどおどしたりはしないつもりだが、リンが傍にいと、意識をしなくてもこちらへの視線をやたら感じるから違った緊張感がある。

最もその目線の目的はおれじゃなくてリンなのだが…

後輩はおれに気を使ってか、おれがリンといえる時は遠巻きに見ているだけだが、リンがおれから離れた途端、リンに近づいては話しかけたりしている。リンも無駄に愛想良いから後輩からのクリスマスプレゼントをもらってはニコニコしたり、頬にキスしたりと…あいつにとっては当たり前前の礼儀を執り行っている。

あいつは…そういうことを恋人のおれの目の前でやっても、おれが何とも思わないと思ってやっているのか、その逆なのかわからないが、どっちにせよ問題ありまくりだろ、バカ！

ホールの隅のテーブルに盛られたバイキングのサンドイッチやオードブルを自棄食していると、寮生の三上が溜息を付きながらおれの横で同じように手持ちの皿から揚げを取りまくっている。

「あいつは本当にモテていいよなあ」。親友の俺にも分けて欲しいよ」

「…男でいいのか？」

このから揚げの油を口の周りにテカらせている宿禰の親友という三上はノーマルだったはずだ。

「別に男を恋人にしたいとは思わないけどさ、男でも女でも好かれるっているのは気持ちいいものじゃないか？」

「無駄な好意は疲れるだろう。おれはこっちが受け取れない好意は重荷になるだけだから、双方合意の上でって奴が気が楽だと思っけどな」

「まあ、人それぞれだろうし、その好意の種類にもよるだろうが、宿禰への好意って奴は憧れっていう部分が多いだろ？見るよ、あの後輩どもの赤面した顔。ありゃファン集いの会だぜ」

「三上、あんまり言うとお癖みを超えて自分が惨めになるだけだぞ。それじゃなくてもおれを見るよ。一応、おれはあいつの恋人だぜ？なのに…おい、笑うとこじゃない！」

から揚げをフォークに突き刺して笑い転げている三上の皿を取り上げた。

「いや、水川って見かけによらず面白いというか…おまえ性格変わったんじゃない？」

「ああ、誰かのおかげでゆりかごからたたき起こされたんだよ。行く道を迷うばかりだ」

「手を引つ張ってもらえよ、王子様から」

先刻のロビーでの一件を見られたのだろう。さすがにあれは凍りついた。

たまたま後ろにいた舎監の保井先生も口をぽかんと開けていたくらいだからな。

「…見てたのかよ」

「まあな」

リンは全く動じもしないんだが、おれは顔を赤くしたり青くしたりで…正直肝の縮む思いだった。

「宿禰は見かけはあだし、色々心配だろうけどね。水川は自分が変わったって言うけど、宿禰の親友の俺から言わしてもらえばさ、宿禰も随分変わったって気がするよ。上っ面は変わらないけど、人に対する信頼感が厚くなったってどうか…優しくなった。きっと水川が宿禰を変えたんだと思う。恋愛ってお互いを感化しあうっていうじゃない。それがいい方向に育っていければ人間的に成長するんだらうね」

「三上は…成長してる？」

「俺？」

「うん、彼女とうまくいつてる？」

確かこいつが付き合っている彼女って、隣の女子高のユミちゃ
んとか…リンから聞いたことがあったんだが…

「うん…あんまり会ってないかな…」

「なんで？」

「恋って沸騰してしまえばそれ以上温度が上がらないというか…話
すもんがなくなったら沈黙が訪れる…水川はそんなことない？」

「おれ…たち？」

「うん」

「…」

考えてみたが、ふたりでいる時に話のネタに詰まったことはあま
りない。一緒にいたって黙って違う本を読んでいたりもするし、話
が続かなくても気まずくなるなんてこともない。

第一そういう事にお互いが気をかけていない。

「今のところは…ないかも」

「じゃあ、まだ大丈夫だな」

「まだって…」

「いつかは冷める…それが恋なのかもな」

「…」

恋は期間限定なんて誰が決めたんだろう。

おれとリンには期限なんてない。冷めたりしない、絶対に…

「あ、根本先輩だ」

ホールのドアが開き、スポットライトを浴びた根本先輩がもった
いぶった様子で入場する。

余興と称して体育祭の応援団で来たドレスを身に着け、アイドル
のような歓声を受けて手を振っている。

それに合わせるように会場がリンと先輩のダンスをコールし始め
た。

リンは少し嫌がるフリをして、しょうがないなと頭を掻きながら

ホールの中央に立つ先輩の手を取った。

そういえば去年は美間坂さんとリンは踊ったんだっけ…あの時は女性役だったけど、今日はネコ先輩を綺麗にリードして…そりゃ、体育祭の為に相当な練習をしてきたふたりだから息が合うのは当然だが…三ヶ月のブランクもひとつも感じさせずにふたりは一曲を完璧に踊りこなした。

最後の口唇同士のキスも再現されて、拍手喝采の中、リンと先輩は仲良く抱き合っている。

…いつもの事だから大目に見るけどさ…

ああいう恋人だから諦めもするけどさ…

リン、おれは聖人じゃねえぞっ！

怒りが頂点に向かいつつあるおれを知ってかどうかはわからないが、能天気なリンはおれの方に駆け寄って飲み物をくれと言う。

無視してやると「折角のパーティーなんだから怒るなよ。見たくなかったら目を閉じてりゃいいんだ。どっちにしろ、これが終わったら俺はずっとミナのもんだからさ」と、耳打ちされた。

弱いところを見破られてぐうの音もでない。

ホールの明かりが暗くなってノスタルジーなクリスマスブルースが流れる。

男子学生しかいないのに、何故か曲にあわせて何組かのペアが踊っている。

頭を傾げているおれの手を取って、リンはホールの中央へおれを連れて行く。

片手を繋ぎ見合わせて腰を軽く引き寄せる。

「リン！おれ、踊れないっ！」

恥ずかしいのもあるけれど、本当にこんな社交ダンスみたいなのは無理だよ。

「身体を揺らしていればいいさ。俺に合わせてね」

「だけど…」

「ほら、頭を肩に乗せて…ね」

リンに導かれるままにおれはリンの身体に寄り添うようにして、頭を擡げた。

ゆっくりと回るミラーボールが薄暗いホールの床をキラキラさせている。

リンに抱かれて身体を揺らせて踊っている自分が不思議でならない。

本当にこれがあの水川青弥なのか？

まるで水の中に漂うみたい…時折呼吸が苦しくて…でも気持ちよくて…

なんだか夢みたいだと笑うと「笑ったミナも怒ったミナも全部好きだよ。まさに俺たちは夢の中だ。お互いに夢中になっているんだ」そう笑ったリンこそ夢みたい消えてしまえばそれで、おれはリンの背中を強く抱き締める。

寮祭が終わった後、リンのマンションでふたりだけのクリスマスを祝う。

お互いのプレゼントを交換しあった後、ワインで乾杯した。

キャンドルを灯しただけの暖かいリビングでおれ達は抱き合った。まるで夢の続きをみているみたいに幸せで、ずっと終わらなければいいのと思うけれどね…

そのまま床暖房の効いた床に毛布に包まって寝ていたんだが、ふと目が覚めて抱き合っていて寝ていたはずのリンの姿がないことに気づいた。上半身を起こしてリンの姿を探した。

暗闇に慣れた目がやっとリンの姿を見つけた。

リビングの向こう…ベランダに続く硝子のドアからリンが見えた。近づいてそっと様子を伺う。

リンはベランダの柵に凭れて空を仰いでいた。
真冬の深夜なのに薄着のまま、じっと空を仰いだまま動かない。
サンタクロースのプレゼントでも待っているのだろうか……
……いいや、違う。リンが待っているのは、彼を最も愛する者達なのだろう。

おれはリンを愛している。彼への愛は誰にも負けたくないと思っている。だけど、どうしても勝てない者がいる。

リンの家族：亡くなっているお母さんやお姉さん、そして遠く離れてもいつもリンの事を思っているであろう慧一さん。

愛してきた時間と重さはおれには到底敵わないものだ。だけど、おれは迷わないよ、リン。

おまえが気づく時まで、おれはおまえを見つめ続けるんだ。

そう決めたのだから。

16、
29日に世田谷の実家に帰りついたおれは、自分の家の色あせた雰囲気には啞然としてしまった。

家が古いわけではない。リンの気配のないこの背景が恐ろしいほど味気ないものに感じてしまっているのだ。

慣れ親しんだはずの自分の部屋だって、誰か知らない他人が居た様な気がする。

両親は久しぶりに顔を見せた親不孝の息子を見て歓迎するも、それがおれの未来に対する重圧に感じてしまう状態は全く変わらず、あなたたちの投資する息子は同級生に入れ込んでいる色狂いの息子なんですよ、と、喉まで出掛かりそうになる。

試しに芸術祭の特選を貰った賞状を両親に見せたら案の定手放しでは喜ばない。

母親は形ばかりの褒め言葉を披露したが、親父の方は賞状を見もせずに「絵を描く時間があったら問題集のひとつも解いてた方が利口だ。いくら学年一位でも田舎の私立の話だ。世の中、頭の良い奴は腐るほどいるんだからな。ちょっとでも気を抜くと敗者になるんだぞ」

「……」

一体誰と戦って敗者になるんだろう…その戦いになにか意味があるのか？…と、問いたい気持ちにもなるが、今更この人には無駄だ。

昔、母親から聞いたことがあった。

父の親父、即ちおれの祖父は美大生だったが学徒出陣で戦争に動員された。戦後、絵画を続ける余裕はなく、生活の為に中学の教師になったそうだ。それでも絵を描くことは止められず、暇があれば

各地へ赴き風景などを描いていた。家の中でも祖父はアトリエで絵を描くばかりで、子供達の相手は二の次だったらしい。

祖父との交流が殆どなかった父。

父がおれが絵を描くことを嫌うのは、自分を受け入れなかった祖父への恨みがあるのではないだろうか…

夜、自室で落書きしていると母が入ってくる。おれは急いでスケッチブックを片す。

母はそれを知ったか知らずか、コーヒーとケーキを載せた盆を机に置き、

「お父さんはああ言ってるけど、本当は嬉しいのよ」

「え?」

「青弥が特選を貰ったこと。こっそりひとりで賞状を眺めているのよ。素直じゃないところは親子似ているわね」

「おれは…素直な方だと思っけど…」

「親はいつだって子供の将来を考えてしまう。一人前になれるように、ひもじい思いをしないように、いい家庭を作れるように…なんてね。親の勝手な夢を押し付けてしまうものよ。でもそれを裏切っても恨んだりしないのも親だね。青弥が幸せになるのなら、お母さんはどこの大学でもいいと思うわ。無理にT大を目指さなくてもいいのよ」

「…大丈夫だよ。無理はしてない。ちゃんと自分の為を考えて道を選ぶから心配しないで、お母さん。絵は…気晴らしに続けていくつもりだけど、ちゃんとT大に合格するから」

「うん…お父さんにそう伝えとくわね」

部屋を出て行く母の後姿を見送りながら、どんよりとした気分になった。

ああ言えば子供が気楽になるとでも思っているのだろうか。

見せかけの優しさか本物かどうか問題ではなく、当たり前のこと

とをありがたく思えよとばかりに押し付けるのが気に入らない。

おれはリンが母親を早くに亡くし、父親との関わりも少なかったと気の毒がったりしたが、真実はおれみたいになしながらみに縛られないで、楽に生きれるんじゃないかと思ったりする。

正月なんかさっさと過ぎてしまえばいい。

早くリンのいる場所に帰りた。

正月三が日が過ぎて下見でもしておこうとT大学近くの駅前をぶらついていたら珍しい人にあつた。

2年先輩の美間坂さんと桐生さんだ。彼らは寮の先輩でもあるし、おれは勉強を教えてもらったりもした。

ふたりは恋人同士で、現在同棲しているらしい。

美間坂さんは実家からの帰りだとかで迎えにきた桐生さんと合流したところだつた。

「水川はひとりなのか？」

「はい」

「じゃあ、昼飯でも食おう。奢ってやるよ」

「でも……」

「真広が奢るなんて珍しいんだからご馳走になるといいよ」

「それじゃあ……お言葉に甘えます」

おれの言葉にふたりともきよとんとして、顔を見合わせていた。

「水川は……変わったな……宿禰の所為だな」

「そう……ですか？自分ではあまりわかんないけど……」

「かわいくなつた」

「昔は口を開くのも無駄みたいになつたからな」

「……愛想なくてすいませんでした」

頭を掻いて笑つたら、いきなり桐生さんが「か、かわいいなあ」

と、言い終わらぬ間にぎゅーと抱き締められた。

頭ひとつ以上違う身長差におれは逆らえなくてじっとしていたら、美間坂さんがぶっきらぼうに「おれにもそのぬいぐるみを抱かせろ」と、桐生さんに呟いてた。

おれはぬいぐるみか？…と呆れつつも、こつも容易く心を砕くことが出来るのなら、このぬくもりが優しいものであるのならば、おれはまだ色んなものを許していけるのだと思った。

17 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>

h /

宿禰慧一編「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>

h /

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768>

i

17、

長い正月が終わった。

名残惜しそうな母親の姿にも振り返ることもなく、そそくさと鎌倉の寮へ帰った。

翌日にはリンと初詣に行く約束をしている。

年末に別れて一週間程しか経っていないのに、一刻も早くリンに会いたい。

リンの顔を見たくてたまらない。

キスしたい。それ以上のことも…

禁断症状ってこんな感じなのかな。

それとも本当に色きちがいになってしまったのかな…

なんだっていい。

リンが傍に居てくれれば、おれは生きている喜びを味わうことが出来る。

翌日、初詣に出かける。

リンと会った途端、「ミナの顔を見たらしたくなつた」と、言葉、おれは自分の欲望を見透かされたんじゃないかとしどろもどろになってしまった。

すぐに良く二人が使うホテルでわけがわからなくなるほどやった。

リンはいつもと違って乱暴におれを抱く。

普段はもっと気を使ってくれるのにと、少し不安になった。

病み上がりの所為か体力の消耗はリンの方が酷くて、終わった途

端、おれの身体に突っ伏して言葉も出てこないほどに呼吸を乱す。

そのくせ少し元気になると、「ね、やるう？」と俺に笑いかける。

おれが断れるわけがないことを知っているから癪にさわるけど、

こつちだつて負けなくらい欲しがっているから伏せ目がちになりながらも嬉しくて堪らない。

今日のリンはおれを抱きながら何かに耐えているような顔を見せる。

おれを見つめていても、本当はおれを素通りして見えないものと対峙している…そんな気がしてならない。

おれはリンに対して何か崇高なものを感じてしまうことが稀にある。

背中の方は見えないけれど、リンは少しだけ人間離れしている。それがいいか悪いかは別にして、やはり彼は特別な者なのだろう…（彼の外見を見て判断する多くの奴等をおれはバカにしているが、実は彼の真実を見ぬいているのかもしれない）

一体全体何故リンみたいな奴がおれのような平凡を絵に描いた男を選んだのかは、未だにわからない。

リンは「俺がミナを選んだんだ。ミナだつて俺を受け入れてくれた。それは奇跡とも言えるし必然とも言える。だけど恋はロマンスックの方がいい。ならば深く味わつて酔つてしまおうよ。よりファントステックに…」

その顔じゃなきゃとても言えない台詞だ。

口からでまかせのところもあるお調子者のリンだから、おれも全部信じてはいないけど、彼のおれへの愛情は本物だと…そう信じる事が出来るから、おれも繋いだ手を離したくない。

恋は期間限定と誰しもが言う。

もし、リンの愛情が冷めたら、おれはどうしたらいいのだろう。泣き言を言つて困らせるのか、一生恨んでやると罵るのか、かっこつけてお互いに楽しんだよなと握手をして別れるのか…別れの場面などおれには見当もつかない。

ベッドの中、裸のまま寄り添っている。

ついこの間まで酷い高熱で大変だったんだと愚痴るから、てつきり家族と一緒にだと思っていたが、ご両親は居なくて、慧一さんがずっと看病してくれていたのだと言う。

それを聞いた途端、今まで感じていたリンへの愛情が変な気持ちへ変わってしまった。

無論愛ゆえの嫉妬に他ならない。

おれにとって慧一さんは鬼門だ。

体育祭の時のあの人のリンを見つめる横顔を見たときから、おれにはあの人がリンをただの弟としての愛情ではなく、恋人として…リンを欲しているのではないかとの疑念が、時間が経つにつれ確信となりつつある。

おれは慧一さんを近くで見たことも話したこともないけれど、あの人が心の底からリンがおれと付き合っていることを祝福しているとは、到底思えないんだ。

どう考えてみてもあの人にとってリンは特別な存在であるはずだ。リン自身がそれを言う。

いつだって慧一さんに対する恩や愛情を恋人のおれに余す事無くなく見せつける。

それほどまでに兄弟の愛情というものが厚いものなのかと、兄弟のいないおれは初めは珍しがっては見たものの、どう考えてもリンと慧一さんの間には、兄弟以上の絆が見えてしまうんだ。

リンと慧一さんの間に身体の関係があるとしても、それはそう驚く事でもない気がする。ありえると思わせてしまう。あの兄弟にはそれが違和感ともまた悪行とも感じさせない力がある。

リンが真実欲しいものは慧一さんじゃないだろうか…

おれは時折思ってしまう。

だけどそれを問いたただす勇氣などあるはずがないじゃないか。

もしそれを肯定され、おまえなんかいらなと言い出されたら、おれはどうすればいい。

本来の目的の八幡さまに御参りした後、帰り道を並んで歩く。
リンは一緒にT大学を目指そうとおれに言う。

おれは突然のリンの申し出に言葉を失う。

本当に？…本当におれと一緒に受験してくれるのか？

心の底から舞い上がる気持ちは抑えきれない。

さっきまでの不安な気持ちはいとも簡単に霧散する。

それがおれへの形ばかりの優しさであったとしても…

悲しみも喜びもいつだって、おまえがおれに与えてくれる。

おれはね、リン…

もうおまえから逃れられない囚人になってしまったんだ。

だから、もう…

おれはただおまえの一部分であり続けたいだけなのかもしれない。
離さないでくれ。

繋がれた手錠の鍵は失くしたままでいてくれ。

ねえ、リン、お願いだから…

17 (後書き)

「焦点」は終わりです。

次のミナ編は「フラクタル」です。

よろしくお願いします。

第3章 フラクタル 1 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>

h /

宿禰慧一編「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>

h /

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768>

i

第3章 フラクタル 1

フラクタル（全体と一部分は実は自己相似である）

1、

新学期が始まった。

最終学年、高校最後の年、そして受験の年。

おれとリンは同じT大を志望している。

リンは建築学科を受けると決めているのに、理系を選ばないでそのまま文系のクラスを志望した為、おれと同じクラスになる機会はゼロだ。そのわけを聞くと、今まで作った友人関係を崩したくないという事らしい。

理系でも沢山友人は作れるのと思うけれど、おれがとやかく口を挿むことでもない。

リンのクラスの担任は2年に引き続き、藤宮先生だ。

先生はリンの兄である慧一さんに、留守の間は自分の代わりにリンを見守ってやって欲しいと頼まれているそうで、リンもその事を承知している。

慧一さんは大手のゼネコンに就職したが、日本にはおらず、拠点はニューヨークらしい。

春休みにリンは慧一さんに会いに行っていた。帰ってきててもリンの様子に別段変わったところはなかった気がする。気がするだけで本当のことなんかおれがわかるわけがない。

あの兄弟ならなにがあってもおかしくない。怪しめばそれが真実になる。なにがあってもなくてもリンが口を割らなきゃおれはなにも知らなくて済む。…そう考えることにしている。

おれにしてみれば、これだって精一杯ポジティブな姿勢だと思っただけだ…

こんなに気を揉むのも、原因はリンにある。

あいつの貞操観念は緩い。

だとしても、恋人への守操義務は感じているらしく、おれ以外とはしてないと胸の前でさらっと十字を切ったりするけれど…あんまり信用してない。

リンは傾国の麗人的な気色があるから、彼が誘わなくても向こうがほっつてはおかないんだろうなあ。

だからリンが変な道に行かないようにおれはリンの重石にならなくちゃいけない。

しかし、考えたらバカらしい話で、リンの方が上背もあるし（このところ益々身長差がついてしまった）、腕っ節もあの細身から信じられないほどあるし（実際ふたりで夜街をうろついて何回か絡まれたことがあるが、口でかわせない時はリンはあつという間に武道で相手を投げ飛ばした）おれがリンの心配をするのは全くの筋違いなんだが、とにかくリンが心配でなくなるんだ。

それと同時に寄り添ってくるリンが愛おしくてたまらなく、どう考えても立場は逆なのにリンを守らなきゃならないという気になっってしまう。

だから思うんだ。

たぶん慧一さんはおれ以上にリンを守り愛してきた。そしてそれは今もこれからもずっと変わらないのだろうと…

おれはおれに対するリンの愛情を疑ってはいない。というより、リンはおれに対して誠実だ。

いつだっておれを笑わせ、喜ばせ、快樂を与えてくれる。

おれが貰った分と同じだけ返しているとは思えないが、リンはいつだって「ミナが一番だよ」と、言ってくれる。

勿体無い気もするけど、心底嬉しいのも事実だ。

おれの身の回りの話をするならば、同室の根本先輩は卒業し、第

一志望だった関西のD大学へ進学した。残された保井先生は健気にもその後を追い、今は京都の私立高校の先生をしている。

たまに根本先輩からメールがくるが、「保井がしつこくて困る」と言いながらもまんざらでもなさそうだ。

リンは「ネコには飼い主が必要さ。だが鈴を付けたって遊びまわるのを止めさせることは無理だろうね。去勢しない限り」などと笑っている。

保井先生にしてみれば、笑い事じゃないだろうと思うけど、リンが先輩みたいじゃなくて良かったと思うのは、誰にも言えない本音だ。

三年になってヨハネ寮のふたり部屋のルームメイトは三上になった。

三上は宿禰の親友だし、おれとリンを応援してくれるからおれには都合がいい。

お互いに恋人の愚痴を言い合ったりしている。

おれとリンが恋人同士であることは、大部分の学生達が知るところとなってしまうている。

ひとりで廊下を歩いていて知らない生徒から指を指されることもよくある。

影で噂されていることも問い詰めなくてもわかる。

内容はだいたい…リンにはおれみたいな奴は相応しくないということらしい。

リンは特に下級生には圧倒的に人気がある。

入学式や卒業式のために、リンは部の代表として詩を朗読するわけだが、それがいつも好評を博しているんだ。その所為か、リンが部長をする「詩人の会」の部員は例年より大幅に増えている。

クラブの中で「宿禰凜一愛好会」なるものが非公式に作られ、日毎リンを崇拜する詩を作っているとかいないとか…どうでもいい噂

が後をたたない。

リンは「そんなに人気があるなら夜道には気をつけなきゃならいな。マジでストーカーに合いそうじゃん」と、本気とも冗談ともつかないことを言っただけで笑っている。

「ただどみんな俺の前ではおとなしいもんだぜ。一応、俺のミナに手を出したらただじゃ済まないからな、とは脅しといた」

「いや…それは…大丈夫だろう。ここは進学校だし、結構みんな真面目だからさ」と、言っていると、リンは腹を抱えて笑い出した。

「一番真面目な奴はミナだけだな。ついでに言っとお前は知らないだろうが、ミナを狙っている奴は結構いるぜ。注意しろよ」

「…まさか」

こんな平凡なおれに誰が興味を持つと言っただろうか。ありがたいくない冗談だ。

おれの担任は生物の藤内先生だ。

おれは化学と物理を選択しているので直接教えてもらうことは少ないが、たまに生物準備室へ行き、自慢のコーヒーを頂いている。

おれがリンと付き合っていることは知っている様子だが、それについては一切触れてこない。おれにとっても都合のいいことだし、そういう話題をしなくていい空間が居心地良く、つい長いをしてしまう。

リンには散々「藤内先生には気をつけるよ。おまえに気があるのがみえみえだ」と、言う。

3年になっても時間があればおれ達は陽が落ちるまで温室で過ごす。

温室の管理担当の藤内先生からは、表向きは温室の植物の世話役という名目を貰っている。先生はおれ達がここで何をしているのかも知っているのかもしれない。

…想像通り、ロクな事はしていないけれど…

「そんな言い方失礼だよ。先生は生徒としてしかおれを見てないよ」

「俺はあの先生は苦手だ」

「どこが？」

「なんて言うか…敵意を感じるね。というか、嫉妬だな」

「え？」

「ミナをものにしちまったからさ。嫌われてるんだよ」

「…」

「俺はこう見えて案外敵が多いんだぜ？見てくれがいいとそれだけでやっかむ奴も出てくるしな」

「そういう態度が無駄に敵を作るんじゃないか。それにリンは外見だけじゃないし…中身も綺麗だもん」

「…それ甘えてるの？」

「違うよ」

「あんまりかわいい顔するなよ。特に、藤内の奴にはそんな顔見せるな。襲われるぞ」

背中からぎゅっと抱きすくめられ、首筋にキス。一瞬息が止まる。

温室の窓を開け放っているから、外から覗かれないようにおれ達は温室の隅でそっと抱き合う。

植物の青臭さなのかおれ達の臭いなのかわからなくなるほどに、お互いを求めては絡みついて離さない。

「ミナ、愛してる…」

吐息まじりに耳元で囁かれると、未来なんてどうでもよくなる。

身体を回して今度はおれがリンを求め番だ。

「おれも…リンが…好きだよ…愛してる…」

3年になってもおれ達は温室と言う閉じられた空間で甘い蜜を味わっている。

まるでとり残された巣窟だ。せめて秘密の楽園と言えよ。この温

室は砂漠の幻の都だ。選ばれた者しか見えないし、入る事もできない。千夜一だ。懐かしいね。最初の頃を思い出す。リンの作り話はどれも胸が躍ったよ。格別だった。姫がお望みならいつだって語り聞かせますよ。…ねえ、リン。なに？千夜たつてしまったら、その先はどうなるの？知らないのか？ミナ。王様と姫は仲むつまじく幸せに暮らすのさ。話が尽きても？勿論。その先は自分達で話を作るんだよ。千夜一夜の一夜つていうのはその先を意味すると俺は思っているんだ。それは、おれに語らせてくれないか？リン。…ああ、どんな話でもミナが語ってくれるなら…俺は傍にいるよ。

アラビアンナイトが作り話だという事ぐらい、おれは知っている。

2 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>

h /

宿禰慧一編「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>

h /

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768>

i /

2、

夏休みが近づいた。

リンと俺は暇があれば顔を合わせる。

やることは決まっているが、さすがに目の前に迫った受験の嵐には到底逆らえようもなく、他に聞に漏れず勤勉になる。

リンはこちらが引くぐらいに気合を入れて勉強に打ち込んでいる。特に英語への意欲は半端なく、TOEFLのスコアも八割は超えている。

留学するつもりなのかと問うと、曖昧に「そうなるかも知れない」とかわす。

大学も一緒に行くと言ったじゃないかと責めると、「勿論そのつもりだよ。でも俺、建築家になりたいんだ。将来は兄貴と一緒に独立した事務所を持って共同でやっていきたいって思っているんだ」と、言う。

それではおれはどうなる？おれはリンと一緒にの仕事はできないし、離れてしまわなきゃならないのか？…リンは困った顔をする。「俺の勝手な予想図だよ。未来なんてわからないだろ？今はミナと一緒にいることが、俺には大事なんだ」

そう言っただけで柔らかくおれを抱き締めるリンは卑怯だ。

反論なんか言えなくしてしまっから。

夏休みが始まった。

だが生活はあまり変わらない。

寮と学校への往復の繰り返しだ。

三年もなると補習は朝から夕方までぎっしりと詰まっっていて、余暇なんてまるで無い。

周りもそれが当たり前のように励むから、おれも取り残されないように机にしがみつく。

リンは「ミナは勉強しなくても余裕でトップじゃん」と笑うが、トップはトップなりの意地とプライドがある。

大体そういうリンがおれにとっては目下一番のライバルなのだ。彼は上位五位以内に食い込むほどに成績が伸びている。

他の事は置いといても勉強ぐらいはリンに勝っていないきゃおれの存在価値というものが損なわれるというものだろう。

今日も朝から蝉の声をBGMにチャート式を広げる。

昼からはエアコンが入る教室も、午前中はなんとか凌げるだろうとエコ節電だ。

いやもう充分汗が流れているんですが…私立のクセにケチるなよ、と隣の奴が愚痴っている。

右に同じだが、凌ぎやすい午後は大量に眠りの森で遭難するから、こちらの方が受験戦争らしいじゃないか。

ぼんやりと外を見ると、中庭の噴水も形ばかりだが水を上げていく。水不足でもないのに、蛇口を絞めた所為か、今日は勢いが無い。勢いは無いが噴水としての責任なのか、暑さを凌ぐ為とばかりにその役目を果たそうとしている。その懸命さがなんとも可笑しくて口元が緩んだ。あれはおれに似ていないか？

教壇へ目を移す。

古文の和歌が黒板に書かれ、その横に文法が事細かく記されている。

理系であっても国立のセンター試験では国語は必須である。あまり得意ではない古文の補習にも参加しなきゃならない。

教壇の上では古文担当の藤宮先生が和歌集の抜粋をあげて説明をしている。

「きみにより思ひならひぬ世の中の人はいこれをや恋といふらむ。この意味は？誰かわかるか？」

手を上げた生徒を指し、その答えを聞く。
聞かなくてもこれくらいならわかる。

「…まあそうだな。あなたのおかげで知ることが出来ました。世の中の人はいこれを「恋」と言うのでしょうか。と意識するがこの裏にはもっと深い意味がある。」

この作者は在原業平だが、彼は男前で恋多き人だ。女は勿論男にもモテたそうだが。その彼がこの恋こそは真実の恋ではないだろうかと苦しい胸の内を吐くんだ。真実の恋とは突き詰めると苦悩の連続なのかもしれない」

藤宮先生は何を思ったか、おれの方をちらりと目をやり、すぐに黒板へ向かった。

真実の恋は苦悩の連続か…

おれは…苦しい恋をしているのかな。

それともまだ苦しみが足りないのかな。

いや、この恋は真実ではないのかもしれない。

だとしたら、「真実の恋」になるにはどうしたらいい？

リンはおれとどうなりたいのだろう。

リンはおれと歩く未来を想像してはいないのだろうか。

いや、リンばかりに任せるんじゃない。

「恋」はどちらかが傾いてはいけない。

ちゃんと釣り合っていないきゃ、負担になる。

それは恋の苦悩とは違う苦しみになる。

週末はリンのマンションに出かけるのも日課となる。

一緒に食事の用意をするおかげで、おれも料理のレパートリーが増えた。最も主な味付けはリンが担当するから、おれの味とは言え

ないのだが。

目の前でおれの作った明太子スパゲティを美味しいと喜んでるリンがかわいい。材料を混ぜただけなんだが…

「夏休みはずっとこっちに居ようと思っていたんだけど…」

「どうした？」

「かあさんが勝手に予備校の夏季講習に申し込みやがって、5万もかかったから絶対受けろって言うんだ。横暴すぎるよ。おれはこの補習で充分なのに」

「そんなのは口実さ。かわいい息子に帰って欲しいからに決まってるだろ？たまには帰って顔をみせてやれよ。後で後悔するぞ」

「…リンはいいね」

「何が？」

「自由だもん」

「俺だって心配してもらいたい親が欲しいと思うことがあるよ」

「そりゃ…そうかもしれないけど…親の愛情って重すぎると反抗しなくなるよ。縛り付けるなってなる。リンはならない？」

「え？何が？」

「慧一さんはリンをとて愛してるだろ？その思いって親と同じじゃないか。重く感じたりしない？」

「…昔はそういうこともあったね。反抗期だった頃かな。いちいち干渉するなって腹が立ったよ。兄貴は本当に心から俺を心配してくれているのにさ…それをわかっててもその時はうぜえってなつたよ。今のミナと同じだな」

「そうだよな」

「でも…今は俺への愛情がどんなに深くても重荷には感じない。受け入れてしまえる器が出来たって感じかな。居心地いいよ」

「そう…」

穏やかに笑うリンがいる。

リンはこんな顔で笑っていたかな…

その顔を見ていると、なんだか胸が苦しい。

彼はおれを愛してくれているのだろうか。

慧一さんの愛を受け入れる器があるといった。

おれの愛を受け入れる器は…慧一さんよりも大きいのか？

それとも…

痛い…苦しい…

これが真実の恋であるのなら、おれは幸せなのかもしれない…

月曜の放課後、温室へ行くとリンがリボンタイを手に持っていた。どうしたの？と聞くと、クラスメイトとじゃれていて、倉庫の窓の釘に引っ掛けて破れてしまったんだ、と言う。

「もう使えないな」

「そうだね」

おれは赤いリボンタイの破けた部分を確かめた。

縫ったらどうにかかなりそうだけど…さすがにリンがミシン掛けをするとは思えない。

「そうだ、いい考えがある。ミナ、手を出してごらん。左手」

「え？」

リンの言うままに左手を出した。

リンはおれの手首に破れたリボンを一度巻いて結び、その残りを自分の右手に結んだ。

繋がれた手を呆然と見ていると、リンはにこりと笑い、

「ほら、運命の赤い糸の代わり、赤いリボンだ。これでミナとは離れられないね…なんてね。ガキっぽい？」

「…」

窓から差し込む夕日に映えたリンの身体が眩しすぎたのだろう。

胸が詰まって言葉が出ない。

こんなもの子供だましたと、とても笑えない。

おれはただ…

ふたりを繋ぐ赤いリボンが、一生結びついたらままでいたらと…
それだけを願っていた。

> i 9 4 5 6 | 2 7 3 <

3 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>

h /

宿禰慧一編「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>

h /

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768>

i /

3、
その夜、寮に帰ったおれは、夜遅く、同室の三上が眠ったのを確認して、隠しておいたリンの破れたリボンタイをそつと机の引き出しから出してみた。

あれから、俺たちは結び付けられたリボンにお互い身動きが取れないと閉口しながらも、楽しんだ。

二人並んで座り、おれはスケッチを、リンは読書をしようとする。絵を描くにもつい左手を動かすから、そうなると隣で本を読んでいるリンがぎゃつと叫ぶ。ページを開こうとした手が弾かれて、破いてしまったのだ。

「どうする？これ図書館の本だぜ？」

「テープじゃ駄目かな？」

「逆に目立つな。このままにしておくか。破れたといってもちよつとだしな」

「…いや、十センチは重症の部類に入る。だけど、本が本だろ。誰も埒谷雄高なんか読まないよ」

「そうか？コレ、アングラではウケてるって話だぜ。確かに難解だが、俺みたいな異端者には丁度いい」

「…」

自分のことを異端って言うリンが可愛かった。

その後、まあ、色んなことをしている最中も、繋がれているリボンが何をするにも邪魔になった。

片腕しか使えないことの不自由さは勿論、繋がれた方の腕はふたりで協力しなきゃ快感も得られないなんて…やってる最中、なんでこんな不便なことをしているんだ？この縛り付けているものを外す

のは簡単じゃないかと、恨めしげに口にしたが、リンは一向に構わなかった。

片方の腕だけで器用におれの腰を抱くと、そのまま混ざりこんだ。「手首も身体もお互いを結びつけ欲を食い散らかしている。こういうのを一心同体っていうのかね」と、悪どい顔でねめつけ、おれの目じりを舐める。

皮肉のひとつもこの状態で言えるわけが無い。

片方の腕でリンの背中に必死でしがみ付く。

燃える吐息が夏の最後の夕暮れで紅く見える。

あれは情念というものかも知れない。

帰り際、リンとおれを繋いだリボンを解き、リンは一瞥も無くゴミ箱に捨てた。

おれはリンには黙ったまま、このリボンを拾って自分のものにした。

今はもう薄っすらとしか残っていない左手首の痕を撫でる。

明日には消えてしまうものだが、この肌に甘い痕が刻まれてしまったことに違いは無い。

これだけじゃない。おれの身体の至る所まで、リンという人間の情念が刻み込まれている。

それに触れるだけで、たちまちのうちにおれの肌は燃え上がる様に、作り変えられたのだ。

別に後悔はしていない。

が…

リンは…一体おれという人間をどうするつもりなのだろう。

八月になって、おれは世田谷の実家へ戻った。

両親は久しぶりに息子と暮らす日々を味わいたかったのか、喜び

を隠しきれないでいる。

おれの部屋のエアコンは新しく買い換えられ、部屋の隅にコンパ
クト冷蔵庫まで置かれてあったのには驚いた。

「階下まで降りなくていいようにね。青弥の勉強の手を止まらせち
やいけないもんね」と、ペットボトルを冷蔵庫の中に入れつつ、母
親は自慢げに言う。

愛情のベクトルが何か間違ってるんじゃないか？

…まあ、いいけどさあ…

こういう場合、家に居ても落ち着いて勉強なんぞしてられるか…
と、なるから、朝早く自宅から脱出して図書館へ直行。時間が来れ
ば夏期講習の為に予備校へ通う。終わったら、残って自習か、街を
ふらつき、夕食ぎりぎりに帰宅する。

夏期講習には中学の時の同級生の顔がちらほらと見えたりもする
が、お互い会話をするわけでもない。それはそうだろう。ライバル
関係以外の何者でもないのだから。

盆も近まった或る日、予備校のロビーで掲示板を見ていたら「水
川？」と、声を掛けられた。

振り向くと懐かしい顔があった。

「桐生先輩！」

「この夏期講習を受けていたのか？」

「はい。母親が勝手に申し込んだんですよ。それより先輩はどうし
てここに？」

「俺はこのアルバイト講師。折角だし、時間があるなら話でもし
ないか？昼飯まだだろ？おごるよ」

「はい。ご馳走になります」

人見知りのおれだけど、穏やかで外連味の無い桐生さんには何故
か逆らえない。

強がる振りも自分を飾ることも、この人には通用しないというか…

結局は大人ってことなのかな…

近くのファミレスでランチを食べた。

先輩の恋人の美間坂さんはお盆が近いので、京都の実家に帰省していると言っ。

美間坂さんの実家は大きな総合病院で、美間坂さんは跡取りなのだが、本人は継ぐつもりはないらしい。

「先のことなんてわからないよ。特に男同士の付き合いなんてさ、証なんて何ひとつないんだから、感情が違えば簡単に別れられる」

「…根本先輩も同じようなことを言っていました。だけど意外だな。」

桐生さんは美間坂先輩との付き合いをそんな風に考えているんですか？一緒に住んでいるんでしょう？それでも不安になりますか？

「いつだって不安だよ。世の中に不安のない恋愛なんてあるのかな？それは男女の結婚でも同じだろう？他人同士が愛によって一緒にいるということは、不安定なものなんだよ。それでも男女だったら家族ができる。それは血の繋がりになる。一種の聖域だな。…残念だが俺達には持てないものだ。それでも人は愛を求め、それでしか生きれない俗物でもある。だから、美間坂に愛されている限りは付き合っていくつもりだが…だが、世間の事情って奴が美間坂を壊すというのなら、俺は自ら引くことには拘らないよ」

「…諦めるんですか？美間坂さんを」

「愛を貪っているばかりでは生活は成り立たない。俺だってこうやってバイト費を稼いでいるんだ。授業料以外に親に世話にならなくていいようにね。本当はゲイの息子に授業料だってやりたくないのさ。だけどこんな息子でも血の繋がりがあるのだから、仕方ないのだろうね。幸せになりなさいと言っ」

「…」

「充分にありがたいと思っっているよ」

「おれは…恵まれすぎているのかな。今の今まで親に有り難味を感じたことはなかったけど…」

「目の前に出された食べ物が多量に好物でも、押し付けられると美味くは感じない。人とは全く持って複雑だね。水川は間違っではないよ。愛情とは自分の感情だ。その感情の表し方は一様ではない。友情、恋、家族愛、憎しみ…どれも愛には違いない。愛するなと言つのは構わないが、それを受け入れるかどうかは本人にしか決められない。その逆も然り」

「…」

桐生さんの言葉はどれもこれも俺にはなぞ掛けのようで釈然としない。それでも否定する気が起きないのは、どこかで受け入れてしまっているからだろう。

この人は大人だ。俺にはわからないこともこの人にはわかるのだろうか…

「桐生さん」

「ん？」

「リン…宿禰のことなんですが…」

「リンって呼んでるんだろ？リンでいいよ」

「おれにはリンがわからない。リンはおれを愛してると言っけど、リンの語る未来におれの姿は無いんです。それって…おれと一緒に生きていく気はないってことでしょ？勿論、桐生先輩の言うとおり、恋に保障なんてない。感情だって移り変わるものだ。だけど、おれは、おれにとつてリンは今まで生きてきて一番大事な…何事にも代えられない人で、この感情ももう他にはありえないくらいリンに繋がれていて…これを失ったらおれは…生きてはいけなくらいに思っているのに…。リンは違う。おれを愛していると誓うのに、おれみたいに必死じゃない。おれがいなくても…」

リンには慧一さんがいる。

切っても切れない血の繋がりが。しかも家族愛だけではなく、彼らには…愛という情念がある。

おれは…ふたりの絆の強さにどつしても勝てる気がしないのだ。

4 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>

h /

宿禰慧一編「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>

h /

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768>

i

4、
「…水川は俺のことをどう見ている？」

「え？」

「真面目な優等生…って思ってたない？」

どう見たって桐生さんは品行方正にしか見えないけれど…

「はい、思っています」

「今はそう見えるかもしれないけど、高校に入るまでは目も当てられないぐらいに荒んでいたよ。家庭環境の所為もあるけど、どこかで自分を壊したかったんだろう。悪い奴らとつるんで多少の悪事にも加担したり…家出をしては連れ戻され、恨めしいと泣く母の顔を見るのが辛くてまた家出をするの繰り返し。未来なんか見えなかった。…俺を救ったのは社会人の男の人でね。俺はまだ14、5のガキで相手は二十以上も離れた大人ではあったけれど、俺達は愛し合っていた。本物の恋をしていたよ。でも、彼が海外に転勤が決まって…当然別れ話になった。俺はどこまでも付いて行くって必死で頼み込むが向こうは許さない。道理だろうけれど、その頃の俺には彼が居ない世界なんて考えられなかったんだ。高校一年の夏だったよ。捨てられたと思い込んだ俺は自暴自棄になった。寮生だったが学校もサボって街をうろついては誰とでも寝ていた。学校の先輩とも誘われれば抱かれていたよ。そういう俺を美間坂は見るに耐えなかつたんだろうな。寮の同室でクラスメイトでもあったから…彼は俺を裏庭に引きずりこんでこう言った。『俺はおまえを軽蔑する。おまえは自分の価値さえ測ろうとせず自分を貶めるくだらん奴だ。俺の目の先におまえのような奴がいるのが俺には我慢ならん。粛清してやる』って脅すんだ。俺は何されるのかわからずにビビるばかりでね…」

温和な桐生さんからは想像もできない過去だった。

綺麗に整った容貌、それでいて控えめで大きな怒号ひとつ声に出すこともない。闊達で有無を言わさぬ美間坂さんの後ろにそっと控えている姿しか俺には思い浮かばない。

「怖くて震える俺に真広はこう言った。『そんなにセックスがしたいのなら、俺がおまえの相手をしてやるから他の奴とはやるな。俺は男は初めてだが、おまえなら勃ちそうだから抱いてやる。俺と付き合ってマトモな人間になれ。俺がおまえを救ってやる』って……」
「……それはすごいな……美間坂さんってそこまで暴君だったんですか？」

「そうだよ。笑えるだろう？でも、俺にはその力が必要だった。だから真広は身を挺して俺を救いあげたんだ。そこに愛はあったんだろうか……いや、真広の思いは俺への哀憐と同情だっただろう。俺だってそうさ、真広を愛して付き合い始めたわけじゃない。その時は真広に救われたけれど、俺は俺を捨てた男をずっと慕っていた。それを白状しても真広はかまわないと一蹴するんだが、俺は真広だけを愛せない自分を責め続けたよ。真広だけに繋がりたいと願うのに、心のどこかで未だに彼のことを思い続けている……そんな自分が許せなくて別れてくれと頼んだこともあった。けれど真広は決して手を離さなかった。『どんな千尋でも俺は受け入れてみせる』って言うんだ……俺は幸せだと思っ？」

「思います。だって本当の愛を桐生さんは与えられている」

「だけど、俺は真広に与えていない。お互いにすべてを与えないと本物じゃないのかな……本物じゃないと一緒に生きられない？」

「……わかりません」

「慈しみあう愛は恋のように激しくは無いが、優しくなれるものだよ、水川。俺はね、昔の宿禰を知っている。

彼を見たのは『サテュロス』っていうジャズクラブだ。去年の体育祭に来てた連中だけ……知ってる？」

「はい、ちらりと見かけたけど、言葉は掛けられなかった。なんか

…太刀打ちできない雰囲気だったから」

「だろ？彼らは独特なもの。でも中学生の宿禰は全く違和感なく溶け込んでいた。と、言うか、他の誰とも違った存在だった。彼は誰も寄せ付けない孤高でありながら、欲をそそる魔女みたいに魅惑的だった。俺も遠目から眺めるだけだったよ。彼は特殊だと言える。」

あれが水川のことを遊びだと言えはそうだろうと誰もが一笑して終わるような性質たちだったよ。だけど、今の宿禰は昔とは違う気がするんだ。水川の言うように百パーセントの愛情ではなくても宿禰が水川を愛しているのなら…それは本物になる可能性もある。勿論先のこととは俺にもわからないけれどね…彼を信じ続けられるかどうかは…水川次第だよ。もし傷つくのが怖いなら、水川から別れを切り出せばいい」

「…おれから手を離すなんて…無理です。そんなこと…できやしない」

「…だったら水川、宿禰を信じることだ。もしかしたら、宿禰が求めるものを水川は持っているのかも知れない」

「リンが求めるものって…なんですか？」

「当事者でもない俺がわかるはずもないだろう？それを見つけたことが水川のやるべきことだろう。それは君を…救うことになるんだろうからね」

桐生さんのくれた宿題は難題だった。だがおれはそれを解き明かさなければならぬ。リンを失わずに済む何かを探し出せなきゃならない。

おれは最後に桐生さんに問うた。

「もし、今、昔の彼が桐生さんの前に現れたら…桐生さんはその人を選ぶんですか？」

「…いや、もう俺には真広の存在の方が大きくなってしまっている。だけど…まだ彼のことを思い出しつづいてしまう程に整理もついている。情も潜んでいる。それがいつか結晶になった時、俺の胸からそ

れを取り出すのは真広の手であって欲しいと願っているんだ」

「青弥は彼女でもいるの？」

「え？なに？唐突に」

夕食のテーブルで母親と向かい合って食事を取る。

父親はいつもの残業で帰宅するのは10時過ぎだ。

「だって帰ってくるたびどこか大人びてる気がするから」

「…別にいいよ。おれ受験生だよ。勉強でそれどころじゃないし

…」

「それはそうだろうけれど…彼女が出来たらお母さんにも教えてね。どんな子が楽しみにしているわ」

本当のところは…真実なんか何ひとつ聞きたくないんだ…

言ってもわかるまい。

おれにもわからないよ。なんでこんなにリンを好きなのかって。

お盆も過ぎ、寮に帰る日の昼近く、携帯のベルがなる。
着信音でリンだとわかった。

「リン？」

『ミナ、まだ家に居る？』

「うん」

『今日、寮に戻るんだろ？』

「昼から帰るつもりだけど…」

『俺、おまえの家の近くまで来てるんだけど、今からそっち行っ
ていいかな？』

「え？ええっ！いい、家に？」

『うん、で、一緒に鎌倉に帰らないか？…なんか都合悪い？』

「い、いや…いいけど…あ、場所わかる？」

『うん、大体…住所がわかってるから行けると思うよ。じゃあ、次

の駅で降りておまえんち探すわ』

切れた携帯を暫く持ったまま呆然とする。

リンが…ココへ来る…

え？

なにをどうすりゃいい？

慌てて階下へ降りて母親に告げる。

母親も驚きながらも、訝っている。

そりゃそうだろ。おれが友人を家に招き入れるなんて生まれて初めてかも知れないんだから…

しかも…そいつはおれの恋人で…

「その子ってどういう子？寮の子？クラスメイトなの？成績は優秀なの？志望大学は？お昼は食べるのかしら？ねえ、青弥、何か用意しなきゃならない？てんやものでいいの？それとももっと上等の？」
あまりにも俗悪な審問にウンザリだ。

おれはまだ見ぬ客を値踏みする母親を唾いながら、こつそりと呟く。

おれのリンはこの世で最も美しく誰にでも誇れる比類ない恋人であり、

おれ達は不健全性的行為をこの上なく楽しんでいる関係ですよ。

十分後に玄関に立ったリンの姿に見惚れた母親は、言葉も出なかった。

「これ、つまらないものですが、お盆で実家に行ったので。金沢のお土産です」と、リンは愛想笑いを浮かべて紙袋を母親に渡した。

母は恐縮しリンから受け取る瞬間微かに手が触れると、舞い上がった母はお土産の紙袋を落すというTVでしか見たことのない一連のリアクションを披露してくれた。

おれはもう我慢できずに、声を出して笑い転げた。

5 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>

h /

宿禰慧一編「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>

h /

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768>

i

5、
昼飯は豪勢にうな重が出てきた。

二階のおれの部屋に運んできた母親は、さつきと違ってしつかりお化粧直しをして、リンに愛想を振りまいていた。リンは慣れた調子でそれに応え、上っ面だけのふたりの会話に、俺は閉口した。

「よくあんなどうでもいい話に付き合ってられるな」
痩せたうなぎを口に入れるリンをおれは眺めた。

「なんで？いいお母さんじゃないか。ミナはあのお母さんのどこに文句があるんだ？」

「文句って…別に無いけど…」

「急にお邪魔したのに高いうなぎまでご馳走してもらって悪かったね」

「母さんのあんな…顔初めて見たよ。母もイケメンには弱かったんだな」

「ミナのお母さんに気に入られる顔で良かったよ」

「けどなんで急にうちに来こうと思っただけ？」

「ああ、昨日鳶谷さんのマンションに泊まっていたの。で、ミナが今日寮に帰るって言ってたのを思い出して、それで行こうってなったの。鳶谷さんあげるはずのお土産をミナン宅へ持ってきたってわけ」

「あ、そう」

鳶谷さん^{とぶち}ってのは、リンの行きつけの新橋にあるジャズクラブのマスターで、リンを息子のように可愛がっているらしい。去年のうちの体育祭の時にちらりを見ただけで、渋くてかっこいいおじさんだった。いわゆるちょい悪系親父で、しかもゲイだ。

リンが鳶谷さんのマンションに良く泊まることは知っているけど、

彼らの関係がどこまでか…なんていう下世話な憶測はしたって仕方ない。

リンはおれ以外とは寝ていないと言うが…

彼は別の言い方もする。

『嘘も方便というが、それは相手による。真実を話すということ裁判では原則ではあるが、果たして日頃の付き合いにおいて、真実だけで上手く人間関係が続くのだろうか。特に恋人同士において、お互いが聞きたくない真実を伝えるのはどうだろう…良く人は言う、だって本当のことだから仕方ない。だけど、言わなきゃ済む話も沢山あるはずだ。悪意でも好意でもなく真実を伝えるのは報道だけでいい。個人のやりとりにおいて優しい嘘は必要だよ』と、リンは言う。

だから…リンが寝ていないと言ってもそれは彼にとってはおれに對しての「優しい嘘」にもなりかねないという事だ。

本当のことを言うなら、リンがおれ以外の奴と寝るのは当然気分のいい話じゃないし、ムカつくのは当たり前だ。

だが、結局のところ、リンが他の奴と寝てもそうじゃなくても、おれがリンを好きでいられるかどうかって話なんだ。

そして、おれはリンが他の誰かと寝ていても、おれがリンから離れられるわけがないっていう真実を誤魔化せないっていう事なんだ。

「金沢って…実家に帰っていたの？」

「うん、今年はお袋と梓が13回忌と7回忌なんだ。で、お盆にまとめて法要しようって話になってさ。段取りは親戚連中がやってくれるんだが、さすがにまかせつきりってわけにはいかないだろう。親父も兄貴も日本にいないんだから、俺が挨拶回りやらなんやらしなくちゃならない」

「へへ、旧家って大変なんだね」

リンの実家は金沢で代々営む古い造り酒屋で、昔は地元の名士だった。それこそ今でも地元で蔵元さんの名前を知らない人はいないという。

リンのお父さんは長男で跡継ぎを期待されたのだが、商売が性に合わなくて、弟さんが跡を継がれている。昔ほどの勢いはないが、堅実に造り酒屋を継承しているらしい。

「普段はあまり親戚の付き合いはないけど、法事は個人的に済まされないしなあ。まあ、俺は別にかまわないけどね。いい子のフリは得意だ」

「お継母さんも来たのか？」

「勿論。和佳子さんも人付き合いも上手いからね。五月蠅い親戚連中も文句は言わない。だけど法要が済んでからがまた大変だ。例の家族旅行に付き合う羽目になる」

「また？ いいね、今度はどこの温泉？」

「金沢から和倉へ行つて…それから、別れた。向こうは向こうで勝手にやってくださいってことで、俺と兄貴は別行動で、那須のペンションで過ごしてた」

「慧一さんと…ふたりで？」

「…そうだけど。なに？…なにか引つかかる？」

気が引ける態度をとるならまだしも、リンはなにかを企むかのような挑発的な態度を取る。しかもそれに触れたらこちらが絶対火傷をしそうな気がしてならないから、聞きたいけど聞けない。それさえも計算に入れているんじゃないかと思わせる…そんな素振りなんだ。

迂闊に慧一さんと何かあったのか？なんて…絶対こっちから聞くもんか。

母はリンのことが気になるらしく、階下に降りる度に、リンの事を事細かく聞く。

「ね、宿禰くんは頭いいの？」

「いいよ。宿禰は俺と同じＴ大を受ける予定だよ」

「そうなの？あんなにハンサムで頭もいいんじゃない？モテるでしょうねえ」

「後輩の子らにも人気だよ」

「天は二物を与えるってああいう子を言うんでしょうねえ。親御さんも嬉しいでしょうねえ」

「宿禰は…お母さんは小さい頃に亡くなっているし、お父さんは外交官で外国に居るから…独りで暮らしているんだよ」

「そうなの？…じゃあ、青弥が色々と力になってあげたらいいわね」
「…そうだね」

と、おれは苦笑い。

夕方、おれ達は自宅を出た。

見送る母はいつもより長く玄関先で俺たちを見送っていた。

「ありゃ、ミーンハール魂に火がついたかね。リンの追っかけでもやりかねない」

「俺、どこでもオバサン達には可愛がられるんだよ。ニューヨークの慧のアパート連中からも色々貰ってたもん」

どこに居てもリンはリンでしかないのはわかっているが、恋人としてはちょっぴり恨めしいのも本音だよ。

リンとおれが自宅界隈を歩くのも初めてだが、こういう時は何故か奇遇というか運命と言うか、へんてこりんな歯車が噛み合うようで、駅の近くで、ばったりと会ったのが、中学時代付き合ってた原田理香子で、その隣に彼氏らしい男性と一緒にだった。

声を掛けてきたのは向こうからだ。

「水川くん、久しぶりだね」

「あ、…ああ、こんにちは」

にこやかな笑顔にこつちもやましいものはないから会釈で応えた。手に持っていた大きな目の旅行カバンを見て、彼女は「今から旅行？」と、尋ねる。

「いや、鎌倉の寮へ帰るところだよ」

「ああ、そうか…こちらは…お友達？」

リンを見て少し恥らうように顔を傾げる。

リンを見る人はみんなこういう顔をするなあ

紹介しようと口を開きかけたその時、リンは一步前へ進み、手をしながら彼女の質問に答える。

「初めまして。宿禰といいます。水川くんとは同級生でして、彼は成績バツグンなので色々と教えてもらっているんですよ。今日も水川くんの御宅にお邪魔して勉強していたというわけです」と、強制的に原田と握手しながら、相変わらぬの営業スマイル…つつか…水川くんってさあ…

「水川くんの中学のお友達ですか？お綺麗ですね。で、そちらは？」
握手された手を慌てて引っ込めた原田は、おれの方を向いて隣の男の肩を叩いた。

「森山くんだよ。ほら、覚えてない？中学の時の…」

「そうだったけ？」

あからさまに不機嫌そうなその顔を見つめるが、全く思い浮かばない。

「いいよ、理香子。水川は昔から他人に興味がない奴だったから、俺のことも覚えているわけないだろ。それよりもう行こうよ。映画の時間に遅れるよ」

「そうだね。じゃあ、水川くん、宿禰…さん。さようなら」

リンの顔を見て明らかに顔を赤らめた原田の頭を小突く彼氏を見送った。

勿論なんの感傷もない。彼女らが上手くいけばいいなどは少しは思っただけだ。

「俺たちも行くのか？」

幾分いつもより優しいリンの声に促されて、駅の構内へ歩き出した。

平日の夕方、仕事帰りの人ごみの中、上りの電車を待つ。

「あれがミナの言ってた昔付き合ってた彼女なのか」

「何故そう思う？」

「勘だよ。それにミナの好みの顔だ」

「そうかな…おれは自分が面食いだとは思わないけれど、リンの顔を見ているとつくづく綺麗に出来てて、ずっと見てたいなあって思ってしまうよ」

「…おまえ…さらっと惚気るなよ。ここがプラットホームじゃなかったら押し倒しているぞ」

「え？おれ惚気たのか？」

「ばーか。だからミナはかわいすぎる。このまま寮に無事に帰れると思うなよ」

「え？」

「まずは俺のマンションへ直行だ。誘ったのはおまえだからな。嫌とは言わせない」

「言つもんか」

だって、今日、リンの姿を見た時から、ずっと身体が疼いて仕方なかったのは真実だよ。

絶対言わないけれど。

込み合う人ごみに紛れ、微かに触れる程度に指先を絡めて、おれ達は家へ帰る電車に乗り込む。

>
i
9
5
1
3
|
2
7
3
<

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0724i/>

愛しき人へ...

2010年8月1日20時25分発行